佐久考古学会会報No.1

佐久考古

昭和48年11月

長野県佐久考古学会

佐久考古学会

○　発刊にあたって

永年の念願であった連絡紙「佐久考古」が発刊されることになりまことに御同慶にたえません。連絡紙は学術誌ではなく、会員が気やすく発表でき、意見の交換のできる広場であります。私たちの調査・研究を文章表現することはお互の発表、表現の伸展の機会でもあり、まとめをすることにもなります。常々考えていること、発表したいこと、まとめたいことをどしどし発表する場であります。

長い間、ほしいと待望していた子ども「佐久考古」が生まれました。生んだ子を育てるのは、私たち銘々の責任であります。どうかよい子に育つようお互に努めようではありませんか。

東信地区は、県考古学会東信ブロックに組織され、上小では、上小考古学同好会が以前からあり、会員の研修にいそしみ、佐久地域では昭和３８年～４３年頃まで、県考古学会佐久支部会として学会活動がとり行われ、南佐久臼田町英田地畑古墳、佐久市泉小学校校庭、佐久市深堀遺跡が組織的に調査され、さらに日本考古学協会洞穴調査の一環として委員樋口昇一氏を主に、南佐久郡芦内洞崩が調査されました。一方考古学会員の少い東信地区ですからこの他に、大学機関に委託された遺跡調査もございました。佐久市一本柳遺跡、皎月古墳、高畑遺跡、南佐久郡大深山遺跡、小諸市郷土遺跡、軽井沢町入山峠祭祀遺跡、茂沢南石堂遺跡、又個人の学術調査としては永峯光一氏の小諸氷遺跡がありました。遺跡報告の刊行されていない遺跡にすみやかに刊行へ、関係者はそく進し、私たちの学習文献としたいものです。

さて、佐久考古学会も各位の協力によりまして学習の成果もあがり、昭和４８年度を迎えることとなりました。何分にも前向きのご協力を願い、新年度は更に研究を深めると共に、会員相互の意志の疎通を計りより良い会にしてゆきたいと存じます。

1.　昭和４８年度学習計画

①　例会学習会を毎月開催する。主として基礎的研究

②　調査実施研究

㋑　川上村柏垂旧石器遺跡の調査研究（５月中旬）

㋺　佐久市野沢平岸野地籍を中心とする圃場整備地域の緊急調査（秋）

③　会報「佐久考古」年２回以上発行したい。

④　会費　年額５００円その他必要に応じて徴集。

～題字　　佐久市平賀武藤金会員による。～

I. 佐久市根々井餅田遺跡緊急発掘調査概報

餅田遺跡調査団

1. 発掘調査場所　佐久市大字根々井字餅田地籍
2. 調査担当者　長野県考古学会委員　輿水利雄
3. 調査期間　昭和47年10月22～10月29日
4. 調査面積　約600m²
5. 調査方法　餅田（I地区）　グリッド法
   餅田堰向（II地区）トレンチ法
6. 調査参加者

(顧問) 竹内恒、(団長) 輿水利雄
(副団長) 黒岩忠男
(調査主任) 土屋長久
(調査員) 森島稔、白倉盛男、渡辺重義、武藤金、井上行雄、島山富雄、三石延雄、森泉好治、森泉定勝、草間富士夫、高村博文、百瀬新治、小柳義男、臼田武正
(地方協力者) 青木勝、青森義訓、池田登、市村伊佐男、大井今朝人、大井安人、小林喜保、小林忠重

7. 調査委託者　長野県東信濃会員
8. 調査受託者　佐久市教育委員会
9. 遺跡調査概要

第I地区（餅田）、遺構の検出はみられなかった。昭和初期に構築されたガニ水道の一部が発見された程度である。遺物は弥生式土器片少量、土師器片数片。

第II地区（餅田堰向）検出遺構（SD—1、SD—2、SD—3）SDは溝状遺構を表わす。

SD—1；B、D、Eトレンチに確認される。南北方向で、溝幅2m80cm、深さ25cm、溝の覆土は軽石混り黒色粘土質土層。溝底は砂礫層で凹凸激しく、下層ほど、攪乱気味である。出土遺物、後期弥生式土器片多量、須恵器片少量、土器片はローリング（磨滅）を受けている。

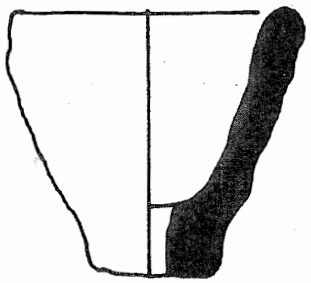
SD—2；C トレンチ、北東—南西方面、幅2m50、深さ40～55cm、上層—黒色粘質土層、下層—茶褐色砂礫土層。出土遺物、弥生式土器片多量、上部ほど大きいものが見られ、下部ほど比較的少なく、小破片で、層位はレンズ状堆積をなす（自然堆積）

SD—3；A、G、H、Q、I、Rトレンチ、東西方向、湾曲を描き、東端はRトレンチ内で終る。幅2～3m、深さ20～60cm、覆土は軽石混り、漆黒色粘質土層。出土遺物、後期弥生式土器片多量、一括（坏、数量）小型手捏土器1）、土師器、（五領式高坏、坏部）、石器（凹石、数量）、寛永通宝(1)、自然遺物、木材片多量、骨片、種子（くるみ、もも）

その他；　桃畑の西（S地区）ではかなりの量の弥生式土器片が黒色土層より発見され、遺構の存在が考えられる。

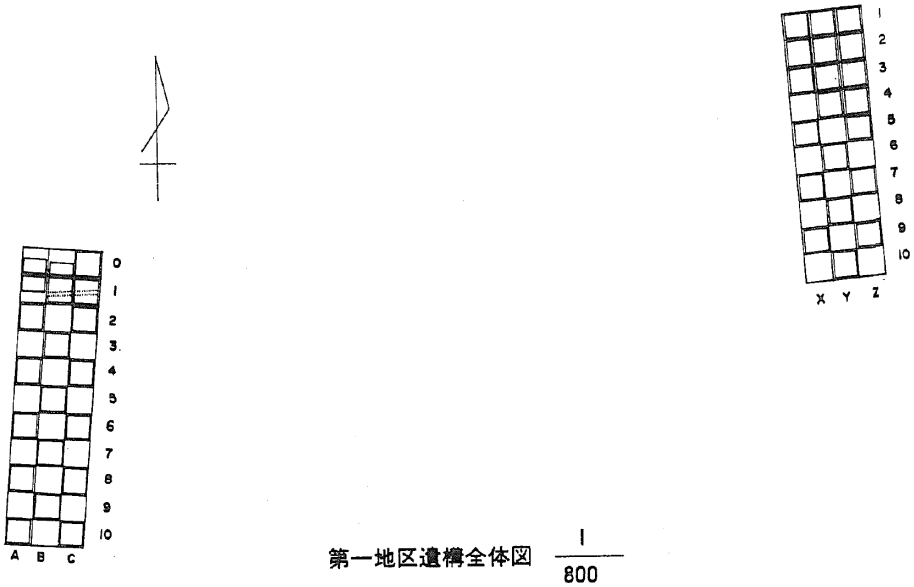
10 調査の総括

① 溝状遺構における時期及び性格についての問題点を提起したことは重要である。
② 多量の後期弥生式土器片の出土により、付近に弥生後期の大集落の存在が推定できる。
③ 弥生式遺物の中に古式土師器（五領式）の存在が見られ、多くの貴重な資料が得られた成果は大きい。
④ 時間の制約と人員不足の中において、地元の人たちの協力により、調査がスムーズに行われたことを感謝する。

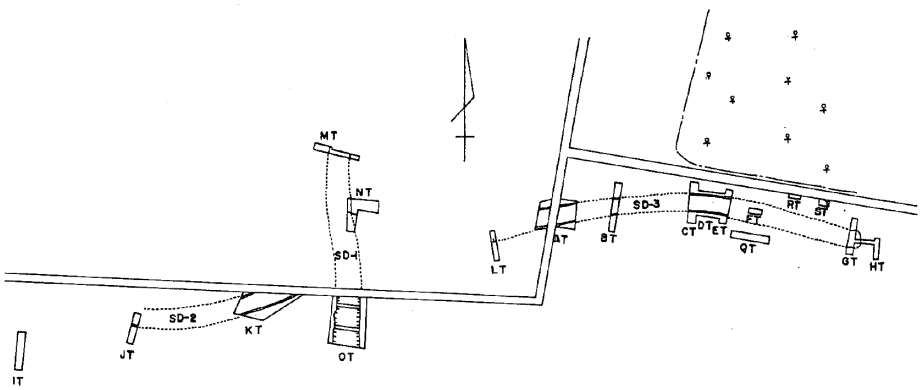


1／1

AT、溝内最下部出土品（小型手捏ねこしき）



第一地区遺構全体図 $\frac{1}{800}$



第二地区遺構全体図 $\frac{1}{800}$

2. 古墳祭祀の1例

佐久市小田井下前田原古墳群

土　屋　長　久

1.

佐久平は千曲川流域における火山灰の地質「田切り地形」からなり、この地域よりは後期古墳群は著しい分布となっている。隣接する上野国方面、あるいは古道（東山道）より連なる諏訪方面とも文化的交渉が多いとされ、種々問題点があげられている。

昭和47年8月20日～9月30日まで佐久市下前田原古墳等の調査を実施し、このうち2基の古墳に墓前祭祀が認められたので紹介したい。

佐久平北部の第1地区（註1）には古墳数73基をかぞえ、この地の古墳の調査は、佐久市が国士館大学大川清氏に委託して行った皎月古墳（報告書に未刊、ただし古墳は1／60にして蓼科工場に復元）、小諸市芦沢古墳（註2）等が知られているにすぎなく、佐久平の東端における古墳の構造及び埋葬者の性格を追求する意味で重要な位置を示している。

皎月古墳は昭和44年3月調査され、古墳は直径約22m、高さ約4mの円墳で外側に堤をめぐらし、中央に大きな石を組みあわせて石の部屋を作り墳丘の中腹に50～70cm程の高さに河原石を石垣の様に積んだ、外護列石をなし、石室の中にはおよそ3人物を順次葬ったもので、石室はなはだしく破壊されていたが精査の結果、金銅製の金環、ガラス小玉、土器類が検出された。羨門の外側の左右には多数の須恵器、土師器が供物を盛った様におかれ、その中に直刀一振が発見された。この古墳は年代的には、7世紀末から8世紀、また9世紀にわたって追葬がなされたと考えられ、この古墳での外護列石は我が国では類例が極めて少なく、類似した古墳が群馬県でみられるものの、韓国南部地方にみられるから当時の帰化人系の墳墓の一つではあるまいかと推定されている。

さて、ここに古墳祭祀を考える上で、墓前祭の1例と考えられる下前田原古墳群を紹介したい。

2.

佐久平における祭祀遺跡のあり方は、峠路の入山峠、瓜生坂、両神峠、白樺湖畔が従来知られ、遺跡の立地からは信濃路における山岳信仰の峠神奉斎の性格をよく示している。ことに入山峠祭祀遺跡の年代は五領期末から、和泉期初頭へかけての土器に伴出し、瓜生坂での終末期まで祈りがこめられた。「古道山道」筋の祭祀遺跡は峠神の信仰にまつわるものでなく、大和朝廷の東国経路に由来する特殊な意味も含まれるが、この山国の各所に集落が営まれ、農耕に従った古代の村人たちのおりおりの祈りの跡もあった。佐久平では、片貝川流域の大門下、後沢、和泉小学校庭、大沢等の湿地帯の諸遺跡（註4）、また近年調査を実施した。中道遺跡内からも石泉（口径1.0.1cm、高さ11.3cm）の祭器の検出をみている。さらにこれ等古代の豪族は、彼等の墳墓へも祈りをこめた。（註5）、前述した皎月古墳の遺品のあり方から古墳祭祀でも、古墳築造後の墓前祭祀な、あるいは年代が降下し氏族の追葬儀礼の「おまつり」と理解できる。

下前田原古墳群（註6）は佐久市大字小田井（旧御代田村に所属）に所在する。信越線御代田駅より西南3Kmに位置する。通称前田原（めいたばら）と言い、水田地帯の北側、信越線の北側の田切り地形上に立地している。遺跡は、土居状遺構、信仰塚9基、古墳5基（内後久保に3基）からなり、皎月古墳等と合わせ古墳群の1支群として、下前田原古墳群として仮称して扱った。この地は、信越線北岸標高750mの山林内に所在する。

浅間山南側の佐久平北部は、火山灰流が堆積し、田切り地形が断崖をなし、後原古墳1～2号墳及び皎月古墳はこの田切り台地上に位置し、後久保1～3号墳はやゝ低い平地となっているが、この田切り間の低地の水田開発は早くから水田と開ける様である。ことに西屋敷付近は、佐久平古墳群の東限界分布となっており、いわば、古豪族の住んでいた東のはじといえる。他に御代田町内では、浅間山麓、馬瀬口に5、塩野に3、西屋敷では「野火付」「かに沢」の「とやづか」湯川ぞいの1本木の「金塚」の3つが従来知られていた。またこの前田原の南方には曾根城址、東方に小田井城址、小田井に東山道長倉駅家址が位置し、古東山道途上でもあり、上代から早く開かれ、長倉牧、塩野牧がおかれ、大沼郷、中世に下って前田原郷の存在など佐久平北部では早くから開けた地域といえる。付近の地籍は、俗に古屋敷、前田屋敷（ぜんたやしき）、西屋敷と称され、たぬきと老婆の伝説等が言い伝えられていた。また古墳群の北側の古道は、下前田原から平原へ通過した古道である（註7）

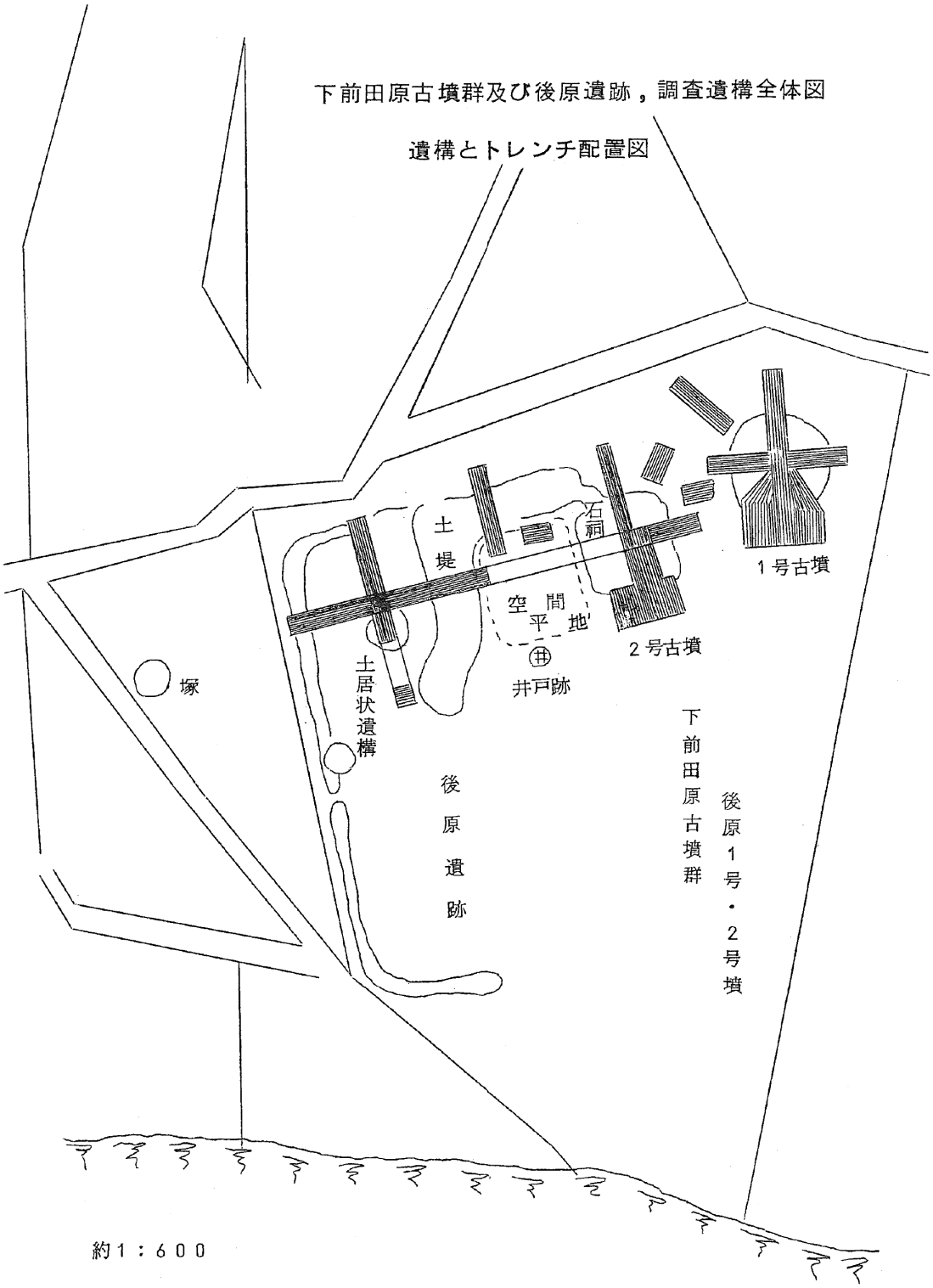
古墳2基、土居状遺構、信仰塚にそれぞれA・BT・を入れ遺構検出を行った結果は次の第1図、第1表のとおりである。

第1号墳は田切りにより南端断崖をなす、南端に立地しややわずかな傾斜地の自然微地形である。墳丘は南北径16.2m、東西径13.5mの円墳で現高は1.75mを計り、略完存の墳丘といえるが、南側やゝ盗掘を受けた跡がみられる。墳頂には天井石2コが露出していた。発掘作業は東西、南北に主体部付近を中心にA、Bトレンチを設定し検出していった。横穴式石室は、傾斜地の地山を利用し、石室主体部を消平し構築されている。

内部構造は、横穴式石室で南に開口し、片袖式（入口より右側に袖がある）となり、天井石が玄室及び羨道内におちこみ露出した。羨門は、2段積で入口両側には、長さ2.8mの列石を左右に構築していた。玄室幅1.3m～1.2m、東壁1.6m、西6m、最大幅1.65m、奥壁幅1.3m～1.2m、東壁1.6m、西壁1.2m、羨道0.98m（床より）を計る。墳丘は2段の円形サークルの列石で土どめして検出され、きわめて浅い周溝（幅5m）が検出された。前庭部分からは、墓前に祈られ、用いられたであろう土器・須恵器片が一面に発見された外、石室内からは遺物は検出されなかった。

下前田原古墳群及び後原遺跡，調査遺構全体図

遺構とトレンチ配置図



約1：600

第１表　下前田原古墳群検出遺構と遺品

時　代	遺構名	型　式	主要遺物
古墳時後期	１号墳（円墳） 高塚式、片袖式 石室プラン 墳丘上及び前庭部 附近の軽石による 積石下より	終末期 近世以降？	土師器、坏形、高坏、 須恵器、かめ、壺 いづれも破片（前庭部 より）　鉄鏃片 馬の骨
同　上	２号墳（円墳） 高塚式、両袖式三 味線胴張りプラン 開口した石室を利 用し石室内上部に 軽石の積石２カ所 あり	終末期 中世以降	須恵器坏形、壺他 土師器高　、他 人骨９体分以内、直刀、 鉄鏃、切子玉、白玉、 ガラス玉 墳丘上より土鍋片、寛 永通宝
鎌倉以降	土居状遺構	中世以降	土居状裾野より土鍋様 土器、前山焼甕出土
中世以降及び 近世初頭	塚	１３塚(?)	土師器片

第２号墳は、第１号墳から西へ３ｍ離れ、構築されたもので同様な地形を利用し構築されている。ただ墳丘は次の新しい時代の構築造成を受けたであろうか、墳丘は方形状をなしており、北側裾は、西方に存在する土居状堤と接しているのが観察される。墳頂の西側には、近世末の屋敷神を祭祀した石祠が散在し、さらに頂上は平に消平されている。墳丘は東西１２ｍ、南北１２.５ｍ、墳丘現高１.２ｍを計る。内部構造は、横穴式石室で、南に開口し、両袖式玄室で、両側壁が三味線胴張りをとるものであろうが、天井石は全くなく、すでにとりのぞかれた後、再び遺構としてうめられて利用されたものであろう。玄門は内部高さ０.９ｍ、幅０.７３ｍ、まぐさ石、かまち石が残る。羨道部も笠石がくずれおちた他、塞閉石が残っていて、土師器、須恵器片が散在する。玄室入口幅１.７５ｍ、長さ３.０５ｍ、最大幅２.０ｍ、奥壁幅１.３ｍ、奥壁高さ１.１～１.４ｍを計る。墳丘は特別な１号墳にみられる円列石はなく、わずか裾部分に小礫（軽石の）がみられる。尚墳丘上の東側には径５５×５７cmの柱穴もしくは袋状ピットが発見された、そこからは、中世土鍋片が発見されている。石室上部はおそらく開口していて、中世頃この石室を利用したが、上部に軽石による積石が２カ所みられている。石室内からは礫末１０～２０cmの面より人骨９体分が検出されている。礫末は鉄平割石及び河原石を敷き、この上より切子玉、ガラス小玉等が発見されている。前庭部は幅６×１.８ｍの長方形状列石がみられ、墓前祭がとり行われたであろう遺物が多く散在していた。

３.

調査の結果２基共に同一時期であり、しかも１号墳では羨門部は、皎月古墳の構造に似て外護列石は墳丘を外周せず羨道と垂直に幅６.８ｍ、２段の石積をなし、それより０.８ｍ離れた前庭に０.４８×０.４２ｍの範囲で敷石施設があり、その周囲には土師器、須恵器が破砕され埋置されていた。これに対し２号墳でも前庭部分のあり方は、羨道部入口部分は同様で、前庭には幅１.１ｍ、長さ５.９ｍの長方形状に、こぶし大の軽石及び河原石を列石状となし、祭壇となしていた。遺物は多量の土師器、須恵器が１号墳同様に破砕され埋置された状況で発見され、破片は祭壇の西側、羨門部付近、中部、東側と３グループに密集的な分布を示し、東及び西側の破片は前庭上５～８cm上の黒褐色土層中に埋置されて検出されている。

図示した遺物は２号墳出土のもので、その一部で、１の甕形土器は前庭中央部、２～６の小形高坏は前庭部東側からひとかたまりとなって検出され、７の須恵器は前庭部西側からの出土品で、１が前庭部床上の他２～７は５～８cm高い、黒褐色土層に埋置され出土した。器物の形況は第２表に示したが、土師器は鬼高期に、２～６の内外面黒色塗りの小形品は、平安時中期～末期に降下し、７の須恵器も同じであろう。

１号墳では、ＡＢＴのほか、全面墳丘を清掃したが、墳丘裾部及び周溝には焚火跡及び遺物は検出されなく、葺石からも同様であった。古墳での地層は大きく３層に、つまり、墳丘構築以前、構築途上、構築後に分類できるように見え、構築後にあっては中世～近世に及び、両古墳共、墳丘以前層は２号墳下では全く検出されなかったが、墓前での祭りに用いられた遺物の破砕され埋置状況は５～１０cmにわたり、構築直後さらにはその以降までひきつづき墓前祭がとり行われた様である。（註８）

１・２号墳丘の構築はほとんど同時に実施されたと思い、墳丘の接する部分も墳丘裾現地形で約１０.４ｍ離れ、１号墳に周溝が構築されたのに対し、２号墳からは検出されず、距離的にも重復は認められず同一時期の構築とすべきであろう。

従って両墳の被葬者に対する祭祀は、墓前が祭祀の場といえるのではあるまいか。そしてその年代は前述した遺物でもふれたが、平安時代中期まで行われたのではあるまいか。

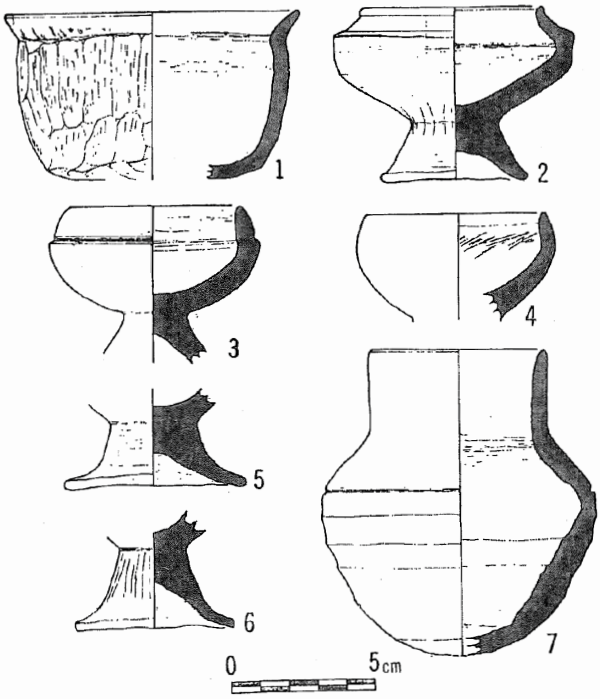
古墳が祭祀の対象となされることはすでに先学諸兄の説くところであるが、しかしその実態は必ずしも把握されておらず、種々の現象によって形態があり、墳丘のすべてを祭祀の場として構築し、埋葬の場をこれに接して構築しているのが調査をみているが（註９）　皎月古墳、下前田原１・２号墳の場合、前庭部を祭祀の場となし、検出された遺物から、祭祀後了後その祭器を遺棄した場所といえ、構築及び構築以前ひきつづいて祭祀がなされたケースといえよう。

今夏の下前田原古墳の調査では、これ等種々の祭祀様相を整理し、改めて参加調査員諸氏と討議し、第２次補充調査をなし、正式報文に望みたいと考えている。佐久平では古墳調査例が少なく、

さらに古墳祭祀の一例であるので、先学諸氏のご教示を賜りたく紹介したい。尚下前田原古墳群は佐久市で史跡公園として保存されるとのことである。

第 2表

番号	出土位置	口径	器高	底径	胎土	成　　形	焼成・色調	備　考
1	2号墳前庭中央部	10.3	5.9	—	白砂を含む	外面箆削り上なで、底部静止箆削り	外、橙褐	
2	2号墳前庭東側	6.4	5.9	5.1	良質	上部ヨコヘラミガキ 下部タテミガキ	外、茶褐堅	半欠
3	〃	5.9	—	—	〃	上部ヨコヘラミガキ	外、同上	〃
4	〃	5.2	—	—	〃	〃	〃	破片
5	〃	—	—	6.3	—	下部ヨコヘラミガキ 底部回転箆削り	黒茶褐堅	〃
6	〃	—	—	5.5	良質	〃	〃	半欠
7	2号墳前庭西側	6.1	10.6	—	細石粒多含	内外なで仕上	濃灰色	〃



第二図　後原二号墳前庭部出土土器実測図

註1　土屋長久「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃』22の5

註2　与良清・土屋長久「小諸市与良芦沢古墳副葬品の様相」『長野県考古学会誌』第14号。

註3　同古墳には筆者も参加したが、佐久市文化財調査員竹内恒氏の御教示による。

註4　藤沢平治・土屋長久「佐久盆地における祭祀遺物について」『長野県考古学会誌』第13号。

註5　椙山林継「祭と葬の分化――石製模造遺物を中心として――」『日本文化研究所紀要』第29輯。宮地治郎『神祇史概論』神社本庁神社新報社

註6　佐久市教育委員会「佐久市大字小田井下前田原古墳群等発掘調査概報」昭和47年。

註7　一志茂樹「御代田村の古史を探る」御代田村誌編纂委員会　昭和28年。

註8　永峯光一・桐原健「中部山岳」神道考古学講座第2巻所収

金井重道・望月政治「望月氏の歴史と誇り」日本出版貿易（株）、昭和44年。与良清先生の御教示によれば平安時代中期になれば、佐久平に栄えた古氏族、滋野氏系族の定着は当然考慮してもよいといわれる。

註9　茂木雅博「浮島和田古墳群第1次調査概報」茨城考古学第2号、昭和44年。

吉岡康鴨「古墳時代における特殊円丘遺構」『石川県考古学研究会誌』第14号。

3.　佐久市高畑遺跡緊急発掘調査概報

1. 調査委託者　東信土地改良事務所佐久出張所
2. 調査受託者　佐久市教育委員会
3. 調査場所　佐久市本新町高畑
4. 調査日程　昭和44年11月27日～12月9日
5. 調査参加者　団長　岩崎卓也
   副団長　竹内　恒
   調査員　島山・渡辺・藤沢・黒岩・井出・花岡
   及補助員　草間・他8名
6. 調査方法　2m巾のトレンチ法と5m×5mを単位とするグリット平面調査法を併用。

   トレンチ　東より20m間隔に南北に30mのものをA・B・・・・・H列まで設定したが検出遺構の結果、途中からグリット法に変え、西より5m×5mを単位とするグリット設定。
   南北にイ、ロ・・・・・・・ヘ列
   東西に1、2・・・・・・・6列
7. 調査面積　925m²
8. 調査の概要

(1) 検出遺構

A　約40cm巾の溝形の石組遺構がH字形に東西長軸約20m、短軸約8mが検出、石組の礫を取り除くと、暗きょ排水様に土木（どぼ）の如きもの針葉樹の木が横倒し埋められていた。

B　墳墓址？15？

中世及びそれ以降の墳墓かと見られ、ほとんどが石組で、副葬品などは全く検出されなかった。

川の洲の如き所かと見える所もあるが、一応墳墓址と見ておくことにした。

(2) 主な検出遺物

①　縄文土器片　1片
②　弥生式土器片　3片
③　土師器、糸切皿片　30片
　黒色土器片etc　若干
④　須恵器、坏、高坏高台、蓋片etc　数百片
⑤　陶磁器片　数片
⑥　その他、木炭、少量

9. 総　括

(1) この地域は表面採集では、須恵器も青梅波のある前期に入る土器片から土師器片まで、しばらく探せばたちまち両手に一杯になるほど拾えるためにこの場所を発掘したのだが、住居址は発見できなかった。

この点について考えると、後代長い農耕のため、遺構の層が既に破壊されてしまったのではないだろうか。

(2) 検出土器類からは、平安時代中期ごろからのものがかなりあるが、遺構が検出されないので、この期の遺構とは決定できない。

(3) 石組遺構は戦時中作った暗きょ排水の工作法に近いものか？（土木の種類と炭素測定による時代を専門家に委託し研究中。）

(4) 出土の陶磁器の時代判定委託研究中。

(5) 用いた礫は千曲川系のものが用いられている。

(6) 墳墓址？と思われる点については、川の中洲の如く礫砂が集まっているが、発掘した上から調べると、ほとんどが北側に頭大の石があり、掘り込んで砂利と礫が埋められていると見られる点から人工の遺構と考えられる。

(7) 平安中期後、千曲川、片貝川が何度も大氾濫をして埋没したと思われる。

(8) 地字名に白拍子などある点から、平安―鎌倉―戦国ごろに関係のあるものが居たのではなかろうか。

(9) その他

イ　年末で寒さは強かったが、天候に恵まれてかなり能率の良い調査ができた。

ロ　土壌が硬く発掘に労力を要した。

ハ　ブルドーザーによる表面削平が効果をあげることができた。

ニ　調査の協力体制がよく調査を円滑に行なうことができた。

4.　北佐久郡御代田町下原古墳の調査について

土　屋　長　久

町の畑作総合対策整備基盤工事に伴ない、馬瀬口、下原地籍は同和対策整備基盤工事の一環として行なわれることとなった。

下原地籍には昭和5年に調査（八幡一郎；当時の東大講師）をみた古墳群五基があり、国道18号線の新設により、3基が消滅し、今日2基のみが現存している。（県遺跡台帳701～702）、八幡一郎先生によって、石が多く墳丘にあり、一時は帰化人の墓と称される積石塚形式の古墳ではあるまいかと称され、佐久地方、牧場、帰化人の古代史上大切な古墳とされていた。

旧南大井村、馬瀬口の下の原の畑中には5基の墳墓を現存し、内2基（下の原第5号墳、第2号墳）は昭和に入って発掘し尽され、僅かに石室壁の残株を止めるに過ぎないが、他の3個は、墳丘を遺存する。後者は、台地縁に沿うて略東西に一直線に並び、前者はそれより一段浅い所に東西方向に並ぶ。後者の墳丘は、傾斜地に存する故か土砂が流逸し、それに混った礫石が遺っているのみである。3基の内東側のもの（同4号墳）は過去に於て発掘せられ、中央のもの（同3号墳）は昭和4年吾々の手で発掘し、西側のもの（同2号墳）は未発掘である。下原第3号墳は全掘するには至らなかったが、奥壁に近い側壁から、玄室内に掘り進んだところ、室内には礫石を混ずる土砂が充満していた。これは恐らく封土が石室内の壁の間隙から流入したであろう。これを徐々に除く内に馬、犬の骨及び、皇宋通宝、紹霊元宝等が出た。これ等は室の底面から遙かに上位の土砂中に存したものであるから、此の墳墓と直接関係のあるものではなく、後世に入ったものと解される。

従って後世の或時期に石室の一部が開口していたと見なされる。

さらに、掘り下げて底面に達する頃、二体の人骨を発見した。共に頭部を奥壁に近く置き、一は室の中央に、他はその右側に並び横たわっていた。人骨は腐蝕甚だしく、副葬品の類も認められなかった。

僅かに中央の人骨の頭附近に鉄片を認めた。

以上の結果から後世一度盗掘に遭ったものと認めて、羨道部に及ぶことなく、発掘を中止したのであるが、中軸線は略東北位に示し、南方に開口する石室と判断した。

八幡一郎「原史時代遺跡」『北佐久郡の考古学的研究』
172～173P　昭和9年

本古墳群と近いものとしてめがね塚、あるいは旧御代田村小田井西屋敷の下前田原古墳群がみられ、そのうち、下前田原古墳群のうち、後原・1・2号墳、皎月原の胴塚等が調査され、とくに後原1、2号墳からの石室主体部のうち2号墳から、副葬品の伴なわない人骨が9個体以上が検出され、下原3号墳とやゝ似た状況を示していた。1号墳丘から馬の骨も検出され両墳共に、後世うめもどされ、何等かに使用せられた生活面が見られ注目される。

5.　牧史料にみる施設と性格

土　屋　長　久

上代日本での馬牛飼養の風習は、先史時代古墳出土の副葬品（馬具、埴輪）、祭祀遺品の土馬等に一例からも、五、六世紀頃に飼う風習があったものであろう。朝鮮半島、新羅等からの貢馬、献馬からも、軍馬としての用途としてもその需要は大きかった。大化の改新時あるいは諸国ごとに軍団及び各官道ごとの駅家（平均して駅家5～7疋）等からも、その馬の統計数は大きな数となり、上代に於て馬牛が兵器として、あるいは荘園の貢進用馬など、当時での馬牛飼育は、農業に次ぐ生活史があったものであろう。

戦後調査された長野県平出遺跡などの住居址に馬牛犬骨がみられ、当時牧畜的な生活がうかがわれる。

律令による牧が設けられ、国ごとであろう諸国牧等、延喜式兵部省にみえ、時代が下って勅旨牧の立卷に伴ない牧場は全国的に分布がみえてくる。

数名のみで、いづれも牧の実体、放牧場の施設を知ることはむづかしい。東国4カ国（信濃、武蔵、上野、甲斐）は御牧として、牧監、別当、牧司を任じ、八世紀にかけて経営にあたらしめた。国司は牧監、別当と共に毎年9月10日を期日として牧で、駒に検印をなし、馬帳を作成してともに署名する。任務はもっぱら御馬貢進のことにある。従って、古墳時代後期の養成及び、荘園、寺社で草原地や原野を利用して放牧されるのと異なり、駒の4歳以上で用いられたものを選び、これを1カ年繋飼もしくは攪飼す

なわち牧附属の厩舎で飼養してよく調良す。その普通にいう駒数は、その駒数及び入京期日は各国毎で、異っていた。

いづれにしても八世紀中葉から荘園制の発展された時期に東国開発の一端として、対「エゾ」的に、開発が進められていった様である。ことに信濃望月牧は、貢馬の下限として、建武年間まで駒牽が行なわれた牧場であることは著明である。

牛馬飼牧したことは弘計王が播磨国赤石郡縮見屯倉首忍部造細につかえた事、安閑天皇二年大連に詔して難波の大隅、媛島拡原に牛を放つなど、文武天皇四年三月諸国にして牧地を定め牛馬を放つなど、画一的に全国に設置されたものと思う。

上代の牧の様相は、ムマキと呼び、畜園の意で、畜は家に飼う獣すなわち家畜の義であり、園とは藩をめぐらした苑である。従って牧とは一定の土地を区切り、藩を構えた場所であるといってよい。そして藩すなわち馬を入れておく周囲のカキのことを当時ウマセと呼び、馬柵又は、柜楯の字をあてた。それは普通のいう埒のことである。万葉集に巻四「赤駒の越ゆる馬柵のしめ結し妹がこころは疑もなし」。巻十二に「拒　越しに麦はむ駒ののらゆれどなほし恋ふらくしぬひかねつも」。日本書紀巻二五孝徳天皇「結著けあが飼ふ駒は引き出せずあが飼ふ駒を人見つらかむ」とみえ、やゝ後の文献では貞観18年官符埒のことを格といっており、また格をめぐらす以外に、牧の周囲に　隍(ほり)湟をもうけたことが見える。格は杭のことであるから、杭を打ち立てて造った馬柵をさし、隍はおそらく格の外側に掘りめぐらした溝りょうを意味するものであろう。そして格及び　は牧馬の逸出を防止する同時に、牧馬を外部の危害から保護する設備である。

貞観十八年官符は信濃国牧監に下したもので、同書中、御馬二千百七十四疋を記録し、当時信濃の勅旨牧が十六牧であったので、平均して一牧二百疋近くが放牧されていたようである。牧地選定の標準は全く不明であるが、信濃では格の記載から放牧であろうが、甲斐国では「頃年藩息漸ク多ク、繋飼オヨトニマサレリ」、繋飼が主体であったらしく、上野では「御馬数、放飼卅疋、繋飼廿疋、など三と二の比率で放飼と繋飼が行なわれていたことを知る。

厩は「厚さ三分、長さ六尺巾五寸の板を以ってなす。」当時の馬は板敷に飼われていた事を知る。

6.　土居状遺構より検出されたる土器に関して

青　木　幸　雄

本資料は、8月27日土居状遺構Aトレンチ8より出土した土器片を云う。土器片は口縁部から底部まで合計9片で器形の約4＼1の復原が予想される。器形は一応特殊な甕形状を呈していると思われるが、しかしながら他に類例に乏しく、より深い考究が必要である事を付記する次第である。

① 形　態

口唇部はほぼ水平に直行し、口縁部が短かく外反し、同内壁には長さ3cm程の突起状把手が貼り付けられており把手周辺部に指頭による押捺が見られる。頸部から胴部下半にかけて2段のゆるやかな綾がある。底部は揚げ底の形態をとり高坏の器台の如く末広状をなしており左右に各々一宵うがってある。

② 文　様

口唇部に箆先による刻目をほぼ等間隔に施文してあり、口縁部から頸部にうつる綾上に三角棒を施文具とした刺突文が一列されている。以下底部まで全くの無文である。

③ 整形方法

器壁内外にロクロ痕が残ってあり、明らかにロクロ製法による輪積方式を物語っている。外壁は器形全面くまなく箆状工具によるヨコナデを施して整形をととのえている。

④ 器　厚

口唇部　約10mm　口縁部　約7mm　頸部　約14mm　胴部　約14mm　底部　約7～8mm

⑤ 後　記

上記の如き土器を果して何と呼称したら良いであろうか。従来の調査ならば内耳土器の変形うんぬんで処理されてしまうであろうが、本資料は明らかに内耳土器の規程概念とは、相異するものであろう。大正年間、故鳥居龍蔵がカラフト落合町出土の口唇部直行の二つの耳を付した所謂内耳土器も又、問題をなげかけているであろう。将に内耳土器の概念に限界を見出さずにはおれないのである。と同時に内耳土器に関する祖源と消長さえ未だ定かでない状態なのである。ここで今までの発見例を年代別に区分するならば、まず最初に縄文中期加曾利E より発見され（類似）土師の真間、日分期に後続する土器の一形態を成していると思われる。いづれにしてもその盛隆を極めるのは中世以降である訳だが、近年までマメを煮る所謂『ホウロク』としてその原形をとどめていたのである。

この様に連綿としてある歴史過程の中で生活面に於ける炊飯具（土鍋）として存続してきたのである。その分布圏は殊に本州であり、中部、関東地方を中軸にして広範囲に分布している。そして又、日本列島の北端に位置する北海道に於いても、続縄文文化前期に出現している。と同時に沖縄本島を中心に諸南島に分布する外耳土器及び平安期に於ける鉄製外耳鍋との機能的、形態的比較研究が必要であろう。もちろんこれ等の比較研究の為には、その時間的、空間的尺度を最大限考慮に入れなければならない事は云うまでもない。なお蛇足ではあるが、「木曾路展」に於いて木曾義仲が使用したと伝えられている外耳鍋が2点展示されているのを見出したが、明らかに落合町出土内耳土器とその形態を一にしているのである。この名称の相違は内耳土器及び外耳土器の概念があまりにも不明朗な故に生じた必然の誤りに起因するであろ

う。

今後の問題提起……

① 内耳、外耳土器の機能的、形態的問題

② 内耳土器と伴出する遺物からの把握

③ 内耳土器の初源と消長の解明

④ 水系より注視する内耳、外耳土器の分布図

7. 信濃国塩野牧遺跡

土　屋　長　久

塩野牧は延喜式記載の佐久三牧のひとつである。

牧には当時の古文献でみると駒の放牧地域、繁飼地域、駒を集めた駒寄地域、さらに朝廷より派遣された牧司居住地があった。その地域は明らかでなかったが、牧留、古牧、柵口（今日の馬瀬口）、柵等の地名が残り、また塩野部落としてみえ石峠に駒形石、八幡に牧場の馬の守護神として駒形神社があり、その範囲が牧場であったことがわかる。そして朝廷に最初に貢馬をなしたのは正平年間（10世紀）に塩野牧がみえてくる。信濃諸牧は東国最大とされ、ことに望月牧では南北朝の時代まで御料馬として貢馬駒ひき行事が朝廷の年中行事として行なわれたことはあまりにも有名であった。牧監は国司に次ぐ役人と佐久地方は後世の滋野一族があり、それぞれ一族は地名を姓として名乗り、塩野牧は塩野氏がみえてきて今日御代田付近に人々が居住するようになったのもこの頃からで、平安時代末より鎌倉時代までの朝廷の軍馬は東国の牧場の馬が多く用いられ、その主要地は信濃であった。義仲の軍馬は佐久の滋野一族に求めた事はいうまでもない。そしてその帰化人、牧人が残した墓が高塚形式の古ふんを残したわけで、八幡、西屋敷、馬瀬口に多く分布してつくられた。塩野牧の東西は、蛇堀川、濁川の自然の境界をなした。けい谷の高原台地で古牧は輪牧の法の行なわれた地名であろうし、馬瀬口は柵（うませ）つまり牧場のさくで柵口のことでここより駒を出入させた木戸口であろう。今の荒町付近を柵村と呼称もされ、この付近にも柵口があったのか不明であるが、駒寄せ口も存したと思われる。

8. 『文様』と題して

青　木　幸　男

今日、私達の周囲には衣食住を問わず、無限大の文様が致るところに多種多様に富んだ様相を呈している。これは単に現在のみではなく、人類発達史上に於いて一貫性の総系譜的存続である。

時の流れと共に文様も又、形を変え品を変えて変遷しながら現在に至ったのである。本項では、一応「土器」に施文された文様より考察していきたい。常日頃不可思議でならないのは何故土器の器面に文様を施文しなければならないのであろうか？その必要性及びその必然性の根底的基盤を成しているものは果して何なのであろうか？　確かに原初に於いての土器の文様は器壁の剝落を防備する為、或いは土器面を堅くする為に施文されたのであろう。この事を端的に物語っているのが　縄文時代早期出土尖底土器であろう。所謂放浪採集民的生活様式に於ける可搬性としてのボシタリキャリヤ的意義の上に立脚したものであったのだろう。しかしながら縄文時代前期以降、縄文晩期を通して、（殊に縄文中期初頭から中葉にかけて中部山岳地帯にその盛隆を極めた勝坂文化 ―その文様のモチーフは、多種多様性を帯びている。）、はた又晩期縄文式土器文化に浸透し始めた弥生式土器文化前期初頭から後期末葉まで一環として土器の器面に文様が登場してくるのは何故であろうか？しかも地域的環境下に於ける特殊性と全国津々浦々的な現象と並行しながら、或いは混成しながらその生命線を存続させるのである。

元来、人間であるが故にもつ美意識的感覚そのものがコンスタントな文様様式を長期間受容することが不可能であったなのだろうか？当時の文化を担っていた人々の間の共同体的なファッションとして文様様式なのだろうか。

いずれにしても、計り知れない時間的、空間的尺度の中で共同体的化現象、消滅現象があったのだろう。しかしながら土器の形態、文様等、土器型式の編年学的価値観は意義深く、細分と大別がある程度集大成されている。

今後、「土器」の器面に施された文様に於いて、当時の文化の深層部まで深く掘り下げねば決して解明はされ得ないだろう。

当時の人々の精神的側面からの把握が不可決であると思われる。

9. 平原道（ひらはらみち）

原田道夫

下前田原古墳群発掘現場を平原へ通る道は、周辺の歴史を探る上に重要である。この地点に、鎌倉初期のものではないかと推定される土居遺構が確認されたことは興味深い。御影新田は名の通り部落の形成は、新しく、江戸時代に入ってからの開田であるから、昔は平原から前田原へはこの道が唯一の要路であったことは想像できる。このあたりの記録が多少残っている戦国の頃に至っても、平原と前田原の関係は深く、一志茂樹先生の「御代田村の古史を探る」をみても、諏訪神社文書のなかにその一端が窺える。この道を通じての平原城と小田井城の関係や、(註)平原全真が北条氏直の軍門に降ったという、天正16年における小田井城の位置はどうだったのだろう、など。また武田軍侵攻以前はこの地域は村上氏の勢力圏であったのだから小諸、上田を経ておそらく葛尾城へも結ばれる道でもあったのだろうの推察も湧く。

だからこの土居がたとえ、最初は牧場の施設として構築されたものであったとしても、鎌倉期から戦国時代にかけて、戦略的な意図をもって利用された時期もあったのではないかと、疑問は果てない。

(註) 平原より前田原へ移った氏族があった。

10. 佐久市岩村田北西久保古墳について

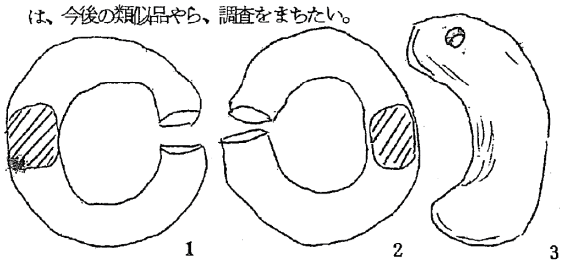
井上行雄

佐久市字北西久保は一本柳古墳の西方的1Kmにして湯川の北岸に位置している。弥生、土師、須恵の土器は一本柳と同様な散布を示し、時たま縄文式土器片も採集される。

前川用水をへだてて、西に根々井地区に接している。近くに鳴沢、我鬼塚、東原等などの古墳が、湯川北岸に位置している。又この湯川の南、根々井字山下地籍にも古墳が観察される。附近の古墳は、戦後開田の際、破壊したが、中より直刀、勾玉等が出土した。

岩村田方面では一柳古墳との中程に樋田古墳（略完存）、砂田近くでは喜平治山古墳（僅か塚のみ残る）、浅間中学校前に国蔵古墳（略完存）、その西に、古墳として発表されている坊主山は、今春破壊されたが、これは古墳でなく、塚原泥流の集石山であった。この地形現象としては、塚原古墳群地域にかなり観察される。

古墳は数基存在したが、現在は1基のみ丘陵上の南面傾斜地にあり、現在桑畑地の畦畔わきに、羨門石2ヶ露出し、主体部と思われる附近には小石が積められており、桑の改植にも気付かなかった。時折、改植中に金環2、勾玉、鉄製品、人骨等が流出した。1～2は金環、銅地金張り製、3は、メノウ、燈々色の勾玉、等は、銅地金張りのスプーン状製品、　直刀片であろう。　スプーン状製品は古墳時代のものと思われるが、佐久平では稀品になる。大沢地区では「鉄ぞうり」品の出土もあり、本品については、今後の類似品やら、調査をまちたい。



11. 信濃の牧場

森泉好治

貞観年中に入ると又信濃の貢馬の事が見えてくる。弘仁十四年八月の条に「武徳殿に幸し、信濃国の御馬を見そなわす。」親王以下参議以上に各一匹賜ふ。」とあるから、余程以前から甲斐、信濃の馬は、朝廷に恒例の定日があって毎年天覧に入れる事になっていたらしい。貞観七年十二月「信濃国」勅使の牧野馬、元八月廿九日にこれを貢す。今十五日に定む」云々とあるが、勅使の牧野とは、官設牧場と云う程の意味に取れる。又佐久の望月の馬はその十五日から各が生れたとの説もある。信濃の貢馬は、望月何疋とされたあたりから見ると望月の牧のみがその勅使の牧場でないにしても、この項に於いて重きを置かれたことだけは事実である。その後はその明月の日を朝貢の定日として朝貢された事も諸者に見える処である。しかも天皇が信濃の貢馬を親閲されるのが吉例であった。貞観十三年官符には此の貢上等に関する戒書が出ている。即ち「信濃、上野牧監等、朝貢に遵はず多く公乗を用ひ暴悪方に盛なり。違反遏め難し。望らくは彼両国に准じて明かに科懲せらむことなど、朝恩に押れて牧人等の濫行が行なわれた。矢張り人盛になれば自から驕れる事は免れない。牧場の隆盛と共に馬役人等が跋足した自

然の勢で前に述べた引証の貞観十三年官符を見、如何に馬の役人が貢馬の勢をかり国司や郡司を侮ったかを知ると同時に又、時如何に牧場の盛大であったかを推察し得る。此の当時牧場の有様や牧畜数等は貞観十八年一月の官符に於いて知る事ができる。「信濃の国解を得て検するに諸牧の格、或いは火のため焼け損じ、或いは盗取す。ここに於いて造格の努め曾て国牧の益なし。今在る処勅旨牧の御馬二千二百七十四匹、格外に放牧して濠中に留まらず、唯民業を害するのみならず兼て又亡失を致す。国司須らく格によりて検校し損失せしめざるべし。」と云っている。

貞観十八年信濃の官牧に馬が二千二百七十四頭居た事を知ることができる。又中秋名月の日を以って貢馬せしめられた事からが一程雅趣を得るのであるが、光孝天皇の御世の貢馬の日には「馬埒殿に御して信濃の貢駒を閲覧し文人を召して詩を賦せしめ賜ふ席に預るもの三十三人とある。信濃の駒はここに致って勅定の詩題になる名物となったのである。

古今　逢坂の関の清水に影見えて
　　けふや引らむ望月の駒　(貫之)

〔各所旧址〕　塩野牧址　本村より北大井に亘る一帯の地。馬瀬口は本牧の上柵にして下柵は今の御代田荒町なりと伝う。

12.　古屋敷伝承

原　田　道　夫

発掘を見に来ていた、西屋敷部落の木内今朝義氏の話である。

このあたりは昔は同家の所有であって、第2号墳の上の石祠は屋敷神様であった。そしてある時期にここへ分家が出たのであったが、狐狸の類に悩まされて本部落へ移り住んだ。西屋敷で一番下はずれの木内和衛氏の家で、もとの血統は明治年間に絶えてしまって金沢氏より入って嗣を継いだと云うが、後原附近を古屋敷と俗に呼ぶのは、かってこの屋敷があったからだとか・・・。

土居状遺構から古墳群にかけての間に木内一族の墓地があるが、その一角に、「宝正院権僧都○覚位　文政四年」「権大僧都宝道快全金剛位　安政四年」等の石塔が見られるのは、「法印様」が古屋敷に住んでいたと、いまも伝える人のある事に符合しようか。そしてこれは又、ここの古墳群が江戸期に入ってからの信仰上の十三塚だろうとの推定とも一致するのだが・・・。

古井戸が残っているのもここに屋敷があったからであって、井戸の中へは石祠類などかなり放りこまれたものだとか。

さて、それにしてもこの古屋敷に、時代が変って宅地造成されるということから、古墳や、土墳が確認された訳だが、歴史とはこんなものだろうか。

13.　南佐久郡臼田町入沢古墳について

三　石　延　雄

入沢古墳群は臼田町入沢（旧青沼村入沢）にあり、その数は31基と云われている。そのほとんどが南側に面した山腹、或いは山麓に位置している。そして入沢より上には、古墳の数が稀少である。この様な事から、入沢古墳群は佐久の古墳群中、最南端に位置しており、所謂佐久に於ける古墳の南限と云っても決して過言ではないであろう。のち古墳文化が伊那より千曲川水系を媒介に遡ったとすれば、入沢古墳群は、一番新しい様相を呈している古墳群であるだろう。しかしながらそのほとんどが破壊されてしまっており、原型を現存させている古墳は一基足りとも存しないのである。

青沼村誌にある古墳の調査表を見れば・・・（31基の内）

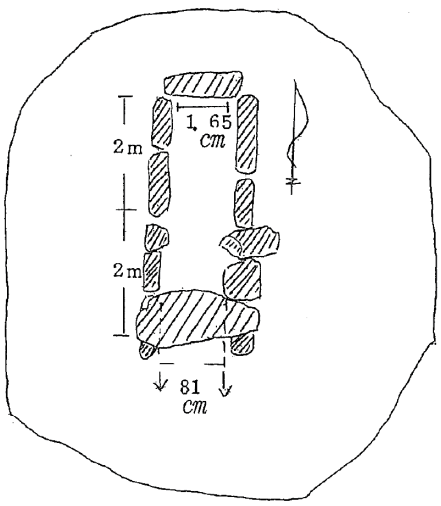
① 長方形の玄室のみ残る　7基
② 三味線胴形玄室のみ残る　1基
③ 片袖形玄室のみ残る　1基
④ その他わずかに残る　21基〔内部主体構築法〕

となっている。又出土遺物としては、直刀、鉄鏃、勾玉等と記されている。そして民間伝承として、こんな話もある。入沢の日向家の東側に位置する古墳で昔から石を動かすとたたりがあると云い伝えられていた。「ある時、若い人達が、この塚の石を橋にしようと運び出したところ、仲間の者がケガをしたり鼻血を出したりしたのである。若い人達はたたりを恐れて又元の位置に戻したと云う。その後、この塚の石に手を触れる者は居なくなったと云う。」

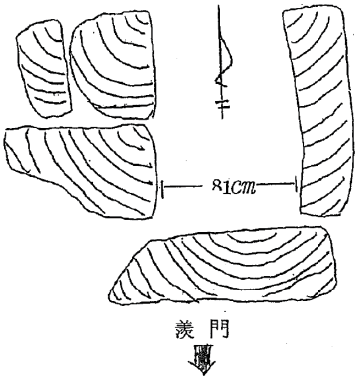
前田原の古墳に関する伝承に似ていると思い書いてみたのである。

〔西の窪第6号墳〕

1



2

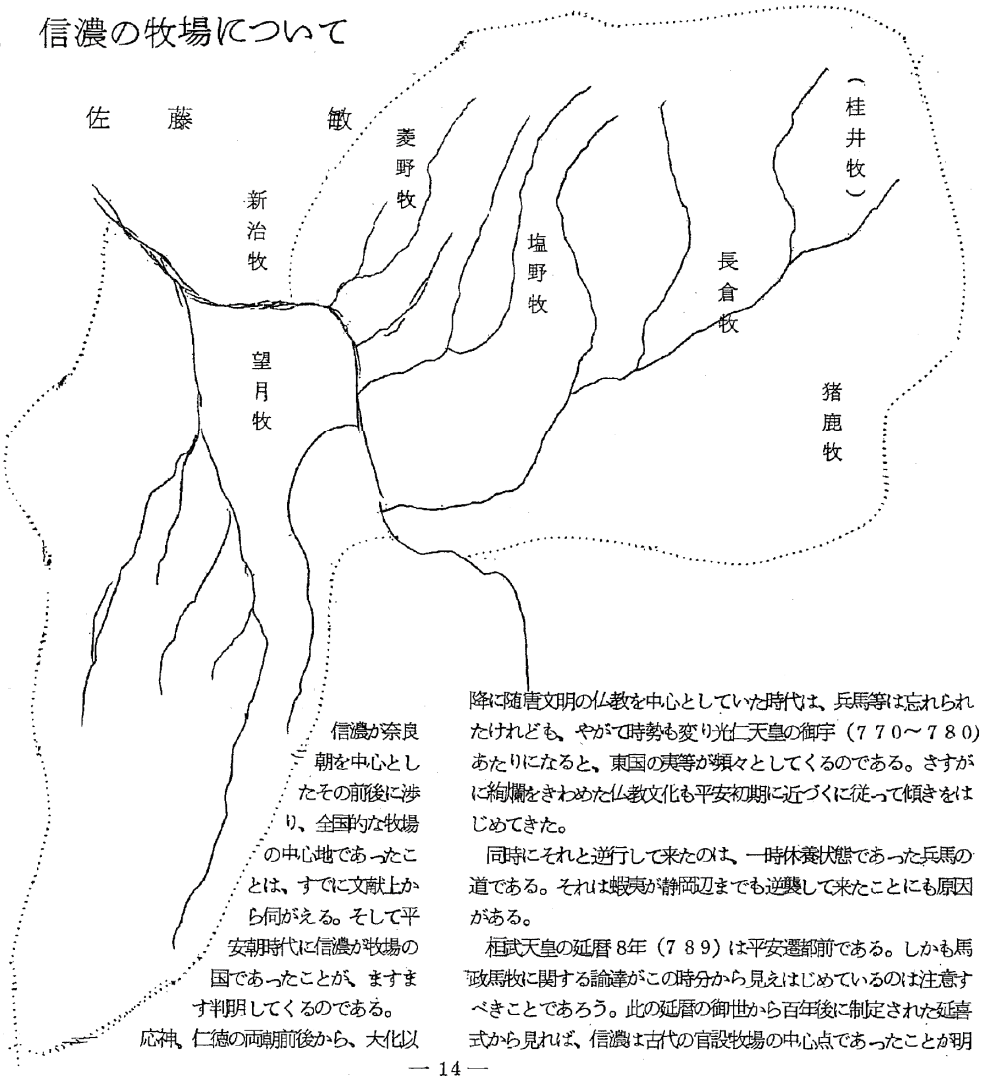


〔図—1〕
第6号玄室構造図
〔図—2〕
奥壁及び側壁上面図

（追記）
„羨門の石と羨道、玄室の石と墳丘円周部のみわずかに残存する”

14. 信濃の牧場について

佐藤　敏



信濃が奈良朝を中心としたその前後に渉り、全国的な牧場の中心地であったことは、すでに文献上から伺がえる。そして平安朝時代に信濃が牧場の国であったことが、ますます判明してくるのである。

応神、仁徳の両朝前後から、大化以降に随唐文明の仏教を中心としていた時代は、兵馬等は忘れられたけれども、やがて時勢も変り光仁天皇の御宇（770～780）あたりになると、東国の夷等が頻々としてくるのである。さすがに絢爛をきわめた仏教文化も平安初期に近づくに従って傾きをはじめてきた。

同時にそれと逆行して来たのは、一時休養状態であった兵馬の道である。それは蝦夷が静岡辺までも逆襲して来たことにも原因がある。

桓武天皇の延暦8年（789）は平安遷都前である。しかも馬政馬牧に関する諭達がこの時分から見えはじめているのは注意すべきことであろう。此の延暦の御世から百年後に制定された延喜式から見れば、信濃は古代の官設牧場の中心点であったことが明

らかであるだけに、信濃に関し布告類文書の今日伝えられているものも、殆んど此の牧場に関するものばかりであるが、その最も古いのは延暦16年（797）6月7日の大政官符「信濃国監牧に公廨田を賜う可事」と云うのであって、つまり牧場の長官が初めて年俸下賜の恩典に浴したのである。その様は、田が六町、但し新任の時は耕作が出来ないと云うことで一町歩につき稲百二十束（舂米6石）の割合（6町で36石）で給与すると云うのである。けれども土着者の任じた場合は給与の限りにあらずというのであった。

此の記録によればその時分まで監牧役人などはまだ無給であったこともわかる。今より（前1175）の官符文書である。

信濃牧監に年俸下賜のことがあってからの15年目の嵯峨天皇弘仁3年（812）符「課欠の駒の価は疋毎に稲二百束を徴すべきこと」大宝令の定規たる母畜百につき60疋の駒を責任産出することに関し、実行できないところから罰則を設けて、結局、駒一疋について稲200束、すなわち10石の代償を取ることに決定を見たのである。そして、これは信濃国牧主当伊那大領金刺舎人八麿なる者の進言に基づいて決定を見たと文献は示している。

信濃国の牧手当とは、信濃全部の牧手当であるか、又は信濃の或牧場の牧手当であるのか分別ないが、とにかく伊那郡の大領金刺氏がこれに兼掌していたのである。

その後更に14年目の淳和天皇の天長3年（826）までの間監牧の官名が牧監と改たまったことは2月11日の官符に「諸国貢上御馬騎士等の数を定むること」（上洛人員）のうち「須らく信濃、上野両国に各牧監1人、甲斐・武蔵両国に各主当1人、馬医国毎1人」同時に此の年には信濃と上野にばかり牧監が置かれたことも判る。

それから翌年の天長4年官符により甲斐にも、信濃に準じて牧監が置かれる事になった。文徳天皇2年（850）には信濃に2人の牧監を置くことになった。天長以前に2人であったが、しばらくの間1人にしたのだが、又2人に復活されたのである。

牧馬に於ける信濃の位置が牧馬史以来常に日本の代表的位置にあったことは史実上の通りである。

けれども信濃の官牧が実際に降盛期に達したのは貞観前後（清和帝）より延喜式の御代前後頃だと考えられる。

（延喜式）　佐久関係

新治牧＝小県　荻倉牧＝佐久　塩野＝佐久　長倉＝佐久

猪鹿牧＝上野西牧（駒込柵の内）　望月＝佐久

（東金監）　柱井牧（東鏡、信濃の26牧の内長倉の東）＝長倉牧＝猪鹿牧＝塩野牧＝菱野牧＝望月牧＝新治牧

15.　下前田原古墳群と塩野牧

原　田　道　夫

醍醐天皇御宇制定の延喜式記載の信濃16牧中、佐久に関係するのが望月、長倉の両牧と共に塩野牧である。御牧の筆頭的位置にあった望月は歌枕にもなったのでもちろん駒迎えの駒そのものを代表したであろうから、

望月の駒よりおそく出でつればたどるたどるそ山はこえつる
素性法師

逢坂の関の清水に影見えていまや引くらむ望月の駒
紀　貫之

君が代にあう坂山の関水も影しづかなる望月の駒
藤原俊成

望月の駒引く袖も打ちしめりさまよふにけり相坂の関
藤原家隆

などの他にもかなり歌われて有名であり、「北佐久郡誌」には岩崎長志先生が、「望月牧址考」の論文を寄せておられる。長倉の牧についても、同じ延喜式に選進された、式内社の長倉社との関連性に於いて、多少類察、研究もされてきたようであるが、塩野牧については殆んど文献らしいものはなかった。

「東鑑」文治二年の項に、後白河法皇が頼朝直轄地内に於ける年貢未済の庄々をあげて催促しているが、その中の信濃二十八牧に塩野牧の名も見える。この頃になると牧そのものの形態も変化していたろうし、私牧化していたか、また牧とはなっているが、すでに牧本来の性格をどの程度残していたかも疑問かも知れないが、一応は塩野牧が存在していた事になろう。しかし文献に詳しく探り得ない以上、この地内と推定される古墳や遺構の発掘調査だけが塩野牧を究明する唯一の方法であろう。この意味に於いて今回の出土品が土師、須恵から鎌倉初期のものでないかと思われるものまでの広範囲にわたる事は注目しなければならない。

さてこの近在に現存する古墳であるが、真楽寺近くの滝沢古墳から、塚田古墳、めがね塚、下原墳の点を結んだ線の延長上的位置に下前田原古墳群が存在する事実、そしてこれが更に皎月古墳にまで及ぶと見られる事に、どうも何か意味がありそうに思われる。この線は例えば塩野牧の端に近いところを通ったのではないか。そんな仮説はできないだろうか。下前田原古墳群の場所に土居状遺構が確認されたが、めがね塚のある所は「戻り場」なる字名がある。「戻り場」は、地名として残る土居状遺構ではないかと想像するのはいけないだろうか。

そして土居状遺構が「戻り場」的性格をもつものであるとしたなら、この遺構から鎌倉初期と覚しき土器が出土した事は、「東鑑」に出ている塩野牧がまだ牧としての形態を備えていたのではないかと想像にもなろうが、どうだろう。　しかもこの線上の確認された上でのもっとも端になる皎月古墳に関係あるのではないかと思われる「白山権現輪乗」の、乃ち駒にまつわる伝説が残っている事なども中間に位置するこの古墳群は、やはり塩野牧と結びつけて考えたいのだが……。

16. 葬制に関する一考察

青　木　幸　男

周知の如く、柳田国男は「葬制の沿革について」によって、両墓制の存在（両墓制とは、時間性としての霊所及び空間性としての墓所のことである。）を初めて指摘した。そして柳田国男が氏自身自負したように、土豪や支配者の埋葬されている古墳ばかり掘りかえしていては到底発見でき得ない日本民俗学の勝利を象徴するものと考えられていた。氏は墓地には埋めた墓と詣で墓とが場所的に相異する現象があり、死者を埋葬した墓地と、死者を祭った墓を二大別して日本の葬制研究の口火をきったのである。しかし、埋め墓と詣で墓とが場所的に別々であろうと、一個所であろうとそのような事は様々な偶然性や方便、生活の必要性に於いて幾何でもその都度変わりうる事は云うまでもない。ただ取り上げて評価できうることは、農耕民を主とする村落共同体の共同幻想にとって、他界の観念は、空間的にと時間的にと二重化せられざるを得なかったと云う事である。所謂、農耕民にとって永生の観念は、飽くまでも土地人の執着を離れては存在し得なかったのだろう。そしてこのような永生の住みつく土地を求めるとすれば、村落の周辺に、しかも村落の外の土地に求める他なかったのである。それ故、埋め墓は空間的な他界の象徴であり、詣で墓は時間的な他界の象徴であると云うにすぎないのである。

又、国分直一は「日本及びわが南島における葬制上の諸問題」の中で柳田の画期的な発見？を拡張して多葬制とも云うべきものの痕跡を指摘している。

と云うのは、第三次埋葬以後に（三十年あるいは数十年経た後）死者の骨は取り出され、粉砕されて土壌にばらまかれると云うのである。

死者の骨が土壌に霧散した時、現世の人々にとってひとつの他界が消滅したかに見える。しかし真に消滅したのではなく、実は骨を粉砕してばらまいた村落の近縁者の自己幻想の内部に他界が再生したのにすぎないのである。

本小文は、何故古墳時代後期以降連続として追葬或いは墓前祭が行なわれたのかと云う素朴な疑問より発せられたものに起因する。と同時に民俗学の大家と称せられる柳田国男氏の両墓制の存在に関して、他界観念の変遷よりも、むしろ生産様式の変遷が葬制の変遷の根源的基盤体であるのではないかと想起せざるを得ない故記してみた。

17. 立科町芦田古町下屋敷遺跡調査概報

小林幹男・鶴丸俊明・青木幸男

1. はじめに

立科町教育委員会は大字芦田字古町下屋敷５７８所在の下屋敷遺跡を昭和４８年3月２３日～４月３日まで学術調査することになった。

遺跡は蓼科山麓より北流する小河川芦田川によって開設の進んだ狭長な氾濫原的沖積地に本遺跡は位置する。本遺跡の西側は県道に切断され、隣接する水田面との比高は僅少と思われる。又この土地は以前より耕作地として利用されて居り、かなりの攪乱がなされている。近年来幾多の研究者が踏査し、八幡一郎信濃史料一巻、郡志等などの資料の記載があり、県新産都市分布調査などで成果があり、古くから著名な遺跡でもあった。

調査員構成は下記の通りである。

○ 調査担当者　上田染谷ケ丘高校教諭　小林幹男
　調査指導員　東京大学理学部人類学教室　鶴丸俊明
　調査参加者　土屋長久、竹内恒、黒岩忠男、渡辺重義、与良清、白倉盛男、岩佐今朝人、青木幸男、臼田武正、高村博文、林和男、上村淳一、小林悦雄

尚、古堂下遺跡も調査計画にあったが、8月に延期された。

2. 下屋敷、古堂下両遺跡の概観

(1) 下屋敷遺跡

県道小諸白樺湖線に沿った児玉美佐雄氏宅の敷地と、その周辺の畑地である。採集されている遺物は、縄文前期有尾式・南大原式・縄文中期の加曾利E式・縄文後期の堀ノ内式・縄文晩期の佐野式・氷式などの土器片である。土器の出土量はかなり多く、その他石棒、石剣、石冠、独鈷石、石皿、磨石、定角式磨製石斧、乳棒状磨製石斧、分銅形打製石斧、石茎、無茎などの石鏃等の石器、耳栓、弥生後期の箱清水式、土師後期国分式土器の内黒坏、須恵器などの破片である。

(2) 古堂下遺跡

塩沢せぎの東南に沿った台地で、県道小諸白樺湖線の東側に位置する。花畑や桑畑などに利用されている。台地上には、遺物が濃密に分布している。採集された遺物は、縄文前期の有尾式、南大原式、縄文後期の加曾利B式土器などの破片と弥生後期の箱清水式、土師後期国分式の内黒、糸切底の坏形土器、台付皿形土器、須恵器の土器片などである。

3. 遺跡の調査状況

調査現場は、地主さんの畑に、南北に幅２m、長さ４２mの調査杭（２m×２m）のグリッドを設け、数ケ所のためし

掘りで、畑の土壌の厚さ、遺構、遺物をあらかじめ確認してから、作業を進めました。

遺跡は芦田川の氾濫原の沖積地に位置し、地主児玉美佐雄氏にはなみなみならぬ御協力をいただきました。農耕折出土した大きな石棒等は同宅地の屋敷神にそなえられています。石棒は当時の集落では、ちょうど今日の町長さんのような村々の首長にあたる様な人が、権威のシンボルとして、おまつりをなしたといわれ、又、その石棒への信仰は、遺跡からよく遠望される浅間火山の噴火と関連があったといわれ、おそらくいかり噴火する浅間山へ、山の神々が、しづまる様に祈願をこめられたことでしょう。

この畑の土壌は、耕土30cm、その下に礫交りの黒褐色土層、黒色腐殖土層等が、約70cm堆積し、その下から芦田川の河原石を主体に、配石遺構が発見され始めました。その配石の上からは、多量の土器片、耳飾、石棒、石鏃、岩偶等が発見され始めました。

耳飾りは、今日のイヤリングですが、男性も女性も当時は飾りました。当時の日本人は、幼少の頃から耳にあなをあけ、大人になると、やゝ大形の直径3～5cmのもので耳をかざったようで、おそらく、大きい美しい耳飾をつけ、求愛の対象とした男性もいた事でしょう。

石棒は、安山岩質のもので、男性の性器をかたどっていますが、これが、きわめて大きく、この時期では特有で、直径20～30cm、高さ20～40cmのひろものです。ところが、この時期の他遺跡の石棒の模造品は、いったん完全品に作成され、必らず意識的に折られているのがみえ、本遺跡の既出品の如く、完全品に近いものは珍らしいケースといえましょう。当時の家族生活は、母系的な構成で、男性は漁狩にせいをだし、その伝統は後の日本神話にもみる様に、日本の形成は女神でもありました。きっと当時の女性が、生殖行為に伴なう、ひとつの信仰として、いのりをこめて作成されたものと理解されます。

さて、本日までに発見された一番めずらしい品は、砂岩質の岩偶でありまして、人間の顔姿をかたどった、高さ5cm位の円形のものです。これは、県下では最初の例です。石のかわりに土（ペと）で作ったものに土偶があります。いづれも人間を形づくり、中には、いれずみの様に、おけしょうをしたものもあります。ひな人形の様なもので、大きい土偶では、松本市女鳥羽川遺跡から発見され、これは、最大クラスに入り、今回の岩偶と共に珍品に入るものです。

さて、これ等土偶、岩偶にしましても、その性格やら、意味については、この縄文晩期の頃では、全く判明していません。たゆまなく、学問的に努力を重ねるにいたしかたありません。

ただ、松本市女鳥羽川出土の土偶を、よく観察しますと、オッパイもあり、女性をかたどっていることは確かで、その女性の生殖器も、きちんと、さちょう面に作られていたことから、女性、生殖器崇拝説としてとなえる学者もいますが、わからぬ事が多いのが考古学である様です。

ごく最近までテレビドラマの「にじの人生」の主人公のあり方にも、おそらく作者は大変困つた事であつたものでしょう。

下屋敷発見の岩偶は、顔形のイメージは南方の土人の様な感じを与え、南太平洋の弧島に残るアトランテイス大陸文化の残存石造文化財に似ているといえましよう。今日の路傍にのこる道祖神の顔姿は、なんとはなしにほゝえましい男女のイメージからしてもうかがうことができましよう。

後の稲作ですら、南方の島国の国々から伝わつたのですから、当時の日本人が今日残る未開発地のアフリカやニューギニア高地人のほぼ同様な生活であつた様です。さいわいにして、日本列島に住みついた土人とおぼしき日本人の祖先は、その後進化し、大陸の文明をとり入れて今日の名誉ある日本列島を形成した。

調査は後半に入ります。これから遺跡の全容が調査されるわけですが、縄文晩期遺跡は県下でも、飯山市佐野、小諸市永、御代田町宮平等、調査された遺跡は少なく、且又配石址、岩偶等の発見に伴い、学問的にもきわめて貴重な遺跡となりそうです。

佐久考古学会規約

第一条　本会は「佐久考古学会」と称す。

第二条　本会は会員の佐久地方における考古学的な調査研究を相互に援助協力進展し合い更にその親睦を目的とする。

第三条　本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学研究者によつて組織する。

会員は会費年額500円を納入するものとする。

第四条　本会の目的を達成するために次の事業を行う。

① 総会（春季）

② 例会（原則として第一土曜日）

③ 調査研究
④ 見学会
⑤ 講習会
　但し場合により例会を兼ねることがある

⑥ 会報「佐久考古」の発行

第五条　本会の運営は、会費と特別収入をもつてあてる

第六条　本会は次の役員をおく。

① 会長　1名

② 副会長　2名

③ 幹事　若干名

内　総務幹事1名　企画幹事2名
　　編集幹事2名　会計幹事1名
　　その他　若干名

④ 会計監査2名

第七条　本会の役員の任期は2年とする。但し重任はさまたげない。

第八条　本会には顧問をおくことができる。

第九条　本会の事務局は、小諸市坂の上小学におく。

附　則　本規約は、昭和46年5月29日より発効する。

以上

佐久考古学会会員名簿

氏名	郵便番号	電話	住所
由井茂也	384－14	川上6005	南佐久郡川上村御所平
由井　明	〃	〃　81	〃　御所平
吉沢忠重	〃	〃　341	〃　樋沢
由井延雄	〃		〃
由井佳幸	〃		〃
由井祐太郎	〃		〃
新津開三	〃		〃　大深山
土屋忠芳	384－13	海ノ口3392	南佐久郡南牧村野辺山
井出正義	384－11	(八千穂北小)	南佐久郡小海町東馬流
三石延雄	384－06		南佐久郡臼田町入沢
奥水利雄	384－04	臼田3013 2571(咲)	南佐久郡臼田町三反田
黒岩忠男	384－03	臼田2487	南佐久郡臼田町諏訪
小林秀人	384－04		〃　下越
花岡郁夫	384－01	佐久	佐久市平賀
武藤　金	〃		〃
竹内　恒	〃	佐久3424	佐久市中込佐太夫町
鞘間富士夫	〃		佐久市野沢原町
藤沢平治	〃	佐久6－6761	佐久市跡部
畠山富雄	〃	佐久6－5836	佐久市三塚
新村　薫	〃		佐久市前山泉団地
井上行雄	385	佐久7－3296	佐久市岩村田砂田
佐藤　敏	〃	〃　2075	佐久市岩村田相生町
森泉好治	〃	〃　2828	佐久市岩村田荒宿
上原邦一	〃		佐久市常田
畠山忠雄	384－21	浅科8529	北佐久郡浅科村八幡
桜井　栄	384	小諸2－1844	小諸市与良
土屋　実	〃	〃2－1039	小諸市六供
寸田政親	384	小諸2－0619	小諸市中松井
小宮山敦	〃	〃2－1069	小諸市八幡町
金井重忠	〃		小諸市足柄
与良　清	〃	〃2－2681	小諸市与良
白倉盛男	385	佐久7－5032	佐久市岩村田一本柳
渡辺重義	389－01	軽井沢2－4014	軽井沢町高校前
土屋長久	〃	〃5－5029	軽井沢町中軽井沢
小川字一	386		上田市緑ケ丘2.8.3.
森島　稔	389－08	戸倉5－2837	埴科郡戸倉町戸倉
臼田武正	380	長野32－2244	長野市茂菅153 平和荘（柄沢方）
高村博立	386	上田2－8759	上田市天神3－10－28泉荘
青木幸夫	168		東京都杉並区永福町2－7－15国土荘

野沢南校郷土研究会員

佐々木とよ子	臼田町人越8
真山由紀子	望月町御桐谷
中沢次子	佐久市安原
須江たい子	佐久市駒込
臼田晴美	佐久市桜井
木内宏子	佐久市下県
小林典子	臼田町田口
佐藤八重子	佐久市内山
中島君江	南牧村
菊地すみれ	〃
石川和子	〃
青木真由美	佐久市塚原
佐々木	
小栗あき子	岩村田稲荷町

佐久考古学会会報No.1.

「佐久考古」

昭和48年11月30日

編集　土屋長久

発行　佐久考古学会

佐久考古学会会報No.2　1974・11・1 長野県佐久考古学会

佐久考古

上信越高原国立公園＜天然記念の保護運動＞
浅間山麓　保護協力を望む蝶について

あさまもんきちょう、みやましろちょう、べにひかげの３種は、浅間山系に生息する高山蝶である。浅間山系周辺地域（小諸市、御代田町、軽井沢町、長野原町、嬬恋村）全体が協力して保護しなければ、この種の蝶は浅間山系から姿を消すであろうと思われる。

これ等の蝶を含む、８種については、すでに昭和３年の「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書第９輯」に保護すべき高山蝶として記録されている。しかしまだそれが実現されていない。

上記３種の蝶について略記すれば

1, あさまもんきちょう（地方型）　原型は（みやまもんきちょう）

本州中部高山帯の特産種、氷河期からの遺跡昆虫

英人プライヤー氏により１８７７年（明１０年）浅間山系から採集されたのが世界最初

この時国内産、１０数種の新種が記録されている。

・形態；（成虫）翅を開いた時、約5.0㎝、モンキチョウにてシベリアでは平地に生息し、他国では化石となって、これ等遺跡昆虫と称されている。

・生態；食草、クロマメノキ（アサマブドウ）　幼虫越冬

幼虫期間８月～翌年６月まで、群馬県黒豆河原では本種は、明治末を限りとして姿をけした。

2, みやましろちょう（地方型）　略名　タテノヘテフ　シナノシロテフ

本州中部高山帯の特産種で、標高1,０００～2,０００の地に生息し、幼虫期に集団生活し、これが業者に幼虫ごと、採られてしまう。１９１９年（大８年）に名命、シベリア、

中国北部に分布するものと比較され、変種とされている。

・形態；（成虫）翅開長6.5㎝、スジグロチョウの仲間、

・生態；食草、ぬぎ、ひろはのへびのぼらず、産卵塊は５０～１６０粒、幼虫期間８月～翌年６月（幼虫集団越冬）

3, べにひかげ

高山蝶中、分布範囲が最も広く、高山帯に多く生息するが、最近量は少なくなっている。

・形態；（幼虫）翅開長4.0㎝内外、ジャノメチョウ科

・生態；食草　ひめかんすげ、みやまかんすげ、めひしば、

越冬は幼虫　　３令で越冬する。

○　その他保護すべき昆虫

1, アサマシジミ（蝶）　　浅間山麓（御代田町指定天然記念物）

2, ハヤシミドリシジミ（蝶）　〃

3, ムカシトンボ（トンボ）　碓氷峠

長野県小諸市八唐松１４５７　小淵武一（信州昆虫学会員）

文責　〃　軽井沢町長倉3,０３３　土屋長久（〃　「信濃の蝶」編集委員）

佐久考古学会規約

第１条　本会は「佐久考古学会」と称す。

第２条　本会は会員の佐久地方における考古学的な調査研究を相互に援助協力進展し合い更にその親睦を目的とする。

第３条　本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学研究者によって組織する。高校生及び高校の研究団体は準会員とし、会費は徴集しない。

第４条　本会の目的を達成するために次の事業を行なう。

①総会　②例会　③調査研究　④見学会　⑤講習会　⑥会報「佐久考古」の発行

第５条　本会の運営は、会費と特別収入をもってあてる。本会会計年度は４月１日～３月３１日までとする。

第６条　本会は次の役員をおく。

①会長　②副会長　③幹事（事務局、企画、会計）　④委員　⑤会計監査

第７条　本会の役員の任期は２年とする。但し重任はさまたげない。

第８条　本会の会則変更は総会の議決をへるものとする。

附　則　本規約は、昭和４６年５月２９日より発効する。

1. 原始時代石器の石質について

白　倉　盛　男

人類が文化的進化をしつゞけてきた根原は他の動物と異なって道具を使用したことにはじまると定説されている。その最初の原始的道具は手ごろな自然石が用いられ、それが用途に応じて順次加工されたり、石質が選定されて打製石器となり、磨製石器となったものである。したがって人類文化の進化は石の文化の進展であるとも言いかえられる。まことに石器時代の出土石器類には石質の差異、加工技術の妙に驚かされるものが多い。近頃は考古学と地質岩石学との提携による石器石質出土層位による時代対比の研究も進歩してきたが、これは極めて最近のことである。

しかしこれからの考古学的研究には岩石地質学的研究が伴なわなければその真相を把握することができないことが明らかとなってきた。

筆者は極めて僅かな見分であるが郷土佐久地方出土石器類の石質について、その概要を述べて参考に供したい。

佐久地方には旧石器時代、縄文時代、歴史時代の遺跡、遺物包含地は極めて多く、標高で６５０m～1,３００m位まで、山地平地台地谷等到る処から出土し、石器の種類としては石槍、石刃類、石棒、石剣、石皿、石錘、凹石、多孔石、石斧、石匙、石錐、石鏃、勾玉、管玉、丸玉等各種のものを見ることができる。

これらの各種石器類と石質の組合わせ分類表を作製すれば次の通りになる。

1, 火成岩

閃緑岩　－　磨製石斧

蛇紋岩　－　〃　祭司用模造品

斑栃岩　－　〃

玄武岩　－　打製石器、石匙、石鏃

流紋岩　－　〃　石皿、石棒

安山岩　－　〃　石皿、石棒、多孔石

黒曜石　－　石鏃、石槍、石匙、細石刃

浮　石　－　凹石、多孔石、石錘

2, 堆積岩

チャート　－　石斧、石鏃、石匙、石錐

硅　岩　－　〃　〃　〃　〃

粘板岩　－　〃　〃　〃

砂　　岩 ― 石斧、石鏃

輝緑凝灰岩 ― 〃　〃

3, 変成岩

緑泥片岩 ― 石棒、板碑

その他片岩― 〃　〃

4, 鉱　物

硬　玉 ― 勾玉、管玉、丸玉、小玉、平玉、切子玉、耳飾

碧　玉 ― 〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

水　晶 ― 〃　〃　〃　〃　〃　〃

メノー ― 〃　〃　〃　〃　〃　〃

玉　髄 ― 〃　〃　〃　〃　〃　〃

ガラス　　〃　〃　〃　〃

火成岩

岩石鉱物のすべての種類のもとはマグマ（岩漿）が冷却固結したもので火成岩である。これが浸飾風化堆積して再生したものが堆積岩であり、これらの火成岩、堆積岩が熱、圧、等の変成作用を受けて鉱物組成が変化したり、組織構造が変なったものが変成岩である。従って火成岩の組織構造を見ることは岩石研究の基本となっている。

火成岩を構成している造岩鉱物は硬度、へき開、膨張率等の差異が著しいものが多いので、小型鋭利な道具を作るのには適していない。閃緑岩、斑栃岩、蛇紋岩は半磨製・磨製の美しい石斧に用いられており、閃緑岩は南佐久東部の佐久山塊に露出地があり、千曲川河床礫からの入手が可能である。斑栃岩は原石を他地方から求めたものらしく、その石斧も極めて少ない。蛇紋岩は硬度が低く加工が安易で、でき上りは極めて美しいためか石斧、勾玉の磨製製品や祭司用模造品が多く見られる。

玄武岩は佐久地方には模式的なものはなく僅かに荒船山、管平方面に部分的露出が見られ、打製石斧、石匙、石鏃の原石となっているものが極めて少数見受けられる。これは関西近畿方面では打製石器の大きな部面を占めるサヌカイトであるが信州の地域的特色である。

流紋岩は佐久山塊、小県山地に岩脈として所々に小規模の露出があり硬いため石斧の材料となっているがこれも少数である。

八ヶ岳立科、荒船、浅間等佐久には火山が多いため、いたる所に各種の安山岩が分布しており、その中で緻密で比較的玻璃質のものは打製石器、石皿、凹石の原石となっているものが多い。石棒も安山岩のものが多く特に県下最大の長さ２mに余る佐久町高野町の石棒も安山岩である。

安山岩質のものでは、浅間山麓の浮石が加工が容易なためか各種の石器になっているのもこの地域の特色である。

黒曜石はもともと安山岩質のマグマが急冷固結してガラス質になったものであるが断口の鋭利さと原始時代の技術の巧妙さで成形が楽にできたためであろうか、旧石器時代から各種多面的に活用されている。黒曜石の産地としては和田峠附近と立科山双子池西の冷山、八千穂村大石峠が知られているが石器原石として利用できる良質のものは和田峠附近産のものだけである。

黒曜石製石鏃で今迄採集されたものを統計処理すると和田峠を中心として中部地方全体に同心円的に中心部に濃度が濃くなる分布を示すことから石器時代和田峠の黒曜石は長野県のみでなく中部地方全体の石器資源の中心地であったもとを物語っている。

（小諸博物館長）

2. ふるさと小諸市の先史をたずねて

土　屋　　実

当小諸市内に分布する古代遺跡・遺物散布地の数は東信地方においても、他地区との比較において見る時、有数な部に属するものといえます。従ってその埋蔵文化財包蔵地としての考古学的価値は貴重なものであります。しかしながらこの包蔵地もそれに相応しい行政的配慮と処置を受けているわけではありません。このことは誠に残念なことではありますが、現行の国内各地の現況に照らして、極めて悪い状態であるということではありませんが、非常に進んだ包蔵地保護の行なわれている地域を標準にするとそこに格差がいちじるしいということであります。

また一般に民間のこれら埋蔵文化財包蔵地に対する関心も厚いとはいえず、一面からすれば、社会開発の進展のお荷物視する考え方も一部には見られるところであります。

包蔵地の保護よりも、なしくずし的に遺跡地を跡形もなく破壊して直接的な有益確保の犠牲として意に介しない所有者もないわけではありません。公的な配慮のとどかないところ、民間の認識のずれなどの悪い条件の中で、遺跡地は観光行楽地として小諸市を訪れる人々の増加にともなって、一時的な興味と関心の対象とされ、案内図などをたよりに遺跡地、散布地にふみ入り、遺品・遺物等を持ち去られるケースが見られます。古代ブームの影響から当市に来遊の学生・生徒などが指導者の引卒なしに、興に乗じて、春夏秋冬の季節もなく、田畑に侵入して生産者に多大の迷惑を及ぼしている現況は寒心に堪えないところであります。

これらは研究的資料蒐集の場合は少なく、いたずらに出土遺物の散逸を生みだすため郷土遺物の散遺を生みだすため郷土的な立場からすればいかにも惜しいことであります。

こうした環境の中で、われわれの「考古学会」は全員協調して、郷土の考古的研究を継続して行ない、郷土の埋蔵文化財の保護地の発見、先史社会の解明に意を注いで今日に至ったわけでありますが、知られることの浅かった当市地域の先史時代の動向をいささか深め厚くすることができた次第であろうと存じております。

このことは、直接には当市誌の編纂にあたって執筆される、「通論」中の社会科学の「小諸のあけぼの」の第一章を輝やかしく飾ることとなるはずであります。

会員の研究調査活動の一端にふれてみますと、当市内の遺跡地・散布地に臨場して観察調査を永年にわたって続け、必要によっては時に表面採集により遺品遺物の個片までも観察研究を行ない、研究討議もくり返して資料を検討してきたわけであります。

こうした資料は研究後は分類整理されて、地方資料として完璧な保存と保護を目指して市外への散逸を防いでおりますし、市立博物館の展示資料ともなってこの層の厚さをのぞかせているわけであります。

会員A氏の永年の資料調査活動の部分として、遺物散布地、B地を中心に石器・土器の細片中から、硬玉半製品の発見があります。これらは数年間にわたり、個々に発見した石片でありますが、これを整理して比較・研究を進めましたところ、当時の硬玉加工の技術と技法加工技術者の存否、原材料の搬入等いずれも縄文時代のB地における生活の実態に迫るA級資料であることが確認され市指定の文化財に推薦される価値あるものとされています。

考古学による先史時代の研究は世界的に未開発の部分が多く、国内の一地方の資料・研究のみをもってしてはいかんともしがたい困難さもありますが、一地方のあけぼの時代を現代そこに住むわれわれの手によって「明らかにする」お手伝いをしていこうという熱意と友情によって、同志相扶けて活動を続けていきたいと願っております。

（小諸市教育委員会総務課長）

3. 小沼付近の古代史について －塩野牧を中心として－

与　良　　清

塩野山遺跡；住居跡（祭祀跡）１ヶ所、土居状遺構２ヶ所、遺構の存在する浅間山麓は標高1,２００mの国有林である。土手の高さ1.５m、基部巾６mの規模で１辺が５０m位のほゞ梯形の囲い状に構築されている。遺構より西へ１km農林省草地造成で段状に消平された先端から土師器を伴う石囲いが検出され、祭祀跡とも推定される。地番は塩野字塩野山3,４０６番地、沢の呼称は舟ケ沢、有ケ沢といわれる。昭和４１年１月、農林省草地試験場山地支場が建設され、石囲い及び

土師器が発見されてから注目され、当時、小沼小学校小林俊美、故内堀義国氏等と調査にあたっている。

土堤の跡を平面図にすると何か牧場の跡と思われ、土堤に囲まれた中央には祭祀的な遺構もみえ有ケ沢には「水のみ場」という地名がある。この土居状遺構より南方、字南ケ原地籍に高塚様のまむし塚、２基が存し、径２０～３０ｍを計る大型のものである。

浅間山麓には、長倉牧、塩野牧、新張牧が位置したが、牧の境は、おそらく沢をさかいとして行なわれた。舟ケ沢以東が、長倉牧、舟ケ沢～蛇堀の沢が塩野牧、蛇堀以西が菱野牧と思われ、小諸市乗瀬（旧御代田町）の駒形神社をどう考えるか。

牧場の土堤と、松本市中山、上伊那郡宮田村等にある「猪土手」（近世）の異いは、隍が内側か外側かで区別されるものであり、塩野牧の存在が、前田原までゆくかどうかが問題となる。前田原古墳群等今夏調査を行なったが、後原の土居状遺構が牧場的な要素とすれば、むしろ官牧ではなく、私牧的なものではあるまいか。背後の氏族については今後真重に扱いたい。

御代田の古代史の上で、古墳の存在がいかなるものであろうか、築造した人々の性格がやゝ帰化的要素がうかゞえるのも、佐久への開拓者（移民）でもある。また御代田町内真楽寺、沼の伝承、源頼朝の浅間巻狩の伝承があり、鎌倉時代の当時は、浅間山がすっぽり信濃国であり、現在の北上州地域は御代田町の文化範囲であり、信濃国三原荘とはその事であるが、天明三年の大噴火で鬼押出し、六里ケ原が形成され、遺跡はみられない。源義仲の旗上で佐久の滋野氏系族はその後離散はしたものの北上州の其１箇村には信州的な氏姓族分布をみるのもそのなごりであろうか。

（小諸市文化財審議委員長・佐久考古学副会長）

4. 上の城発掘

武　藤　　金

はじめに

考古学というと、発掘にたずさわったり、土器をいじったり、石器を集めて、形式論や文化編年のようなことをやっておれば、それが考古学のいきかただと考えている人がないでもない。これでは学問ではなく、学にたずさわる人のひとりよがりになってしまい、学問の生命とする真理の探究とは縁の遠いものになってしまう。

考古学が人の遺したものを対象としている学問であるかぎり、研究から人間が脱落してしまったのでは、学としての意味をもたないことになってしまう。あくまでも考古学本来の研究の進めかたは、人間の生活をしっかりつかまえることだといえよう。

その文化を生んだ人間生活にまでくいいって研究の手をのばさなければ、まったく中途半端なも

のになって、考古学本来の形態をなさないことになってしまうのではあるまいか。ともかくも僕は、古代人がどんな環境で、どのようなくらしかたをしていたかを考えてみたいと思ってこの稿を草した。

実はもっと順序だてて、筆を起したかったが、まだ生れたばかりで弱さもあって、せっかくの希望をみたすことができなかったことを謝して、その先は諸賢の考をまつ。

古代人と自然の周期

昔の人間は、地球が自転しつつ、太陽の周囲を公転しているということを知らなかった。しかし人間は知らなくも自然界は現実にそのようにうごく。

その結果おこるさまざまな自然現象に、人間はいやおうなく、自分たちの生活をあわせてゆかなければならなかった。その昔の人間の最大の問題は、食糧の生産であった。食糧をふやして、人口を増殖させるのが、初期の人類に共通した目標である。その手段として農耕がある。その生産をたかめるには、自然界の季節の周期にあわせて、作物の種類を選び、作業をいとなまなければならない。生活に直結した重大事として、自然現象の周期につき認識せざるを得なかった。

家畜はそれ自体に、自然の周期に適応して生きる自発的な能力が、ある程度備わっている。家畜とは、それぞれの地域ごとに季節の変化に耐えて、年間をとおして生きられる動物が家畜だった。家畜の種類によっては、たとえば発情、繁殖期が特定の期間に限定され、家畜自身これに応じた生活をみずからいとなむ、さらに家畜自身に移動能力があるから、場所を移すという適応も可能であった。

ところが農作物にとって、季節の制約はずっときびしい多くの作物は、一年のうちのある季節でのみ生育する。その季節に生育をあわせてやるのが人間の責任である。しかも移動能力がないから生育の場所を途中でうごかすわけにはいかない。故に農耕民族は、牧畜民族よりも自然の周期について敏感ならざるを得ない。

そういう初期の農耕民にとり、大空の月以外の周期的にほゞ一ヶ月ごとに微候の女性の月のものは一つの貴重な目印の役割りをはたしたにちがいない。定期的にくりかえされるのが原則である。季節の推移を告げる能力が女性にのみ先天的にそなわっているわけで、かれらの社会での女性の価値を高めるのに役だったと考えられる。女性すべてが同じ日に月のものがあるのではなく、個人による差がある。当然その中には農作業に関する目盛りとして適した月経周期をもつ女性と、そうでない女性との区別が生じたであろう。

「折口信夫博士」は昔の日本人がこのツキの神秘をどう考えていたかを考察して、神が女性を「召されるしるし」と見なしていた。そして月のはじめは高級王女のツキモノの見えた日をもってし

た。月のたつ日で、同時にこれがツイタチである。神の来る日が元旦であり、縮っては、朔日であると考えた」という説を出している。たいへん突飛な説のように見えるが、もちろん根拠があってのことであろう。

「古事記」に出ているヤマトタケルノミコトの話の中で、ミコトが東征の途中、尾張の国に立寄ってミヤズ姫と契ろうとされたが、その時は会わずに、約束だけ交わして行かれた。帰りにふたたび尾張の国にもどって、ミヤズ姫のもてなしを受けられたが、その時出てこられたミヤズ姫の着ているものの裾に月経がついていたのである。そこでヤマトタケルが歌をよんだ（歌略）ミヤズ姫もそれに答えて歌を詠んだ（歌略）ミヤズ姫も衣服のすそに、月立たなむよと、みとめ二人が結婚したというのである。

ミヤズ姫は尾張の国の最高の王女であったのだから、ヤマトタケルノミコトは神として王女を「神の嫁」にしたのだとみれば折口先生の説のようになるわけである。

同じ「古事記」の雄略天皇のところにも、采女（うねめ）の捧げて来た盃に槻の葉が落ちてきたのを怒って殺そうとした話が出ている。葉っぱが盃におちていたからといって殺そうとしたというのは、ずいぶん乱暴な話だが、槻の木の下に女性が忌みこもる習わしがあってのことらしい。今ではほとんど見られなくなったが、女性が月のものを見た時、その期間だけ家族とは別の建物にこもって、別人の生活を送る習わしは各地にあった。

伊豆の島々ではこの小屋をヨゴレ屋と呼んでいるように、その期間は女性はけがれているからだというのが理由であった。

愛知県北設楽郡などではヒゴヤとかタヤといい同渥美部なんかではカリヤといったが、それをツキユヤという所もあった。月のものの間こもっているからそう呼んだと思われているが、あるいは槻小屋の意味だったのかも知れない。それは「万葉集」巻十一に（歌略）という歌があるように、槻の木の下で女性がこもる習わしがあったと思われるからである。

さて、殺されようとした三重の采女は、新嘗の祭りのためにこもっている建物の傍にも、槻の木が生えていたのだ。そういって弁解したので、やっと許されたと「古事記」は書いている。

新嘗の夜、男を遠ざけて女性ばかりが忌みごもりしたことは「万葉集」巻十四にある。歌だとか「常陸風土記」の富士と筑波の話をみてもわかるが、その新嘗の祭りにこもる建物の傍に槻の木があったのである。

結局、月のものの期間女性がけがれているから家をはなれて忌み小屋の生活を送ったのでなく、その期間は神に召されたとして、神をまつるために、神聖な建物に忌みこもったのがもとの意味ではないかと考えて、いわばその期間だけ「神の嫁」となるのである。

考古学的に

わが国において、巫が存在した確実な証左は、卑弥呼より古い時代については、文献の上からでは一つもない。母系氏族や、母権社会の存在を立証する記録もない。そこで考古学的資料によって縄文時代の女神土偶の存在を似ってそれを巫、巫をわが国における発生の時点と考える見方がある。中略

縄文文化も中期になると、始原的な素朴な農耕としての縟耕が開始され、縟耕社会が母系的、母権的社会の出現の可能性を示すものであり、したがってそこに巫女の存在を考定することは充分認め得る条件をもつ。女神土偶はたしかにそうした社会構造を示唆している。

その土偶が、呪的信仰を母胎として、発生した呪的宗教的な遺物であることに疑わないが、例えば多くの土偶にみられる豊満な乳房や、肥笨な腹部、巨大な女陰の露出誇張的な表現は、巫ではなく、妊婦を表象したり、または女性の生殖力を表象することによって、安産の護符とか収穫の豊穣を折念する呪物として、それを身につけ、それを祭具とすることによって、目的を達することができたと信じた。

接触呪法や模倣呪法の信仰に発する対象物と解すればよい。そういう土偶が縄文時代を通じてその終末まで存在するのにつゞく弥生時代になるとまったく姿を消すのは、そうした始原的呪術信仰がすたれて、弥生時代になってから信仰形態に大きな変革がおこったことを示していると考えられる。

とにかく巫が祭祀を専ら司どり、あるいは神がかりすることによって、一般的に信用を博していたことは、弥生時代において存在した事実である。

こうした古代日本の神がかりの巫の活動はわが古代社会に相当大きな主動力を発揮していたという事実を認めなければならない。

（佐久市平賀　　）

5. 佐久平の庚申信仰について

佐　藤　　敏

1, 庚申縁起

抑も大日本国、我が朝人皇四十二代文武天皇の御字、大宝元年の庚申の年、正月七日庚申の日四天王寺行法尊記上人の庵室へ、年の頃十六、七ばかりの童子が浄衣を着し、忽然と来たり給うて、僧都に告げて言うに、我はこれ帝釈天から天下って来た、当寺は仏法最初の霊地である。それ故に庚申の法をあまねくひろめよとの勅旨である。天竺、震旦にも、もっぱらこれを修行し崇めるのである。其れ三界の衆生は迷い多く覚りは少ない、これによって現世にも災難

を受け、後生には悪道に沈む、此の儀を憐みて給うて庚申を待ち尊むものは現当二世の諸願を成就するという。（中略）

干時延宝八庚申歳仲冬初　－

施主泉陽之内比田村　　理左ヱ門尉

2, 庚申塔の種類

板碑型・光背型・板状駒型・駒型・山状角柱型・角柱平頭型・角柱各種頭型・笠付型・丸（円）柱型・笠付丸（円）柱型・立体丸彫り型・自然石型・翁庚申

3, 異型の庚申塔

五輪塔型・宝筐印塔・層塔・灯籠・狛犬・石祠・閻魔大王

4, 文字だけの庚申塔

A　単に庚申塔だということを表示したもの

庚申・庚申塚・甲神当・庚申講・庚申碑・甲申塔・庚申塔・庚申燈

B　庚申の主尊の称之方を示すもの

庚申神・表面金剛王・道祖神・庚申尊・青面金剛神・本朝道祖神猿田彦大神・庚申大神・青面金剛明王・庚申山王大権現・庚申天子・庚申三層神・塞神・青面金剛・帝釈天王猴・孝心講・青面金剛尊・申田彦大神

C　供養のためと記すもの

申待供養・奉庚申待供養・奉修念庚申供養・庚申供養・奉礼拝供養庚申塔・奉納庚申供養候・庚申待供養・奉造立庚申待為也・奉修庚申供養処也・庚申供養仏・奉修練庚申供養候・奉待庚申供養一結成就所・奉待庚申供養・奉修練庚申供養・奉修練庚申供養一基所・庚申構満座所

D　祈願および所願成就を表現したもの

奉待庚申供養・諸願成就所・奉造立青面金剛心願成就祈所・奉造立庚申供養諸願成就処・奉建庚申ロロ家内安全祈所・終日　天下和順　日月清明　風雨以時災　所不起　国家民安　兵才無用　今日結衆等庚申二座成就為現　当二世所願　円満也・奉造立庚申供養の宝塔　各願成就修

E　二世安楽と表現するもの

奉造立庚申供養二世安楽所

奉待庚申供養石塔二世安楽

F　三層説を示すもの

絶三彭仇　現伏三層禍　速得二転楽　除弐層之罪　三層罪

昭和４８年度佐久平発掘調査要覧（その１）

6. 佐久市岩村田上の城遺跡緊急発掘調査概報

1. 調査概略

1, 調査に至るまでの経過

佐久市岩村田上ノ城地籍は岩村田地区南方に位置し、佐久平を流れる湯川の北に臨んだ田切台地の縁部で、同一台地上には、上ノ城遺跡、一本柳遺跡、東一本柳古墳等の遺跡が存在する。

上ノ城遺跡は長野県教育委員会埋蔵文化財包蔵地調査カードに登録され、弥生後期から土師、須恵など平安時代にわたる遺物が検出されている。またこの遺跡の既出資料としては、昭和４５年に佐久教育会館建設工事に際して土師式土器完形品が数個体出土している。

今回、この地域が国道１４１号線改良工事により遺跡の破壊が予想されるため、佐久市教育委員会は事前調査を行なうべく、７月１１日市教委、建設事務所立ち合いのもとに、県教委指導主事、桐原健氏と佐久考古学会員、井上行雄氏、佐藤敏氏らによる分布調査を行ない、緊急発掘調査実施を決定した。昭和４８年７月２８日、佐久市役所において調査団結式及び打ち合わせ会を行ない、調査担当者に野沢北高教諭（県考古学会員）藤沢平治氏をもち、７月２９日より発掘調査実施にふみ切った。

2, 調査構成

- 発掘調査参加者

藤沢平治（調査担当者）

土屋長久　小林幹男　川上元　白倉盛男　武藤金　三石延雄　新村薫　佐藤敏　井上行雄　森泉定勝　森泉好治　青木幸男　臼田武正　高村博文　林幸彦　太田敬吾　小柳義男　福島邦男　広瀬忠好　田中達朗　鵜飼行雄　森山公一　矢島　百瀬新治　林和夫　上原幸安　川島雅人　前原豊　鴨下幸恵　藤井裕紀枝　清野利明　小林秀人　小池哲芳　前田順子　西沢やよい　増沢利定　小原ひさ江　多田井幸視　誉田実　渡信武　林文典　松本文一

浅間郷土史研究会員　上田染谷丘高校ＯＢ　野沢南高校ＯＢ

野沢南高校郷土史班　上田高校郷土史班　上田染谷丘高校郷土史班

佐久高校生　岩村田高校生　北佐久農業高校生

野沢北高校生　浅間中学校生

（地元協力者）

河原田まつ子　掛川つや子　清水しず子　遠藤静代　堤しげ子　並木琴美　井沢しま

関かめよ　小林ふさ　小林みよ

（事務局）

細萱教育長　小山教育次長　高畑課長　小須田係長　木内捷

（見学者）

森嶋稔　米山一政　小栗擦治　輿水利雄　宮脇野沢北高校長　土屋助役

佐久考古学会員　佐久市教育委員　佐久建設事務所　東中学校生徒　岩村田小学校生徒　三井小学校生徒

- 調査の場所

佐久市大字岩村田字上ノ城２５９５～３１１１の１番地

- 調査の目的

国道１４１号線改良工事により、本遺跡の破壊が予想されるため、工事前に緊急調査をし記録保存する。

- 調査の概要

調査対象地域、上ノ城地籍約８８５７㎡（２４９Ｇ）をグリット（３×３ｍ）による平面発掘調査を行ない調査報告書を作成する。

所要日数　１０７日　　延べ人員　1,８５２人

- 調査日程

１９７３年７月２８日～１１月１８日

- 調査委託者

佐久建設事務所

- 調査受託者

佐久市教育委員会

2.　遺構及び遺物

1,　検出遺構及び遺物

o　検出遺構

時代	型式	遺構ナンバー	合計	
土師時代	鬼高期	H－０１，１０，１４，１５，１６，１８，２０，２１，２２，２８，３０，３２，３７，３８，５２，高床式倉庫	住居址 特殊遺構	１５ １

時代	型式	遺跡ナンバー	合計
土師時代	国分期	H－03, 04, 05, 07, 08, 09, 11, 12, 13, 17, 19, 24, 25, 26, 27, 29, 31, 33, 34, 35, 37, 39, 40, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 53,	住居址　34
土師時代以降	?	Ⅰ地区－土拡状遺構86 溝状遺構2 Ⅱ地区－土拡状遺構20 溝状遺構1 Ⅲ地区－土拡状遺構25 溝状遺構4	土拡状遺構　131 溝状遺構　7

o　出土遺物

・　縄文時代

加曽利E式（中期）土器片2，石鏃数点

・　弥生時代

岩村田式（後期）土器片数点

・　土師時代

土師器－甕　椀　盈　甑　杯　蓋　把手付椀型土器　台付小型把手付椀型土器　鉢　外耳等多量

須恵器－大形甕　壺　杯　台付杯等々多量

陶　器－灰和

土製品－紡錘車　土錘

石　器－凹石　石錘　砥石　磨石　軽石製品　ロウ石製品

鉄　器－鉄　刀子　鉄斧　その他不明な鉄製品等多量

その他－墨書土器　暗文土器　神功開宝（古銭）

・　土師時代以降

宋銭　元銭等種々の古銭多量

常滑片　内耳片　砥石

・　自然遺物

骨片　骨粉　種々の炭化物

2, 各遺構について

o　住居址

本遺跡で検出された住居址について次の４つに関して簡単にまとめてみる。

Ⅰ　平面規模及び平面形態について

本遺跡での住居址の規模は、１辺最低１ｍ８０（Ｈ－２５号住）から最高の９ｍ５０（Ｈ－１０号住）という大きな振幅をもつが、全体にはほゞ３～４ｍ付近の規模のものが最も多い。又５ｍ以上の規模をもつ住居址はほとんど鬼高期の時期とみてもよいことがわかる（本遺跡において）。平面形態については、方形、隅丸方形、隅丸台形、不定形等種々の形態があることを観察できる。

Ⅱ　周溝、柱穴、壁高について

本遺跡においては、周構及び柱穴をともなう住居址は少なく、周溝をともなう住居址はわずかＨ－３号、３２号、３７号、５２号住の４軒だけである。又柱穴においては住居址内外に１つもともなわない住居址（国分期のものが多い）が多くあり、どのように家を構築したのだろうという問題を提示している。さらに壁高においても、鬼高期の住居址であるがＨ－３７号住のように８０cmもあり、私たちが実際に昇降してみたのであるがちょっとやそっとで昇り降りはできないのである。そこで当時の入口施設に特殊な構造があったのではないだろうかと推測するわけだが、残念ながらそれに対する積極的な所見は得られなかった。

Ⅲ　カマドについて

カマドの研究において本遺跡での資料は非常に貴重なものを我々に与えてくれた。特にＨ－０８号住のようにほとんど当時のまま完全に残っていたカマドをもつ住居址にも遭遇した。今まで整理した段階で本遺跡でのカマドを簡単に分類してみると次の４つに分類できる。

Ａ形態　ほゞ直方体に加工された砂岩質凝灰岩を両袖の芯に使用し、そのまわりを粘土で固くかためて作られており、北壁のほゞ中央部に構築されている形態をいう。（鬼高期の住居址に伴なうものと思われる）

Ｂ形態　カマドのほとんどを（煙道部まで）角礫凝灰岩を加工した割り石で作られており、北壁のほゞ中央部に構築されている形態をいう。（国分期の住居址に伴なうものと思われる）

Ｃ形態　作りはＢ形態によく似て石を主体としているが、Ｂ形態にほとんど使用されてい

た割り石は部分的に使われているのみで、自然面を残す石も使われている。さらにB形態と最もちがう点は、構築されている位置が東壁のやゝ南より存在するということである。（国分期に伴なうものと思われる）

D形態　上のA，B，C形態に属さないもの

以上、簡単にまとめてみたが、今後の整理にさらに精密な分析をおこない改めて上ノ城遺跡のカマドについて報告をしたい。

Ⅳ　覆土内における礫群の存在

本遺跡において、覆土内に多量の礫（河床礫）が存在する住居址が約１０軒ほど確認されている。この礫群（礫の集まりを仮に礫群と呼ぶことにする）は、ほゞにぎりこぶし大の礫がほとんどをしめ、その中に頭大もしくはそれ以上の礫が少々混入する状態に存在し、覆土内における状態から人為的なものであることは明らかである。またこの礫群は住居址の床面より少し浮いており、このことから廃絶後そんなにたたないうちに何かに再利用されたのではないかと思われる。

礫群内より出土する遺物としては、ロウ石製品、手捏土器、丸底の須恵器のツボ（焼成後に底部に人為的に穴があけられている。）等が出土している。何か特殊な遺物が多く、祭祀的なにおいもするわけであるが今後の検討にまちたい。

このように住居址覆土内における礫群の存在は、住居址の廃絶そして利用という点に関して大きな問題点を提示している。

以上、概略してみたが各住居址の種々のデーターについては次の表を参考にされたい。

※　表についての説明

主軸方向　カマドの長軸方向をさす。なお方向は次の記号にしたがう。

N　北　　S　南　　E　東　　W　西

平面プラン　方形　H　隅丸方形　SH　隅丸台形　SD

不定形　Fとする

カ マ ド　上の記述Ⅲにしたがう

住居址番号	地区	グリット	主軸方向	カマド	平面プラン	プラン規模 NS×EW	壁高	調査期間	柱穴	周溝
H−01	Ⅰ	カ・キ・ク−1.2.3.	NW	A	SD	3m50×4m	61	8.24〜 9. 2	×	×
H−02										
H−03	Ⅰ	オ・カ−2.3.	E	C	H	3m×2m90	20	9. 8〜 9.30	×	×
H−04	Ⅰ	キ・ク−8.9.	N	?	SH	4m70×4m20	38	8. 7〜 8.14	×	×
H−05	Ⅰ	キ・ク−8.9.	?	?	?	4m × ?	34	8. 7〜 8.14	○	×
H−06										
H−07	Ⅰ	ケ・3.4.	?	?	?	?×2m70	20	8.28〜 8.31	×	×
H−08	Ⅲ	D・E−3.4.	N	B	H	2m80×3m40	32	10.10〜10.27	×	×
H−09	Ⅲ		N	?	H	3m60×3m50	50	10.10〜10.27	×	×
H−10	Ⅰ	オ・カ・キ−8.9.10.11.	N	A	SH	9m50×9m10	48	9.15〜10. 4	○	×
H−11	Ⅱ	ナ・ニ−22.23.24.	N	B	SH	3m80×3m	20	9.13〜 9.16	×	×
H−12	Ⅱ	ナ・ニ−14.15.	E	C	SH	3m30×3m80	13	8.17〜 8.24	×	×
H−13	Ⅱ	ド・ナ・8.9.	?	?	?	?×3m50	21	8.19〜 8.25	○	○
H−14	Ⅱ	ナ・ニ−12.13.	N	A	SD	3m10×3m50	48	8.24〜 9. 9	×	×
H−15	Ⅱ	ニ・ヌ−10.11.12.	N	A	SD	3m50×3m80	50	8.24〜 8.30	×	×
H−16	Ⅱ	ヌ・ネ−11.12.13.	NNE	A	SH	4m70×4m50	53	8.22〜 8.30	○	×
H−17	Ⅱ	ニ・ヌ−12.13.	?	?	?	3m40×?	28	8.22〜 8.30	×	×
H−18	Ⅰ	ウ・エ−3.4.	N	A	SH	3m20×3m70	60	8.28〜 9.11	×	×
H−19	Ⅱ	ヌ・ネ−12.13.	?	?	?	? × ?	?	8.22〜 8.29	×	×
H−20	Ⅱ	ト−12.	?	?	?	?×2m20	47	8.31〜 9. 7	×	×
H−21	Ⅱ	ネ−ノ−13.14.	?	?	?	?×4m30	53	9. 6〜 9.10	×	×
H−22	Ⅱ	ヌ・ネ・ノ−22.23.24.	N	A	SD	5m70×5m70	60	9.11〜 9.19	×	×
H−23										
H−24	Ⅰ	オ−カ−10.11.	NNE	B	SH	4m40×3m30	10	9. 8〜 9. 9	×	×
H−25	Ⅰ	エ・オ−11.	?	?	?	1m80×?	23	9.10〜 9.12	×	×
H−26	Ⅰ	エ・オ−11.	?	C	?	2m40×?	16	9.10〜 9.12	×	×
H−27	Ⅰ	ウ・エ・オ−8.9.10.	N	B	SH	6m30×6m40	48	9.14〜 9.27	×	×

住居址 番号	地 区	グリット	主軸方向	カマド	平面プラン	プラン規模 NS×EW	壁高 (cm)	調査期間 月日～月日	柱穴	周溝
H−28	Ⅱ	ト・ナ・ニ−22.23.24.	?	?	SH	5m70×5m10	32	9.16～ 9.18	×	×
H−29	Ⅱ	ナ・ニ−23.24.	?	?	SH	3m×5m	33	9.17～ 9.19	×	×
H−30	Ⅱ	ト・ナ・ニ−22.23.24.	N	A	SH	5m70×5m10	35	9.18～ 9.22	×	×
H−31	Ⅱ	ネ・ノ−18.19.20	ESE	C	F	3m×3m10	20	9.21～ 9.25	×	×
H−32	Ⅱ	ニ・ヌ・ネ−19.20.21	N	A	SH	6m70×7m	71	10. 7～10.16	○	○
H−33	Ⅰ	ツ・タ・チ−12.13.14	N	B	H	4m20×4m70	30	9.20～ 9.26	×	×
H−34	Ⅰ	キ・ク−10.11	N	?	SH	3m80×4m30	23	9.20～ 9.30	×	×
H−35	Ⅰ	シ−15	?	?	?	? × ?	58	9.24～ 9.30	○	×
H−36	Ⅰ	キ−10.11	E	?	SH	2m70×3m20	23	9.10～ 9.25	×	×
H−37	Ⅰ	ス・セ・ソ−10.11.12 タ−10.11	NNW	A	SD	7m×7m60	80	10. 2～10.16	○	○
H−38	Ⅰ	コ・サ・シ−10.11.12	N	A	SD	7m30×7m70	50	10. 5～10.27	×	×
H−39	Ⅰ	ケ・コ−10.11	N	B	H	4m30×4m20	25	10. 5～10. 9	×	×
H−40	Ⅱ	ニ−20.21.ヌ−20	ESE	C	SH	2m80×2m90	30	10. 8～10.10	×	×
H−41										
H−42	Ⅰ	サ−14.15	?	?	?	? × ?	60	9.24～ 9.30	×	×
H−43	Ⅰ	ク・ケ・コ−11.12	?	?	F	3m60×2m20	45	10. 5～10.13	×	×
H−44	Ⅲ	E・F−5.6	N	?	H	3m20×3m40	39	10.11～10.18	×	×
H−45	Ⅰ	ケ・コ・サ−11.12.13	NNE	B	SH	4m80×6m	40	10. 5～10.24	×	×
H−46	Ⅰ	ク・ケ・コ−11.12	N	?	SH	4m50×4m50	45	10. 5～10.25	×	×
H−47	Ⅲ	C・D−7.8	N	D	H	3m50×3m50	32	10.29～11. 3	×	×
H−48	Ⅲ	D−2.3	NNE	?	H	3m10×2m90	40	11. 1～11. 3	×	×
H−49	Ⅲ	B−1	N E	?	?	3m70×?	25	11. 5～11. 9	×	×
H−50	Ⅲ	D・E−3	NNE	?	?	3m20×3m50	19	11. 2～11. 4	×	×
H−51	Ⅲ	A・B−4	ESE	?	SH	?×2m50	23	11. 5～11.13	×	×
H−52	Ⅱ	テ・ト・ナ−17.18.19	N W	D	SH	5m70×6m	53	11. 8～11.12	○	○
H−53	Ⅱ	ツ・テ・ト−16.17	N W	B	?	3m60×?	13	11. 8～11. 9	×	×

次に種々の事情により検出できなかった住居址にⅡ地区にH－５５号（ナ・ニ－１９）、H－５６号（ヌ・ネ－１９）　Ⅰ地区でH－５４号（７－１２）の３軒を確認し、又Ⅰ地区においてブルトーザで破壊されるさいH－５７・５８・５９号の存在だけ確認することができた。

3,　発掘の成果と問題点

本遺跡は、七月下旬から１１月中旬までという長期間にわたる大規模な発掘調査を実施した結果住居址４９軒、高床式倉庫１軒、土拡状遺構１３１カ所、溝状遺構７基等の遺構を検出し県下でも最大級の遺跡の１つであることが確認された。

又遺物の面においても住居址内より良好なセットとしてとらえられる土器群の出土、後漢時代に作られ全国的にも珍らしいといわれる五銖銭の出土、我国で、和同開珠、万年通宝についで三番目に古い神功開宝の出土にさらに神事に使ったと思われるような把手付椀型土器出土等……の貴重な資料が得られた。

検出された住居址においては、豊富な資料をもとに平面規模、平面形態、壁高、主軸方向、カマドの形態等の個々のデータと住居址内より出土した遺物との関連を検討することにより住居址形態（大きな意味での形態）時期的特徴を把握することが可能のように思える。

さらに今回発掘した上ノ城遺跡では弥生時代の遺構が確認されず、同一台地上、西方約５００ｍはなれた一本柳遺跡では弥生時代、土師時代（鬼高期）の両集落の存在が確認されている。一本柳遺跡と考え合わせて同一台地上における集落の移動、発展などの問題にもふれることができよう。

加えて、佐久平における土師時代の解明においても、本遺跡の資料と西近津、中道、北近津とを合わせて考える時、土師時代の編年的資料がほゞそろったといえよう。

最後に、７月～１１月までの５カ月間にわたる間、調査遂行にあたられた佐久市教育委員会並びに参加者各位には深く感謝する次第である。

（藤沢平治　　高村博文）

7.　佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報

…　弥生後期環濠集落　…

1,　調　査　地　　佐久市岩村田西一里塚地籍１６２０～１６２１番地

2,　調　査　目　的　　長野県営佐久市北部地区圃場整備事業及び小規模河川改良事業により、この遺跡が破壊されるので、事前に緊急調査をし、記録保存をする。

3,　調　査　方　法　２×２ｍのグリットによる平面発掘調査

4, 調 査 面 積　　２４０グリッド　９６０㎡

5, 調 査 日 程　　１０月２９日～１１月３０日

6, 調 査 委 託 者　　東信土地改良事務所

佐久建設事務所

7, 調 査 受 託 者　　佐久市教育委員会

Ⅰ　調査の動機と調査に至る経過

市教委では、濁川の小規模河川改良事業に関係して、昭和４８年７月１１日、県教委文化課指導主事の桐原健氏と共に、調査員佐藤敏氏、井上行雄氏、それに市教委木内捷氏の４名にて分布調査を行なった。その結果、西一里塚地籍においては遺跡の破壊は避けがたく、事前調査をし遺跡の記録保存を行なうことを決定した。

その後、調査計画の具体化をみたものの、７月下旬に開始された上の城の緊急発掘調査が長期間にわたったため、上の城の調査期間中、１０月８日と１２日に調査担当者藤沢平治氏の立会いの下で、ブルドーザーによる表土削平、また１５日には、遺跡が湿地であるため、仮排水溝を設置するなどして、１７日に、藤沢平治氏、高村博文氏に調査対象地に、グリッド設定のための基準杭の打ち込みを行なった。

上の城遺跡の関係もあり、一段落したところでようやく、１０月２９日の本遺跡の調査実施に至ったわけである。

＜発掘調査参加者＞

藤沢平治（調査担当者　野沢北高教諭）

土屋長久　武藤金　三石延雄　井上行雄　森泉定勝　新村薫　木内捷　佐藤敏

渡辺重義　黒岩忠男　新津海三　白倉盛男　小林秀人　高村博文　臼田武正

鴨下幸恵　藤井裕紀枝　林幸彦　川島雅人　大橋広行　古川喜一　岩村田及び平

塚地区住民　上田高校生　岩村田高校生　野沢北高校生

（調査協力）　百瀬新治　小原ひさ江　矢口忠良　山岡栄子

Ⅱ　西一里塚遺跡の位置の環境

西一里塚遺跡は、餅田遺跡北側の畑作地一帯に位置し、東方１００ｍには通称餓鬼塚が存在する。

本遺跡の位置と環境については、「餅田遺跡調査概報」（Ｓ４８.３）の餅田の位置と環境を参考にされたい。

尚、西一里塚遺跡の標高は６８４.７ *m*である。

Ⅲ　遺構及び遺物

＜検出遺構＞

弥生時代後期竪穴住居址	（Ｙ－１～１１）	１１軒
〃　土　拡	（Ｄ－１～　７）	７基
〃　竪穴状遺構	（Ｔ－１）	１基
溝　状　遺　構	（Ｋ－1,2,3,4,5,6,7）	６基
環　濠	（Ｋ－５）	１基

＜検出遺物＞

（土器類）

後期弥生式土器片多量（岩村田式）リンゴ箱　３０ケ

壺　甕　高杯　杯　甑　蓋など

（原形に復元可能なもの２０数個体）

土製品　土　匙　2

土製円盤　2

（石器類）

凹　石	5
磨製石斧（蛤刃）	1
磨　石	4
敲　石	2
軽石製臼玉	1

（自然遺物）

骨片・骨粉

炭化材

炭化米

（本遺跡で特に興味深いことは、環濠内住居址に切り合いが認められ、さらに、濠内からはレンズ状異色土層中より、遺物が出土している。岩村田１本柳遺跡では全く切り合いがなかったがここで、該期弥生式土器の分類により、千曲川上流地域の、後期文化が把握される。さらに岩村田式の細分も可能になった。）

≪西一里塚遺跡検出遺構一覧表≫

遺構No.	平面形	長軸方向	規模（長×短×壁）	炉　址	複合関係	備　考
Y－1	隅丸方形	北北西	480×440×10cm	方形台状焼土のみ	D－1,K－2,3,4に切られている	周溝あり
Y－2	〃	北	?×590×15	pitあり	Y－3,4を切っている。	貯蔵穴
Y－3	〃（推定）	西（推定）	?×?×16		Y－2に切られている。	
Y－4	〃（推定）	北北西（推）	?×?×12		〃	
Y－5	〃	北北東	600×430×10	土器埋設炉	Y－7,6を切りK－1に切られている。	
Y－6	〃	北	680×490×17	〃	Y－5,7　K－1に切られている。	貯蔵穴
Y－7	〃	北　東	585×490×8	〃	Y－6を切りY－5 D－2に切られている。	
Y－8	〃	西	470×425×16	〃	Y－11を切り　Y－9,10に切られている。	
Y－9	〃（推定）	北　西	?×390×5	〃	Y－8,10,11　を切切っている。	
Y－10	〃（推定）	北　東	?×490×7	不　明	Y－8,11を切りY－9に切られている。	
Y－11	〃	北　西	595×500×21	土器埋設炉	Y－8,9,10に切られている。	
T－1	楕円形	北　東	250×225×15	焼　土		
D－1	隅丸長方形	西	160×120×36		Y－1を切っている。	炭化物
D－2	円　形		190×180×31		Y－7を切っている。	炭化物骨片
D－3	円　形		60×60×7			
D－4	隅丸長方形	西北西	270×220×25			
D－5	楕円形	北	80×70×30			
D－6	半円形	北北西	265×125×50			
D－7	楕円形	西	200×165×45			炭化物
			巾　深さ　長さ			
K－1		北	90×27cm×20m以上		Y－5,6を切っている。	
K－2		北	30×30　10m以上		Y－1を切っている。	途中で一致
K－3		北	20×30		〃	

遺構No.	平面決	長軸方向	規模（長×短×壁）	炉　址	複　合　関　係	備　　考
K－4		北	35×35cm×6m以上		Y－1を切っている。	
K－5			350～390×90×以上			
K－6		北北東	150×40cm×6.5m		K－5に一致	
K－7		北北東	105×35×?		〃	

Ⅳ　発掘調査の成果と問題点

西一里塚遺跡は、その南に隣接する餅田遺跡を昨年１０月に調査した時点において、弥生時代後期大集落址の存在が推定されていたが、今回の調査で、それが環濠集落として把握されたことは、意義深いことである。環濠の内側に住居址群、さらには墳墓としての性格を持つであろう土拡群の検出をみたことは、弥生時代後期の集落構造を解明する上で、多量の良好な出土遺物と併せて、質量ともに高く貴重な資料を得ることができたといえる。

検出された竪穴住居址をみると、１軒を除きそのほとんどが切り合い関係を示しており、環濠内を同一空間としてとらえた場合、同一集落内における住居の変遷を把握することも可能である。

また一単位の住居址から出土する土器にも型式的差異が認められ、したがって、本遺跡出土の遺物は、その細密な分析をすることにより、他の単独資料を型式的に比較検討することができる対象とも成り得るであろう。

佐久地方における後期弥生式土器は、藤森栄一氏が昭和１１年岩村田式という型式を設定した後、資料的に恵まれず、まぼろしの土器と成りつつ、現在にまで至っているが、近年佐久においても発掘調査が盛んとなり、好資料の増加をみる折、西一里塚遺跡における成果は今後、地方の弥生式文化研究を発展させていく上で、その原動力となろう。

今後、遺物等の整理が進められるにつれて、新たな問題点も出てくるであろうし、また、より一層明確にもなるであろう。発掘調査において成果が上がるということは、それだけ多くの問題点を遺跡から見出し、解明することにあると思われる。

最後に、１ヶ月もの間、厳しい寒風の中を調査遂行に与えられた参加者各位には、深く感謝する次第である。

（臼田武正）

V　環濠について

今回、西一里塚遺跡で検出された溝は、幅3.70米、深さ0.9米を計り、溝の断面はV字状よりも、溝底が凹み、樋状となり、溝底近くで多くの弥生式土器が発見されている。

この溝は集落の北部及び北東部の確認にとどまったが、昨年10月調査をみた餅田遺跡地籍（註1）が南隣りとなっていて、やはり、溝状遺構の検出をみており、ここでは幅2.75～3.95m、深さ0.24～0.4m、図上想定をすると、検出されている溝のカーブからして、楕円形もしくは、馬蹄形が考えられる。

環濠は福岡市の比恵遺跡が顕著であり、かなりの遺跡で発見されている。関東地方では、横浜市戸塚区上粕尾遺跡で（註2）、集落址と共に検出をみており、ここでは、環濠は南北95m、東西65mの南北に長いほゞ長方形を呈し、断面はV字状で、溝底に凹みが認められる部分が多い。溝中出土の弥生式土器の器形は、壺、台付甕、高杯、坩など多くの出土をみている。そして環濠内の集落址の北方に方形周溝墓、3基が位置している。

西一里塚、餅田両遺跡の環濠は、検出が全面に及ばず、また集落址も一部分ではあったが、環濠と集落址の間に土拡墳墓5基がみられ注目される。県下の類例としては、飯田市座光寺原遺跡（註3）が最初の発見であり、座光寺原遺跡は弥生後期の集落址で、溝と共に20数戸を単位とした遺跡で、環溝は幅0.6米、深さ0.45米を計り、断面はV字溝を呈している。

今後の弥生後期集落址を追求する上で基礎的な良い資料となろう。

註1,　佐久市教育委員会「岩村田餅田」郷土の文化財5

註2,　鈴木敏弘編「そとごう遺跡調査概報」　昭和47年

註3,　1962年6月26日　　信濃毎日新聞

（土屋長久）

8.　南佐久郡臼田町三分井上遺跡調査概報

I　調査の動機と調査に至る経過

昭和48年度臼田町圃場整備工事が開始され、工事中の5月1日、臼田町在住の小林秀人（小諸商業高校生）により住居址の断面露出が発見され、佐久考古学員竹内恒、三石延雄、町文化財調査員清水忠二、教育委員高橋武氏等が5月1日～3日にかけ精査したところ、住居址一軒、伴う和泉式土師器3ヶ他土師器片が発見され、付近一帯に埋蔵文化財包蔵地が存在する事が判明された。そこで臼田町教育委員会は、すぐに遺跡発見届を国へ提出するとともに、文化財保護を善拠すべき記録保存の計画が立てられた。

その後、１１月２１日付教育委員会及び工事関係者は、佐久考古学会へ遺跡調査の記録保存を依頼してきた。そこで急きょ１２月１日（土）に役員会を佐久市野沢公民館で開き、本遺跡調査を受理すると共に調査団の編成を準備し、２週間で実施する事に決定した。調査団は１８名の調査員で行ない、遺構検出作業を年度内に終了し、遺物整理、図面整理、報文作成等は昭和４９年度予算で行なうこととなった。

1, 事業の場所；南佐久郡臼田町大字三分字井上１９３番地

2, 事業の目的；圃場整備が行なわれ遺跡が破壊されるので工事前に学術調査をし記録保存をする。

3, 事業の概要；調査対象区、井上１９３番地籍約1,４０４㎡（３×３ｍグリッド１５６）を発掘し調査報告書を作成し、記録保存する。たゞし、遺物整理、図面作業は、昭和４９年度予算で行なう。

4, 調査日程；昭和４８年１２月　７日　調査団結団式及び打合せ会（臼田町公民館）
１２月　８日～１７日　発掘作業
１２月１８日～２０日　遺構実測作業
昭和４９年　４月　１日～１０日　遺物整理、図面整理作業（予定）
４月１１日～３０日　調査員報告書原稿作成（予定）

5, 主催者；南佐久郡臼田町教育委員会　事務責任者　井出節人（臼田町公民館）

6, 調査団；団長、由井茂也（会長）、副団長、輿水利雄（副会長）、主任、土屋長久
調査員、由井明、新津開三、井出正義、三石延雄、黒岩忠雄、小林秀人
武藤金、竹内恒、藤沢平治、新村薫、佐藤敏、臼田武正（信州大学生）、高村博文（信大生）、林幸彦（国学院大学生）、川島雅人（国大生）、青木幸男（明治大学生）

7, 調査協力；臼田町文化財審議員、臼田町郷土史研究会、野沢南校郷土研究会

Ⅱ　井上遺跡の位置と環境

井上遺跡は大字三分字井上１９３番地に所在し、小海線臼田駅の南東８００ｍに位置する。千曲川右岸の河岸段丘に遺跡は立地し、標高７８０ｍを計る。付近には古墳が存在し、特に入沢古墳群など、佐久平古墳分布の南限を示し、井上遺跡付近には昔、ここに池があり姫の入水伝説を伝えている。

臼田町の遺跡の発掘調査は、芦田洞穴、英田地畑古墳、月夜平等の調査が行なわれていて種々興味深い報告がなされている。

Ⅲ　遺構及び遺物

1,　グリッドの設定；調査地に３m四方のグリッドを南北にA～L、東西に－１～１１とし、１５６グリッドを説定し、平面発掘調査を行なう。

2,　検出諸遺構

時　　代	型　式	遺構名	規　　模	主　要　遺　物
古墳時代（前）	和泉式（鬼高式）	H－１号址	プラン　1辺4.2m	坩（２）、盈、甕形土器
		H－２号址	4.65×5.15m	甑、盈、甕、滑石製品
	〃	H－３号址	4.02×4.02m	高杯、杯、盈、甕
	〃	H－４号址	5.35×5.25m	甑、盈、甕、小形壺
	〃	溝状遺構１		弥生式土器片、土師器片
	〃	〃　２	幅　0.95～1.05m.－1.66m	〃
	〃	土　拡　１	0.65×0.75m.－0.05m	土師器片、縄文土器片（早期）
	〃	〃　２	1.4×1.1m.－0.68m	〃
	〃	〃　３	1.4×1.05m.－0.24m	〃
	〃	〃　４	2.1×0.95m.－0.42m	〃
	〃	〃　５		〃

Ⅳ　発掘調査の成果と問題点

古墳時代前期の和泉式土師住居址４軒からなる集落址の一部を把握した事は、佐久平では今回が始めてである。佐久市泉小学校校庭造成に伴い、和泉式の土師器を多く検出したものの遺構が発見されていなく、今回良好なセットの土師器と共に該期の生活様相、竪穴の構造及びカマドのあり方等種々貴重な資料が得られた。

佐久平の土師器の様相は、今回の井上遺跡の資料が加わる事で、和泉、鬼高、真間、国分各期にわたり、佐久市上ノ城遺跡、同中道遺跡、同一本柳遺跡、同儘田遺跡等の資料から、佐久平での土師器の編年が、その概要が整ったわけである。

又、餅田遺跡では五領の遺物も発見されている。包含層から縄文早期土器片が出された。

井上遺跡の竪穴及び生活文化に付随しているであろう、土拡、溝状遺構も興味があり、ことに溝状遺構２は弧状を描いており、円形に検出されると思われたが、一部分の検出になったもののその性格等は今後の類例をまつことにし、数少ない古墳時代、和泉期、鬼高期の住居址群を検出し得た事は大きな成果といえよう。

（由井茂也　　土屋長久）

9. 北佐久郡軽井沢町発地
江戸坂下遺跡緊急発掘調査概報

I 調査の動機と調査に至る経過

昭和４８年度埋蔵文化財分布調査として遺跡台帳の整備をしていた、軽井沢町教育委員会に、１２月１０日、軽井沢町大字発地、上発地在住の佐藤一二三氏が畑を耕作中多数の縄文式土器が発見されたと町教委に届出があった。その報は１２月１４日、土屋に伝えられた。遺物は全て縄文中期初頭の土器片であり、該期遺跡の単純遺跡であり、良好な包蔵地と推定された。

この遺跡を重視した町教育委員会は分布調査の一環として住居址が存在するかの確認の為、緊急発掘調査をする事に決定、１２月１７日～２５日までの１０日間、調査期間をおき、緊急調査の手続きを早急に国へ申請した。調査は土屋長久を調査担当者とし、１２月１７日（月）軽井沢町教育委員会職員、次長山口良造、高橋勝、佐藤和人、佐藤好雄氏等５名で調査し、包蔵地の包含層の確認を行なった。さらに１２月１９日（水）、晴、藤沢平治、土屋長久は、現地を精査し竪穴の存在する付近を選地し、つゞく１２月２５日（火）、晴、武藤金、佐藤敏、井上行雄、三石延雄、森泉定勝、高村博文、臼田武正、佐藤和人、土屋長久等９名で調査を行なった。

1, 調査場所；北佐久郡軽井沢町大字発地字江戸坂下２１４１番地

2, 調査目的；農耕により遺跡が破壊されるので、春さきの農耕以前に学術調査をなし、記録保存する。

3, 調査の概要；畑地２１４１番地地籍約５４０㎡の、散布地に幅２ｍ×長さ４ｍのトレンチを５ヶ所入れ、遺構検出を行ない、縄文中期初頭の遺構が発見された場合、昭和４９年度計画で再度調査を行なう。

4, 調査日程；昭和４８年１２月１７日～２５日

5, 主催者；北佐久郡軽井沢町教育委員会

6, 地主；北佐久郡軽井沢町大字発地　佐藤一二三

7, 調査参加者；藤沢　平治　県考古学会員　野沢北高校教諭　佐久市跡部
土屋　長久　日本考古学協会員　御代田町教育委員会　軽井沢町中軽
武藤　金　県考古学会員　佐久市平賀
井上　行雄　〃　佐久市岩村田砂田
佐藤　敏　〃　佐久市岩村田相生町
三石　延雄　〃　南佐久郡臼田町入沢
森泉　定勝　〃　佐久市岩村田荒宿

高村　博文　　県考古学会員　　信州大学生　　望月町望月
臼田　武正　　〃　　〃　　佐久市下桜井

Ⅱ　江戸坂下遺跡の位置と歴史的環境

江戸坂下遺跡は、信越線中軽井沢駅南方4.5㎞の発地盆地に位置している。

この盆地は浅間高原の平坦南端、独立峰、風越山（1,015ｍ）丘陵と八風山（1,316ｍ）山系とによって、緩傾斜の漏斗状地形を形成している。三角形盆地で標高800～900ｍの高原地にあたる。周辺からは湧水地点が豊富で、それ等は集まり、湿原となり盆地中央を北西に流れ、発地川となり、北端湯川に合流し、浅間山中腹に源泉をなす湯川はさらに西流し、佐久平へ流下する。

遺跡は三角形盆地の北側八風山丘陵の江戸坂山の南傾斜に立地している。付近の遺跡には（註1）杉瓜遺跡、中屋敷遺跡、木中、高町遺跡、上郷遺跡があり、ことに中屋敷では2重の高さ6ｍ、巾8ｍの土居とその裾より、鉄斧、鉄鏃、刀子、石臼（平安中期）が発見され、又木中から高町には、段状遺構、土累、L字状土堤があり、膳棚（ぜんだな）と呼称され、この地を林道改修の折には、五輪塔、古銭、人骨が発見されている。

上郷では、地下1ｍから壺に入って支那銭1貫500匁、宋、明、元のもの47種が発見されている。

以上が周辺遺跡の概略であるが、茂沢南石堂遺跡は、発地盆地の西端屋根の裏側に位置し、江戸坂下遺跡から西方4.5㎞に位置している。付近の考古学的調査は土屋が行なっているので、それにたよりたい。（註2）

この発地地方に人々が集尊を営んだのは、歴史時代に至り、明らかとなり、平安末～室町時代にかけてのことである。木中、高町の段状遺構、又その山頂を高城（たかじろ）と称し、山城を残し、当時栄えた事があったであろう、今日「発地千軒」と伝承し、7寺8堂があったと伝えられている。

しかし、付近に文献史料がなく、わずか岩村田大井法華堂文書中に、菅元観音の事が文明2年（1,470）にみえるのみで、中世、山城及び諸遺構が牧場的な要素が多分に強いが、背景の氏族については全く不明となった。

最近の平林富三氏「千曲の浅瀬」によれば（註3）依田姓相木氏の消長を考察している。相木氏が長倉を領していた事は、昭和5年、栗岩英次により（註4）指摘されているものの、しからば、軽井沢、御代田、横根付近まで及んだ、長倉郷及び長倉牧の内、どの地域に、相木氏が居住及び所領したかは、今日まで不明となってきている。長倉の中心地である室町期の豊昇付近につ

いては、御代田町文化財審議委員大井豊氏が、「郷土史考」にくわしく述べており（註５）梨沢の長倉城及び長倉氏もその存在が明らかであり、梨沢城の大井氏、その南側が長倉領主兼長倉牧奉行の居城である長倉城等、付近に、依田氏が所領したという古文書がみえる。

長倉牧についてふれれば、嘉暦４年の大宮造営目録には玉垣三間後としての長倉牧が出ている。そしてそれが天正６年の大宮前宮造営帳には、瑞籬三間、長倉之内、横根、発地、沓掛の三ヶ所となっている。

また諏訪神社御符礼古書には

- 寛正３年（１４６２）壬午宮頭　長倉河江木入道常栄
- 文明８年（１４７６）加　頭　長倉御符礼三貫　阿江木新左ェ門尉光康
- 文明１４年（１４９２）長倉郷　阿江木源朝康
- 文明１８年（１４９６）長　倉　阿江木源遠経

など出ており、この阿江木氏は、平林によれば、南佐久郡北相木村の坂の上に本城を、明応９年（１５００）に築城したもので、山の渓谷や、相木川の流れを巧みに利用した平城であり、依田姓であって、芦田氏、平尾氏、平原氏と共に登場し、その氏族の消長は、永享１２年（１４４０）から出現し、すでに室町中期以前に依田氏から芦田、相木氏が分派したといわれる。

文安２年（１４４６）阿江木入道道永が、桜井氏と共に布施村を支配し、阿江木氏居館址は正方形の土居と堀が今日残っている。その後相木氏は、天文１０年前後に武田氏に降つり、武田氏滅亡の直後、小田原の北条氏に組し、郷里を亡命し、主として上州方面に蟄居した様である。以上が相木氏の消長である。

望月牧の朝廷への貢馬は、後醍醐天皇、建武年間（１３３１年頃）まで行なわれ、その後信の牧は地方豪族により馬が飼育され、軍馬として大きな経済力を持ち、武士階級の発生にも伴ったが、相木氏の所領した地域は、布施、長倉共に、牧場の存在したところで、発地中屋敷、高城等長倉にあっては、発地地方が、考古資料とよく合致し、発地～茂沢付近の室町期の文化は、相木氏にかかわる諸遺構及び文化として扱ってもさしたる事はなかろうかと推定される。

江戸坂下遺跡と直接に関係はなかったが、発地付近の歴史的環境として、相木氏の長倉所領の位置について今回扱ってみた。

Ⅲ　遺構及び遺物

1,　２×４ｍのトレンチを主に、遺物散布地である江戸坂下地籍にＡ～Ｅトレンチを設定し、遺構検出にあたった。

2,　遺構は、今回の範囲からみられず、出土した遺物は次のとおりである。

時　　代	型　　式	遺物内容	
縄文時代前期	諸磯式併行	深鉢形土器片	少　量
〃　　中期初頭	梨久保式併行	土器・深鉢形土器片	多　量
		石器・打製石斧	3
		凹石その他	少　量

Ⅳ　発掘調査の成果と問題点

縄文中期初頭の遺跡での住居址の検出例は、東北信にあってはあまり多くない。北信濃、飯山市蓮、深沢遺跡（註６）、戸倉町羽尾、蝶葉遺跡（註７）等が顕著となっており、とくに後者の蝶葉遺跡では全般的に新潟県地方における縄文式土器と類似する要素が強いとされている。

今回行なった江戸坂下遺跡は、遺物散布範囲を調査したが、遺物の包含層の把握に留ったが、これも、縄文中期初頭遺跡の立地及び生活文化を知る上でよい経験となった。

来春さらに付近を精査して、調査を計画だてたい。縄文土器片は、いづれも小片で、わずか器形を知り得るが、破片には全く、まめつは観察されない。遺跡の北側がすでに、江戸坂山に接し遺物の流下は考えられない。

本調査に伴い、発地付近の歴史的環境、特に長倉郷阿江木氏の居住地について考古学的にふれた。発地付近の中世史解明の１資料となれば幸堪である。

註１，長野県教育委員会「入山峠及び軽井沢地区」『国鉄線復線化等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』３５～４２ｐ　昭４３

土屋長久『軽井沢町の遺跡』軽井沢町教育委員会　昭４３

註２，土屋長久「信濃長倉牧址にある上氏牧場遺構　－　発地中屋敷遺跡　－　」『長野県考古学会誌』第９号　昭４５

註３，平林富三「信州依田姓相木氏考」『千曲の浅瀬』６２～７９ｐ　昭４８

註４，栗岩英治『信濃庄園の研究』　昭５

註５　大井　豊「郷土史考」（一）～（六）御代田町時報　昭４７～４８

註６　長野県飯山北高校地歴部『深沢遺跡研究概報』　昭４１

註７，関　孝一「長野県埴科郡戸倉町蝶葉遺跡の調査」『信濃』Ⅲ、１８の４

（藤沢平治・土屋長久）

10. 佐久市大字三塚字東野沢田三塚遺跡発掘調査概報

I　調査の動機と調査に至る経過

昭和４８年度県営佐久平（２）地区ほ場整備事業が開始され、工事中の１１月県教委文化課より、市教委へ三塚遺跡が破壊されているとの通報があったので調査するよう連絡を受けた。急きょ佐久考古学会員藤沢平治、土屋長久、臼田武正の三氏と市教委木内捷の４名で精査したところ、住居址の１軒、それに伴なう鬼高式土器片多量を発見した。

その結果、三塚地籍においては、遺跡の破壊は避けがたく工事前に調査をし、記録保存を行なうよう県教委へ要望した。

その結果、１２月５日県教委桐原健指導主事の来市をみ、遺跡現場にて、東信土地改良事務所北沢氏、土地改良区常任理事野村氏、佐久考古学会員藤沢平治、土屋長久両氏、請負者小林建設（株）小林氏、市教委より高畑社会教育課長、木内捷の８名で協議の結果記録保存する事を決定し現場での発掘作業を１月末日を以って終了させる事、また今回の調査は発掘作業のみとし遺物整理、報告書の作製については４９年度に第二次調査として改めて契約する事を条件に東信土地改良事務所と佐久市教育委員会は１２月１９日付を以って発掘調査委託契約を締結した。

調査団の構成について市教委は佐久考古学会長由井茂也氏に依頼し、１月５日佐久考古学会は発掘担当者に藤沢平治氏調査主任に土屋長久氏を決め１月１３日（日）より調査実施することになった。

1,　調査個所　　佐久市大字三塚字東野沢田４７７－１番地

2,　調査目的　　県営ほ場整備工事が行なわれ、遺跡が破壊されるので工事前に学術調査をし記録保存する。

3,　調査概要　　調査対象区　東野沢田４７７－１番地約２００㎡（３×３グリット）を発掘調査をして学術報告書を作製し記録保存とする。但し遺物整理、図面作業、報告書作製については、４９年度に第２次調査として改めて契約する。

4,　調査日程　　昭和４９年１月８日　ブルトーザーによる表土削平

〃　１月１３日　調査団結式及び打合せ

〃　１月１３日～２４日　発掘作業

〃　１月２５日～２６日　遺構実測作業

5, 調査委託者　東信土地改良事務所

6, 調査受託者　佐久市教育委員会

7, 調査事務局　佐久市教育委員会

8, 調　査　団

顧　　門　由井茂也（佐久考古学会長、日本考古学協会員）

団　　長　藤沢平治（　〃　総務幹事、県考古学会員）

調査主任　土屋長久（　〃　企画幹事、日本考古学協会員）

調 査 員　白倉盛男　井出正義　由井明　臼田武正　高村博文

武藤金　三石延雄　井上行雄　森泉好治　森泉定勝

畠山富雄　草間富士夫

調査協力　野沢北高校山岳部　野沢南高校郷土研究会

Ⅱ　遺跡の位置と環境

本遺跡は佐久市大字三塚部落の南に接する三塚字東野沢田４７７－１番地に所在する。本遺跡西方約７５０ｍに片貝川が南より北に流れ、東方約1,５００ｍに千曲川が流れ、この両川の間に微高地が形成され、臼田方面より野沢中学校をとおり、さらに本遺跡から北に続いており、その最高部に本遺跡は位置し、標高６６９.７ｍを計る。

本遺跡の所在する三塚地籍は、西方に泉小学校遺跡、鶴田遺跡、北に三千束遺跡、市道遺跡、南西部に中道遺跡が登録されており、更に野沢地域、桜井、岸野、前山、跡部の各地域、特に片貝川流域は弥生時代から古墳時代にわたる遺跡が多数存在している。

本遺跡を含む三塚地域は、土師の古い時代（少なくとも和泉期）より終末期（国分期）に至る集落遺跡が存在することは三塚及び上記遺跡より発見されている既出遺物によっても明らかであり、今回の調査も一地点である。

Ⅲ　遺構及び遺物

３ｍ×３ｍグリットを南北にＡ～Ｊ　東西に１～１６とする１６０グリットを設定、平面発掘調査を実施し、住居址３軒、土拡２、の遺構を検出した。

＜住居址１号＞

南北７２０cm×東西７２５cmを計る比較的大形の住居址であり、破壊された石組のカマドを検出。

出土遺物

土師器　カメ、ツボ、コシキ、ワン、マリ、ツキ

須恵器　カメ、ツキ、ツボ

滑石製臼玉（１）、木器、骨片、骨粉、歯、土製丸玉

＜住居址２号＞

南北3,９０㎝×　東西３９０㎝を計る

北側より破壊されたカマドが検出された。この住居址は３号住居址の中に、すっぽりと入った状態で検出された。

土師遺物

土師器　カメ、ツキ

須恵器　カメ

滑石製臼玉（３）、凹石、刀子、骨片

＜住居址３号＞

東西６２０㎝×南北６６０㎝を計る

南部北側に、２号住居址が営なまれ、北側壁にカマドが検出され、特に土器片が多量に出土している。

南壁は道路にかかるため検出できなかった。

出土遺物

土師器　カメ、小形手捏

須恵器　ハソウ片

凹石、砥石（２）

＜土拡１号＞

南北1.6ｍ×東西3.2ｍ、深さ５０㎝で１号住居址の東壁を切って存在し、１号住居址の廃絶後、営なまれたことは明確である。次に記す出土遺物から考えて墳墓としての性格のものであろう。

出土遺物

土師器片少量、古銭（明道元宝）、鉄製直刀、刀子、骨粉

＜土拡２号＞

南北２１０㎝×東西１４７㎝、深さ２３㎝、　つぎに示すように、土拡１号とやや異なり不整形で、３号住居址の東北部に位置している。覆土の状態は、一時的に人工的なものであり土拡１号と同様である。

＜遺構外出土遺物＞

縄文後期土器片少量、弥生後期土器片少量、土師、須恵器片、かわらけ、古銭（祥符通宝、至和通宝）、滑石製紡錘車、砥石、鉄鏃

Ⅳ　発掘調査の成果と問題点

本遺跡の自然環境から考えて、西方の山麓地帯から流出する水は、片貝川をはさむ低地をうるおし、農耕地として治水技術の発達しない時代から充分に利用され、佐久地方における数少ない水田地帯として重視された所であろう。

位置のところで述べたように、本遺跡は三塚地域に広がる集落遺跡の一部であると考える。今回の調査において（遺物整理、調査をまたねばならないが）鬼高期より国分期の住居址と考えられる。

泉小学校遺跡等と、共に考えると少なくとも和泉期より国分期に至る時期の集落が営なまれていたと考えられる。又この土師器の集落遺溝が現在の三塚部落の南にも存在したことは明らかであり、すでに工事の行なわれた南側にも存在したものと推測される。

遺溝遺物等の性格については、今後の遺物整理調査にまたなければならないが、1号住居址の出土遺物から時当の生活用具のセットを知ることもできよう。しかし住居址と土坑との関係はこの調査で考えることは困難であるが、土坑や臼玉等の出土遺物から精神的な面にまでふれる調査資料を得ることができたことは大きな成果といえよう。

文献資料のないといってよいこれら遺跡の時期における人々の歴史を知るためには、彼らの活動した地域の調査を全面的に行なうことによって、より明確になると思われるが、更に精神的性格を知るうえに重要な遺跡であると推測できる。

例年になく酷寒での調査となったにもかかわらず最後まで調査に努力していただいた発掘調査参加者並びに調査員諸氏に厚く敬意を表する次第です。　（藤沢平治・木内　捷）

編集後記 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

佐久考古第2号は、2篇を小諸考古学会誌第1号に貴重なレポートがあり収録しました。ここに明記します。その他、武藤、佐藤両会員の所見及び資料を載せました。佐久平は各地域で、今年も、行政発掘という記録保存が毎月の様に行なわれています。諸先生、会員及び新鋭考古学生のたえまなき努力により学術調査として行なわれ、今後佐久平の原史・先史時代究明の資料となると思い、その要覧としまとめました。

天然記念物の保護についても扱いました。引続き次号の原稿を事務局までお送り下さればさいわいです。（N・T）

佐久考古　No.2.　昭和49年11月1日
編集者　藤沢平治・土屋長久・臼田武正
発行者　由井茂也
発　行　長野県佐久考古学会
（佐久市跡部藤沢平治方）

長野県佐久考古学会

佐久考古学会会報　No. 3

昭和52年 9 月

佐久考古

SAKUKOKO THE SAKU ARCHAEOLOGICAL SOCIETY

目　次

◆「佐久考古」発刊にあたり……由井茂也(1)

◆昭和50年度・51年度調査概報……(1)

◆学会行事……(2)

◆環浅間高山蝶保護対策 協議会発足 ……(2)

◆市道遺跡調査報告書刊行会……(3)

◆(研究発表)長野県における古式土師器の成立…花岡弘(3)

◆岸野村誌刊行会発足……(4)

◆編集後記……木内・土屋(4)

グ ラ フ

岸野榛名平遺跡、群馬県矢継遺跡、平根菖蒲平遺跡

佐久市後沢遺跡及遺構全体図

岸野滝ノ峰古墳出土剣(復元図)

（新刊紹介）

市道（いちみち）

長野県佐久市市道遺跡調査団
（団長　藤沢平治）

―長野県佐久市市道遺跡の発掘調査―

本書は、昭和49年7月31日より9月20日までの52日間にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字三塚に所在する市道遺跡の調査報告書である。

古墳時代後期鬼高期を中心とする10軒の住居址、竪穴状遺構等の発掘から、当時の人々の社会・生活を明らかにしようと試みた。

調査は遺構と遺物の関係（遺物の出土状態）に焦点をおき、その観察、データ化に努め、分析を進めた。

また、土師器については、詳細なる観察に基づき、編年研究、土器作技製術等に新たな視点から示唆を与えるものである。

本書の分析に使用した基礎資料は、別図、遺物台帳として呈示してある。

主要内容

Ⅰ　発掘調査の経緯
Ⅱ　遺跡の概観
Ⅲ　層　序
Ⅳ　遺構と遺物
Ⅴ　第9号住居址土の炭化米
Ⅵ　市道遺跡出土の土師器について
Ⅶ　市道遺跡の調査および記録方法について
Ⅷ　総　括

●体裁＝B5判・上製・函入・本文横組346頁・図版本文横組
挿図144図・付表41表・図版61図・別図6図
●領価＝6500円　送料500円
●申込方法＝郵便振替長野9135番　現金書留
●申込先
〒384-01
長野県佐久市中込3056
佐久市教育委員会気付
電話（02676）2-2111（内線372）

市道遺跡調査報告書刊行会

信濃佐久平古氏族の性格とまつり

土屋長久編著

A5判　上製函入　260頁　価3000円　〒400円

古墳による古氏族の追求

上野国に隣接する信濃佐久平の末期古墳群を対象に、浅間高原に連なる中部高地佐久盆地の群集墳に確執し、大和朝廷影響下の古墳群から古氏族の摘出、特に東国四ケ国（甲斐・武蔵・上野・信濃）に設置された勅旨牧（官牧）等の、軍事的馬四文化を基礎とした古墳群の輩出によって、東山道筋にみる大和王朝勢力の侵出をとらえた佐久アジールの崩壊。著者他一五名による論文一八篇を収録。

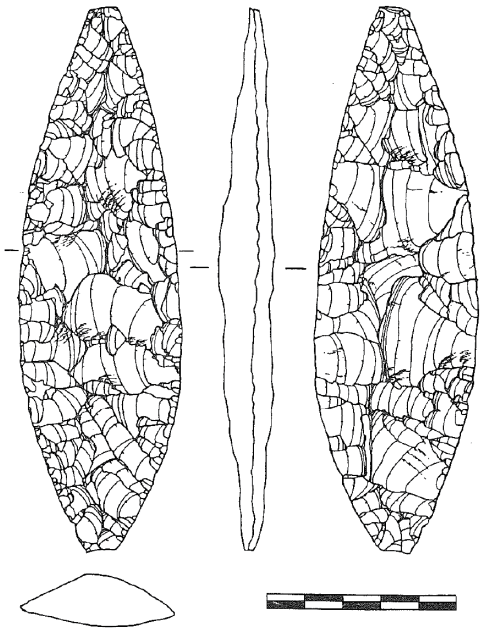
内容

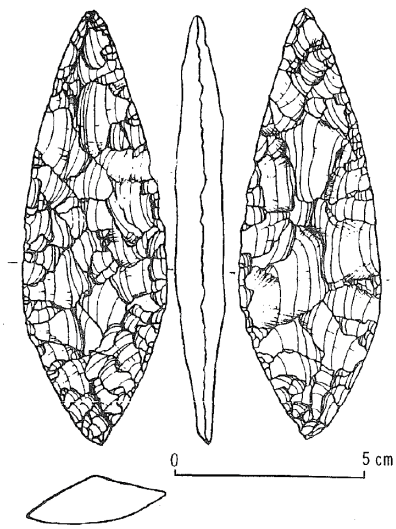
序　大場磐雄／序　由井茂也／小諸市与良芹沢古墳副葬品
与良清・土屋長久／佐久市岩村田東一本柳古墳、竹内恒・土屋長久／浅科村土合一号墳の調査、畠山忠雄／北佐久郡望月町吹上山の神古墳について、土屋長久／祭祀ある古墳の一例――佐久市下前田原古墳群、土屋長久／佐久盆地における祭祀遺物について、藤沢平治・土屋長久／佐久市岩村田上の城遺跡、藤沢平治・高村博文／信州佐久平の後期古墳群について、土屋長久／信濃における横穴式石室の胴張りに関する一問題、土屋長久／信濃古牧の成立とその性格、土屋長久／信濃佐久平の古氏族の一性格――佐久市平賀後家山古墳の調査、木内捷・土屋長久他七篇、別刷、上代官牧分布図

〒三八九―〇一　長野県北佐久郡軽井沢町長倉三、〇三三
振替長野六三二二

信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会

電話（〇二六七四）五―五〇二九

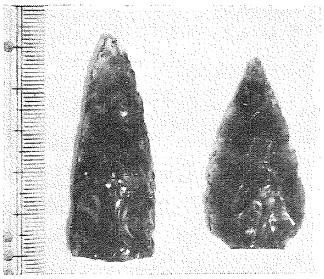




← 群馬県宮城村矢継遺跡
（所有同村前原豊）
（実測：白石浩之）
（1：2）

平根菖蒲平遺跡

↓



和和29年5月信濃史料調査折郡内で最初に確認された旧石器時代尖頭器　（永峯光一、樋口昇一氏による。）（1：2）

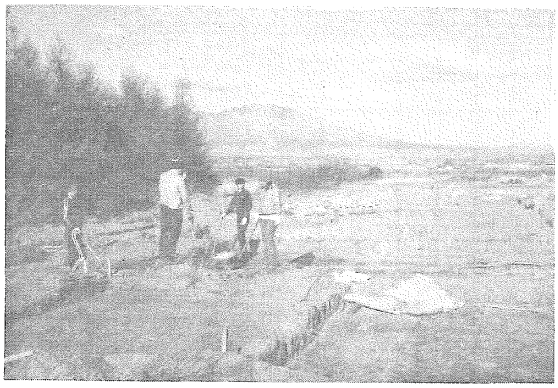
岸野榛名平遺跡 ↑

昭和52年7月18日、岸野村誌調査による遺跡調査で木葉形尖頭器として確認された。（1：2）
（畠山・武藤・土屋による）

佐久市後沢遺跡

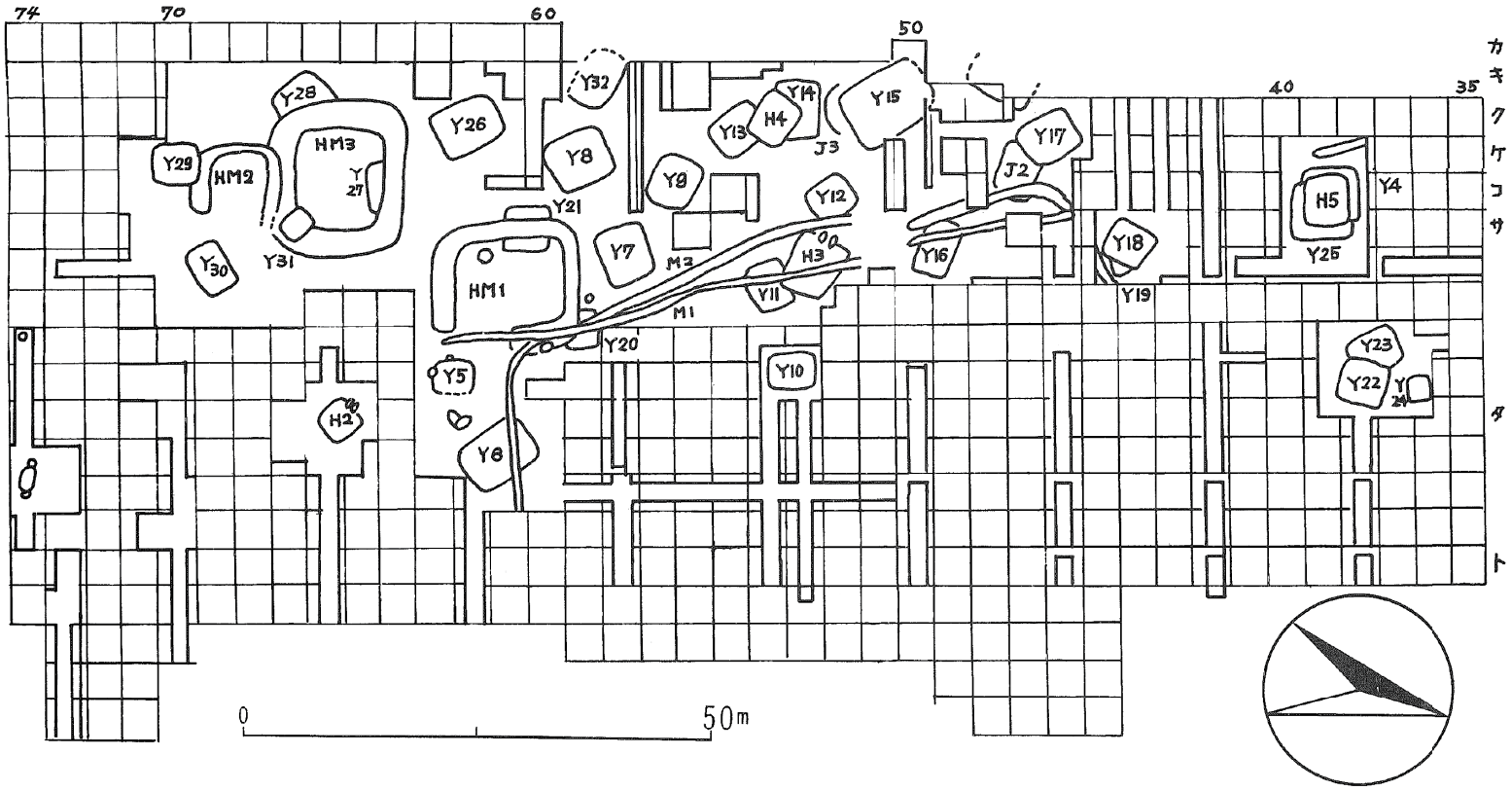
↓

昭和51年6 月より52年6 月まで、台地約4000㎡を対象に全面調査、方形周溝墓等が発見された。
弥生時代の文化庁、重要遺跡でもある。



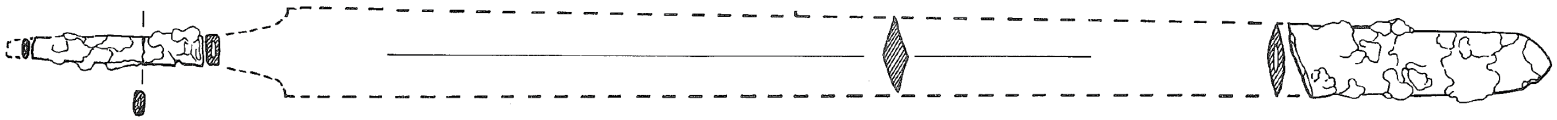
台地遺跡より浅間山を望む

弥生式の焼失住居址（第7号）



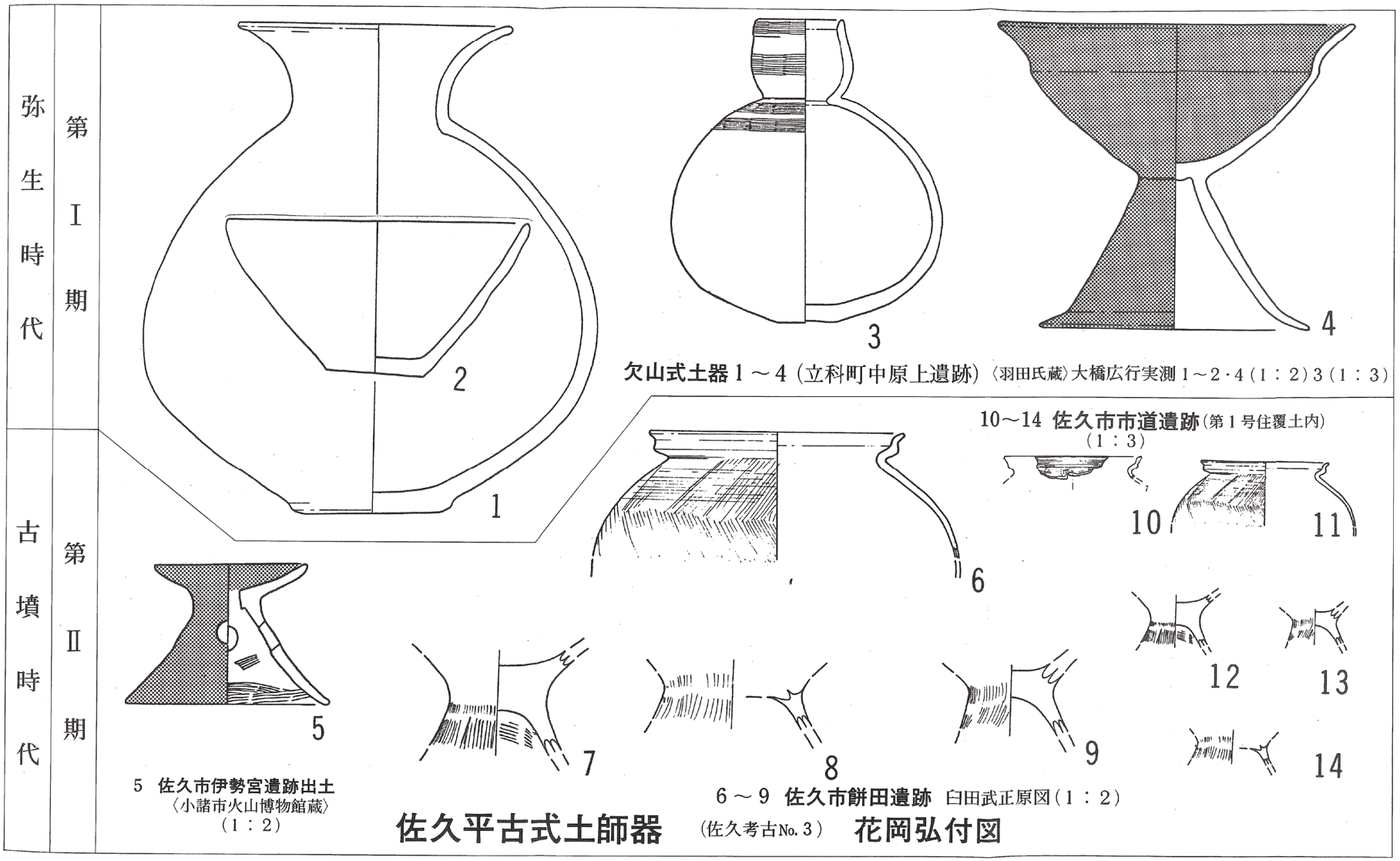
後沢遺跡遺構第Ⅱ地区全体図（3月15日現在）

弥生式後期遺跡が主で、尾根に連る台地上に墓が位置している。
住居址を切っており、該期遺跡では意義ある遺跡。（後沢通信No.3より）



岸野滝の峰剣（復元図）（1：3）

佐久平では剣が確認された最初のもの。（復元は、今少し小型であるかもしれない。）土屋



欠山式土器1～4（立科町中原上遺跡）〈羽田氏蔵〉大橋広行実測1～2・4（1：2）3（1：3）

10～14 佐久市市道遺跡（第1号住覆土内）（1：3）

5 佐久市伊勢宮遺跡出土〈小諸市火山博物館蔵〉（1：2）

6～9 佐久市餅田遺跡 臼田武正原図（1：2）

佐久平古式土師器 （佐久考古No.3） 花岡弘付図

「佐久考古」３号の発刊にあたり

（佐久考古学会長　由井茂也）

佐久考古３号を発刊する運びになった。改めて顧みると昭和48年以来１、２号とつゞいて発刊されたが、そのあと切れまをつくった。それはどんな理由だったか、とにかく３号の発刊が決ってホットしたのであるが、ホットしたらまた切れまを作るかもしれない。これからの活動のためにもあれこれ考えたい。云うまでもない「佐久考古」は、佐久考古学会の活動の足跡であり、歴史の一里塚である。

「佐久考古」をみると会員の生々の足跡があり佐久の考古学的全容が親しみ深く肌に伝えられてくる。「佐久考古」はその内容はすぐれて豊富で重要な研究の成果であることは云うまでもないが何か一つ気がゝりがある。それは編集を担当者だけに一切の負担をかけているという点である。

担当者の行動半径をはずれると何もなくなる。まかせぱなしで安易に眺められていたためではないだろうか。

「佐久考古」は、佐久考古学会の外にあるものではない、会員の中には調査や研究に便宜な環境にあるもの、正反対の立場にあるものがあるのは当然である。また、地域も広いしたいへんであるが、行動半径を固定させない方法を担当者と全会員が心がけなければならないのではないか。会員の交流を一段ときんみつにすることも大切だろう。

佐久は理蔵文化財の宝庫であり非常に重要な地域である。一面に於ては日毎に破壊されてゆく遺跡の数が増し、平地も丘陵も山野も且てなかった大規模な開発で環境も地形も過去の自然の姿を失ないつゝある。今日は調査研究とともに文化財の保護も重要な仕事となっている。佐久考古学会は、地域に於ける文化財関係の機関や研究者同好者の連携を図って活動の輪を拡げなければならない。佐久考古学会「佐久考古」の発展に大きな期待をかけ発刊の挨拶とする。

◇昭和50年度・51年度調査概報

1.家地頭１号古墳

①遺跡所在地　佐久市大字常田字家地頭337の１.339の１

②調査委託者　小諸市大字森山39の１西山永植

③調査受託者　佐久市教育委員会

④調査面積　約800㎡

⑤調査原因　宅地造成工事により開発前の学術調査保存

⑥調査期間　昭和50年10月19日～10月31日

⑦調査担当者　土屋長久

⑧調査参加者（50音順）

土屋長久(団長)、井上行雄、今井正晴、臼田武正、大橋広行、川島雅人、木内捷、佐藤敏、白倉盛男、花岡弘、林幸彦、藤沢平治、前原豊、三石延雄、武藤金、村山好文、森泉定勝、協力(浅間中学校生徒)

⑨調査概要　円墳、片袖式の横穴式石室、石室はN－13°－E．塚原岩屑流残丘上に横築、既に盛土もなく、主体部は露出。出土品は、円筒埴輪片(5)、形象埴輪片(4)、切子玉(2)滑石製(3)、ガラス小玉(20)、馬具(雲珠)(1)、鏃(20)、須恵器片土師器片、骨片、寛永通宝(20)

◇昭和50年度・51年度発掘届件数

発掘期間	遺跡名	遺跡所在地	時期	発掘の原因	主体者	担当者	備考
10·16～10·31	家地頭１号古墳	佐久市常田家地頭	古墳	個人宅地造成	佐久市教委	土屋長久	報告書近刊
11·20～51·1·31	跡部町田	佐久市跡部町田	古墳～平安	圃場整備	〃	藤沢平治	
11·12～12·31	細田	佐久市鳴瀬細田	古墳	〃	〃	〃	
5·2～5·18	県	北佐久郡軽井沢町長倉	弥生	国道土手造成	浅間古代(研)	森島　稔	信濃考古 No.35
7·19～52·3·31	後沢	佐久市小宮山字後沢320	縄文	宅地造成	佐久市教委	藤沢平治	
11·8～11·30	下吹上	北佐久郡望月町協和	縄文	学術調査	望月町教委	森島　稔 福島邦男	信濃考古 No. 42

2.跡部町田遺跡

①遺跡所在　佐久市大字跡部字町田227番地

②調査委託者　東信土地改良事務所

③調査受託者　佐久市教育委員会

④調査面積　約2,200㎡

⑤調査原因　県営圃場整備事業による開発前の記録保存

⑥調査期間　昭和50年12月1日～12月31日

⑦調査担当者　藤沢平治

⑧調査参加者（50音順）（以下同）

藤沢平治（団長）　井上行雄、今井正晴、臼田武正、大橋広行、川島雅人、木内捷、黒岩忠男、小須田盛風、小林悦雄佐藤敏、白倉盛男、花岡弘、林幸彦、三石延雄、武藤金、森泉定勝。野沢南高等郷土史班（石井恭子、臼田秀美、川村文子、菊地由紀子）　（浅間中学校生徒）

⑨調査概要　住居址5軒、土拡2ケ、溝状遺構(1)。住居址はいづれも、鬼高期に比定される。1号址（4.3m ×4.5m －26cm）隅丸方形、2号址（3.3m ×2.5m 、－26cm）隅丸長方形。3号址（4.8m ×4.1m 、－20cm）隅丸方形。　4号址（5.2m ×5.46m 、－45cm）同。　5号址（4.6m ×4.3m 、－20cm）同。1・2号址に多量の炭化材、土器は、甕、坏、等。特に1号址から滑石製品2ケ、5号址から小形手づくね土器が検出された。

3.細田遺跡

①遺跡所在　佐久市大字鳴瀬字細田、3258の1・2、3259の1、3260の1、3261の1、3262の1番地

②調査委託者　東信土地改良事務所

③　〃　受託者　佐久市教育委員会

④調査面積　約600㎡

⑤調査原因　県営圃場整備に伴う、開発前の発掘調査保存

⑥調査期間　昭和50年11月11日～11月30日

⑦調査担当者　藤沢平治　（佐久考古学会副会長）

⑧発掘調査参加者　井出正義、井上行雄、臼田武正、木内捷、黒岩忠男、佐藤敏、島田恵子、白倉盛男、土屋長久、新津開三、花岡弘、三石延雄、森泉定勝、武藤金、与良清

⑨調査概要　土拡遺構(4)、溝状遺構(1)、土拡は、1号プラン（1.56m ×1.20m 、－0.39m ）楕円形。　2号（3.04m ×1.14m 、－0.8m ）半円形。3号（2.50m ×1.30m 、－0.44m ）小判形。　4号（2.08m ×1.40m 、－0.65m ）楕円形。　5号（2.5m ×　、－0.7m ）長方形。いづれも出土遺物なし。溝状遺構（幅3.4m 、－0.6m ）ほゞ完形の甕が出土している。

4.後沢遺跡（埋蔵文化財包蔵他第168号）

①遺跡所在地　佐久市大字小宮山字後沢320番地外

②調査委託者　佐久市開発公社

③調査受託者　佐久市教育委員会

④調査面積　約4,000㎡

⑤調査原因　市公社宅地造成事業に伴い、事前に試掘調査をなし、本発掘調査をし、調査記録保存

⑥調査期間　昭和51年6月24日～7月7日（試掘調査）
昭和51年10月3日～昭和52年6月21日

⑦調査担当者　藤沢平治

⑧調査参加者　藤沢平治（団長）、林幸彦（主任）、川島雅人佐藤信之、井出正義、小林ゆり、前原豊、井上行雄、佐藤敏、三石延男、今井正晴、白倉盛男、武藤金、臼田武正、島田恵子、村山好文、土屋長久、森泉定勝、木内捷、根本かもめ、与良清、熊谷滋美、八町利佳子、黒岩忠男、花岡弘、小坂井孝修、福島邦男、野沢南高校郷土班、野沢北高校生、小諸商業高校生、北佐久農業高校生、浅間中学校生徒、福島英子（事務）

⑨調査概要　遺構は縄文前期（6軒）、中期（1軒）、弥生中期（2軒）、弥生後期30軒、時代不明が2軒、方形周構墓3基、土拡17ケ。特に東信地区では始めての方形周構墓をみた。これは千曲川水系に13基、天竜川水系に41基、縄文前期の住居址は関山式の良好な土器が検出され、又弥生式住居址第7号址が焼失住居址として検出をみ、完全に近い土器が約20点出土し、今後弥生式土器の編年の墓礎資料となろう。

◇学会行事　昭和51年度・昭和51年度

● **学習会（於 浅間会館）**

林　幸彦「佐久における旧石器文化について」3月13日

土屋長久「佐久平における古墳について」　〃

● 市道調査団（於浅間会館）

土屋長久「佐久地方の古墳と集落について」昭和51年3月

臼田武正「佐久地方の後期弥生時代」昭和51年8月

● 入門講座　昭和52年2月20日（於　浅間会館）

藤沢平治「縄文時代入門教室」

高村博文「遺物の実測技術について」

● 学習会（昭和52年3月20日）

藤沢平治「縄文土器の文様を中心として」野沢会館

高村博文「後沢遺跡の方形周溝墓について」遺跡現場

● **講演会**

丸山敞一郎「佐久地域分布調査の成果について」
昭和50年9月5日（於 浅間会館）

森島　稔「長野県における旧石器時代」
昭和51年6月13日総会（於 広域事務所）

○佐久市公民館（午後1時より）（於 浅間会館）

「佐久の誕生から現代まで」昭和52年

①白倉　盛男「佐久のあけぼの（浅間山と佐久）」1月29日

②藤沢　平治「佐久の原始時代」2月6日

③土屋　長久「佐久の古墳時代」3月19日

④与良　清「佐久の中世から近世まで」4月9日

⑤与良　清「　〃　（後）」5月7日

◇環浅間高山蝶保護対策協議会発足

高山蝶の保護について、No.2で扱ったが、昭和52年4月19日（於軽井沢町）小諸市、東部町、真田町、御代田町、軽井沢町、長野原町、嬬恋村の文化財審議委員、文化財係において、浅間山々麓の高山動・植物の保護について、パトロールを強化する事になった。群馬県でも昭和52年4月より県条例により保護指定を行った。

◇研究発表

『長野県における古式土師器の成立』

花岡　弘

近年、いわゆる古式土師器の研究が隆盛をきわめていると言える。これは、開発による資料が増加してきた事、墓制との関連、特に方形周溝墓、発生期古墳の問題等に起因するものと思われる。

こうした中において、本稿は、長野県における古式土師器(註１)の成立について、県下出土後期弥生土器及び古墳代前期の土師器の編年的研究によって解明しようとするものである。

現在、県内各地において、古式土師器の資料は増加しつつあるが、その成立に関して考究された論考は少なく(註２)まだ不明な点が多いと言える。

資料分析には、現時点までの正式な発掘調査による土器を中心として、更に既出資料の補足を加え、その型式学的分析を主に行なった。その結果、既に先学がその指摘を行なっているけれども(註３)、後期弥生土器に後続する土器群を構成する要素が次の三点に帰納されることが看取されたわけである。

Ⅰ．県内の後期弥生土器のカテゴリーに含められるもの

Ⅱ．東海系(特に東海地方西部)の土器群

Ⅲ．Ⅱの土器群よりも広い分布を有する土器群

特に、Ⅱ、Ⅲの土器群は、四つに区分した地域（千曲川流域、松本地方、諏訪地方、天龍川流域）において、共通する要素として認められる。又、Ⅲの土器群はⅠ、Ⅱの土器群に後出するもの、換言するなら、Ⅰ、ⅡとⅢは時間差を有するものとして把えることが可能である。

次に、編年に関しては、大参義一氏の東海地方西部における後期弥生土器から古式土師器の研究成果(註４)及び畿内における諸成果(註５)を採用することにより、分析資料を第Ⅰ期～第Ⅲ期の三時期に区分することが可能となり、県内における後期弥生土器から古式土師器に至る推移を把握することができたのである。そして、第Ⅱ期をもって土師器の成立とした。すなわち、第Ⅱ期から古墳時代の開始と考えたいと思う。

県内において、古式土師器を出土する住居址は、重複する例がほとんどないが、今後の調査により、重複する例あるいは資料の増加が予想される。それに伴い、編年が細分される可能性も大きいと言わねばならないが、基本的には変わらないものと思う。

最後に、論文指導にて御指導・御鞭撻頂いた小林三郎先生、有益な御教示や励ましを頂いた桐原　健・丸山敞一郎　臼田武正・大橋広行の諸先生・先輩、本稿発表に際し種々便宜を図って頂いた土屋長久氏、資料収集に際し、お世話になった多くの方々に心からお礼申し上げる。

1．従来、南関東の和泉式土器以前、或いは小型丸底坩を中心とする祭祀的性格を備えた一群を呼称していたが吉岡康暢氏の言われるように、「弥生式土器の地域性と器形を継承するグループに設定するのが妥当」と考えている。本稿では、第二、三期の土器群を呼称したいと思う。

2．桐原　健「信濃における古式土師器の位置」信濃第18巻第８号、昭和42年　この他、岩崎卓也・笹沢　浩・宮沢桓之の各氏が地域的編年と関連して論究されている。

3．前掲註２の桐原氏の論文の他に、湯川悦夫・加納俊介氏により指摘されている。湯川・加納「古式土師器の研究(Ⅰ)」
小田原考古学研究会誌第７号　昭和51年

4．大参義一「Ｓ字状口縁土器考」いちのみや考古No.13
昭和42年
「弥生式土器へ　―東海地方西部の場合―」
名古屋大学文学部研究論集(史学)XLVⅡ　昭和43年

5．安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土師器」考古学雑誌第60巻第２号　昭和49年
置田雅昭「大和における古式土師器の実態　天理市布留遺跡出土資料」古代文化第26巻第２号　昭和49年
石野博信・関川尚功「纒向」昭和51年

◇市道遺跡調査報告書刊行会

顧　問　浅沼馨(佐久市教育長)
会　長　藤沢平治(調査団長)
副会長　土屋長久
委　員　青木幸男・今井正晴・臼田武正・大橋広行　川島雅人・木内捷・花岡弘・林幸彦・前原豊・武藤金・村山好文
事務局員　高村博文
会計監査委員　高畑五男(社会教育課長)、桜井長夫(社会教育係長)(昭和52年７月22日)

国際観光都市、軽井沢で避暑される考古学関係者

昭和初期、日本列島に旧石器時代を予測した、Ｍ・Ｇマンロー氏が、旧軽井沢にマンロー病院を開業。宮平遺跡等調査。晩年北海道へ渡り、アイヌ研究を行う。戦後軽井沢外人墓地に永眠。

昭和28年軽井沢の文化人により文化協会創立。これによると、三笠宮殿下、三上次男、坂本太郎、近年では、斉藤忠、丸茂武重、故大場磐雄、の諸先生が過された。町の依頼で、三上氏の茂沢南石堂の調査は、学術調査であった。

又、佐久市、出身の先生には、岩崎卓也氏、信州に近親者がある、金井塚良一先生がおられる。本年度は、小出義治氏が、別荘視察に来軽された。

◇佐久市岸野村誌刊行会発足（昭和50年より53年まで調査）

昭和50年５月、旧岸野村（明治22年、根岸村と伴野村が合併）内の原始時代から現代まで各分野にわたり学術調査を行い、村誌刊行会が発足した。50年５月より53年３月までを調査期間とし、考古、古代班に、畠山忠雄、土屋長久、武藤金の三氏が委嘱を受けた。

同地区は、県台帳に遺跡として26ケ所記載されていたが51年８月31日～52年７月18日の調査で、約34遺跡を確認し10ケ所近く、遺跡が追加された。（文献では48ケ所）

岸野には、彦狭島王古墳と伝承される日向の御陵や、古東山道のルートでもあり、三氏を主に、広範囲にわたり、学術研究を行うという事です。

岸野の問題点のある遺跡

(1)榛名平遺跡：根岸の沓沢部落の河岸段丘上（標高６５０～７００ｍ）から先土器時代の木葉形尖頭器（高約１５cm幅４cm）が発見された。（グラフ参照）（ケイ岩製）

(2)滝の峰１・２号墳：昭和45年６月26日、県教委の丸山敞一郎氏を指導に、新幹線内分布調査折、高橋久保氏が剣片を提出されたことから、あるいは、「前方後円墳」かと、多くの期待の中で、測量調査がなされた。判然とはしなかったが、今のところ、佐久平では、両刃のある剣出土の明確な古墳で、６世紀初頭に降下しないと考えられている。

(3)休石　遺跡：昭和34年４月道路改修の折、須恵器の大甕の中に、須恵四耳壺が入って発見され、故原田諭氏の説明メモが残り、火葬墓の１種と考えられる。同遺跡からは、すでに大正期、八幡一郎氏の「南佐久郡の考古学的調査」に３ケ図版にみえる外、以後あわせ、大甕（口径55cm、高さ69.5cm）６ケ、四耳壺１、須恵甕２ケ出土しており、この様な火葬法をとる例は、県下は、もとより、中部地方にも例がなく、県外へ調査中である。古墳文化は主として群馬県と密接なつながりもあり、現在、編纂中の太田市への研修も計画されている。

尚尖頭器の実測は前原豊氏に労をわずらわした。また火葬墓については、遮那藤麻呂氏、県教委、丸山敞一郎氏、桐原　健氏の教示をうけた。　（土屋長久）

編集後記

○学会会則第３条、５により「佐久考古」を編集しました。会の動向や、学習計画については、「佐久考古通信」が、より良く、会員のきづなとなり充分役割を果し、会員60余名と共に学会は、県下でも東部上信国境に接しひとつのポイントをなす佐久地域のサークルとして成長し、調査、研究に、この佐久にも新しい活動家の会員が増加してきました。開発と保護というきわめてむずかしい時でもあり、「佐久考古」を学会誌にという声も多く、昭和46年発足以来７歳(年)を迎え、ここにひとつ元服をすませ、社会教育という大きい視野から、学会活動を推進してゆきたいものです。それが為にも会員各位の皆様に是非力添えをお願いします。

○埋蔵文化財パトロール隊(佐久班)

今年は、新遺跡のみでなく、遺跡全体の埋文白書作体製する年度です。埋蔵文化財保護に全会員が協力し、佐久体制を確立しよう。パトロール員に移動もありましょうが、ひとつ、全会員で話し合い、より良き佐久班の編成をしたい。本号では一応目的をもち編集し、研究発表、調査概報、新しい遺跡遺物の紹介等を扱いました。今年度は、昨年度からの後沢遺跡(方形周溝墓の保存)、同遺物整理(９月より)「市道報告書」の刊行。上桜井北の調査、２班に分かれての調査。緊急発掘も年々規模が大きくなり、台地あるいは、微地形の高処一帯が調査対象となり、文化財行政、研究調査の面からも、大きくその方向が、ひとつの目的に向って動きはじめた観がする。長期にわたる調査には、ケガや身体には充分気をつけよう。依頼する原稿もあると思いますが次号の原稿をお寄せ下さい。　（木内）

○「佐久考古」No.１～No.３まで、収録原稿や資料が、会長由井先生の指適のとうり、佐久平でも、やや北部がりであり、No.２では、小諸市地区の会員の増加と文化財保護普及を主にした。No.４ではひとつ、川上村の「信濃大深山遺跡」の大冊の刊行もあり、南佐久郡を主に編集したい。ご協力をお願いしたい。

夏の軽井沢は、大学の考古学の諸先生が多く、ばったりいきあったり、急に電話を受け、本当にとまどう。我々もしっかりした、調査や、本報告にたづさわりたい。

佐久の諸文化の特殊性から、これ等諸先生を会へお迎えして、学習しても良いのではあるまいか。

○ひとことで『学会誌』の創刊と、いってもなかなか大変である。報告書、資料紹介、その内容についても諸問題がある。切に会員の皆様のご協力をお願いします。

市民、一般へ、普及の役割を果した佐久市、小諸市・御代田町の「郷土の文化財」は、資料集、又写真等のみやすい冊子であった。

これ等の冊子と「佐久考古」、「市道」等が教材あるいは郷土史料として活用されることを願いたい。

尚、本号の発行には、佐久印刷所のご協力に厚くお礼申し上げる。　（土屋）

（近刊紹介）

『平賀氏城跡』　平賀氏城跡保存会編　A5　約100P　非売品

会長　武藤　金

県史編纂委員　米山一政『平賀城址について』

付　平賀氏史料

県史跡指定（昭和46年）を受け、地元に保存会が結成され文化財保護事業のひとつとして本書が刊行

『家地頭1号古墳』宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

B5 約50P 非売品

団長　土　屋　長　久

発行　佐久市教育委員会

佐久市で始めて検出された**埴輪**出土の古墳、塚原泥流残丘にきづかれた塚原古墳群中、最大の墳丘を持ち上野国と文化的交渉のなぞをとく。

書　籍
パンフレット

活版印刷（上製・並製）
オフセット印刷…写真製版より一貫作業

古文書、実測図などの複製にクィックシステム
（少部数の印刷に最適・僅かな時間でできます）

佐久市野沢町原　㈱佐久印刷所
電話（02676）2-0074㈹

――タイプライター――写真植字――活版――オフセット――

佐久考古　No. 3　昭和52年9月1日

編集者　木内 捷・土屋長久

発行者　由井茂也（〒384−14 南佐久郡川上村御所平）
(電) 02679−7−2401

発　行　〒385
長野県佐久考古学会
(佐久市岩村田住吉町1.040の7
(電) 02676　8−0617 木内 捷方)

印　刷　㈱佐久印刷所

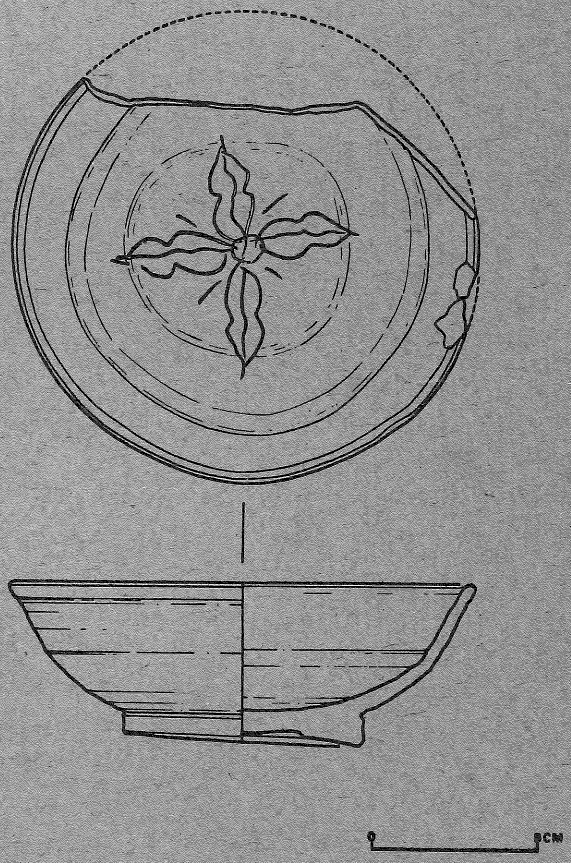
長野県佐久考古学会

会報 No.4

昭和53年5月

佐久考古

SAKUKOKO THE SAKU ARCHAEOLOGICAL SOCIETY



〈長野県佐久市後沢遺跡H－9号住居址出土緑釉坏〉

（新刊紹介）

市道（いちみち）

長野県佐久市市道遺跡調査団

（団長　藤沢平治）

―長野県佐久市市道遺跡の発掘調査―

本書は、昭和49年7月31日より9月20日までの52日間にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字三塚に所在する市道遺跡の調査報告書である。

古墳時代後期鬼高期を中心とする10軒の住居址、竪穴状遺構等の発掘から、当時の人々の社会・生活を明らかにしようと試みた。

調査は遺構と遺物の関係（遺物の出土状態）に焦点をおき、その観察、データ化に努め、分析を進めた。

また、土師器については、詳細なる観察に基づき、編年研究、土器作技製術等に新たな視点から示唆を与えるものである。

本書の分析に使用した基礎資料は、別図、遺物台帳として呈示してある。

主要内容

Ⅰ　発掘調査の経緯
Ⅱ　遺跡の概観
Ⅲ　層　序
Ⅳ　遺構と遺物
Ⅴ　第9号住居址土の炭化米
Ⅵ　市道遺跡出土の土師器について
Ⅶ　市道遺跡の調査および記録方法について
Ⅷ　総　括

●体裁＝B5判・上製・函入・本文横組346頁・図版本文横組
挿図144図・付表41表・図版61図・別図6図
●領価＝6500円　送料500円
●申込方法＝郵便振替長野9135番　現金書留
●申込先

市道遺跡調査報告書刊行会

〒384-01
長野県佐久市中込3056
佐久市教育委員会気付
電話（0267）62-2111（内線372）

信濃佐久平古氏族の性格とまつり

土屋長久編著

A5判　上製函入　260頁　価3000円　〒400円

古墳による古氏族の追求

上野国に隣接する信濃佐久平の末期古墳群を対象に、浅間高原に連なる中部高地佐久盆地の群集墳に確執し、大和朝廷影響下の古墳群から古氏族の摘出、特に東国四ケ国（甲斐・武蔵・上野・信濃）に設置された勅旨牧（官牧）等の、軍事的馬四文化を基礎とした古墳群の輩出によって、東山道筋にみる大和王朝勢力の侵出をとらえた佐久アジールの崩壊。著者他一五名による論文一八篇を収録。

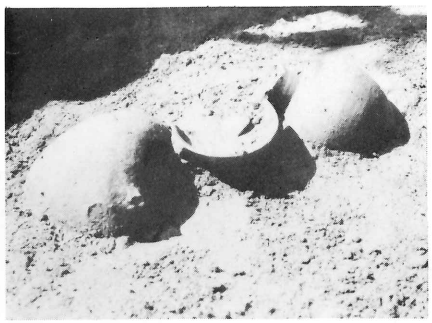
内容　序　大場磐雄／序　由井茂也／小諸市与良芹沢古墳副葬品　与良清・土屋長久／佐久市岩村田東一本柳古墳、竹内恒・土屋長久／浅科村土合一号墳の調査、畠山忠雄／北佐久郡望月町吹上山の神古墳について、土屋長久／祭祀ある古墳の一例――佐久市下前田原古墳群、土屋長久／佐久盆地における祭祀遺物について、藤沢平治・土屋長久／佐久市岩村田上の城遺跡、藤沢平治・高村博文／信州佐久平の後期古墳群について、土屋長久／信濃における横穴式石室の胴張りに関する一問題、土屋長久／信濃古牧の成立とその性格、土屋長久／信濃佐久平の古氏族の一性格――佐久市平賀後家山古墳の調査、木内捷・土屋長久他七篇、別刷、上代官牧分布図

〒二八九―〇一　長野県北佐久郡軽井沢町長倉三〇三三
振替長野六三二一一

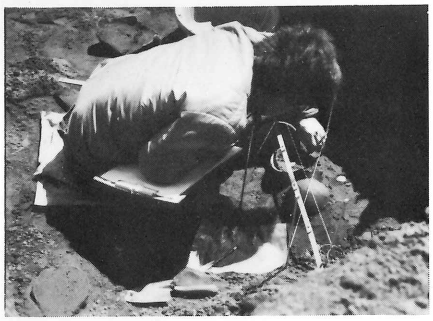
信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会

電話（〇二六七四）五―五〇二九

昭和43年度地点

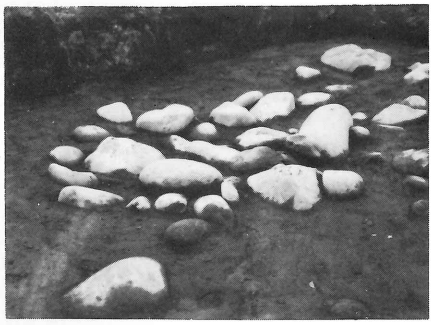


須恵器出土状況

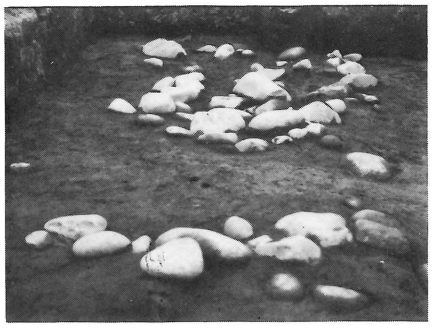


調査状況（その１）

調査状況（その２）

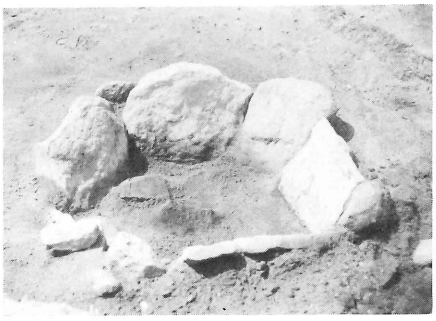


焼埃り炭化層と配石址



左同（その２）

長野県岸野休石遺跡



長野県北佐久郡御代田町池尻遺跡

長野県北佐久郡御代田町南畑遺跡

１．岸野榛名平遺跡の調査

川島雅人・佐藤信之

遺跡の位置

榛名平（Harunahira）は、佐久市大字根岸字榛名平3,274番地に所在する。遺跡は杳沢より東岸の河岸段丘上に位置し、先土器時代から、弥生・古墳時代までの複合遺跡である。後沢遺跡でも、試掘調査報告では、片貝川東岸の洪積層中にあってこの傾向にある。範囲は、段丘上、平面（図上）約40,000㎡となっている。標高６８７～６９７ｍ、千曲川との水面からの比高は、約120ｍとなっている。

調査の経違

榛名平遺跡の調査は、昭和50年より現在まで４回の経過をたどり、今回分布調査の一環として表面踏査が行われた。

昭和50年８月31日　台地表採の既出物調査。

昭和52年７月22日、８月21日、29日　出土地点確認。

昭和52年９月　遺跡範囲確認。

昭和53年３月18～19日、榛名平坪の内等5,０００㎡を対象に表面採集による踏査を行いい分折

尚、遺跡の立地には、由井茂也・林茂樹氏の所見により、前原豊・永峰光一・小林達雄・大橋広行・藤沢平治・畠山忠雄氏の教示・指導をうけた。この調査は岸野村誌考古資料の調査の一環であるので、その責任の所在を明記したい。

確認された遺構・遺物

今回調査で確認かれた、遺構・遺物は、１古墳時代・古墳跡２基、２弥生・古墳時代土器片、３先土器時代石器類を確認した。

１、坪の内第１・第２号墳で、昭和46年台地最頂部に佐久平農協岸野支所により、ち蚕飼育所が建てられ、その基礎工事中、縄文時代前期・古墳時代土器片が整理箱２ケ分出土したが、遺物は砂層にあり、器片はまめつが著しい。

２、弥生・古墳時代の榛名平台地№２～№３に顕著な分布をみ１００ｍにつき約５０という、Standing Cropを示している。古墳との関連が考えられる。

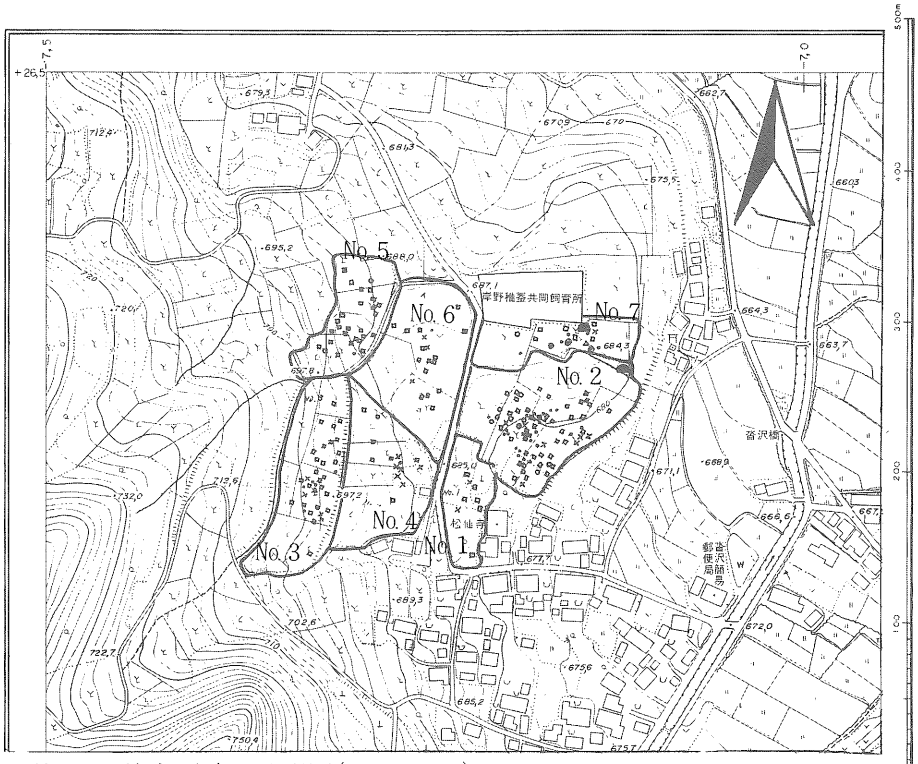
３、先土器時代、付近一帯の先土器文化は、既に地名表では、西の窪、赤名木坂が知られていたが、ようやく確認された。付近一帯の表採集は地主により採集にかかわり、桑畑造成であ

る。硅岩（チャート）のフレイクの密集地点がNo.７で、木葉形尖頭器採集地点と一致する。

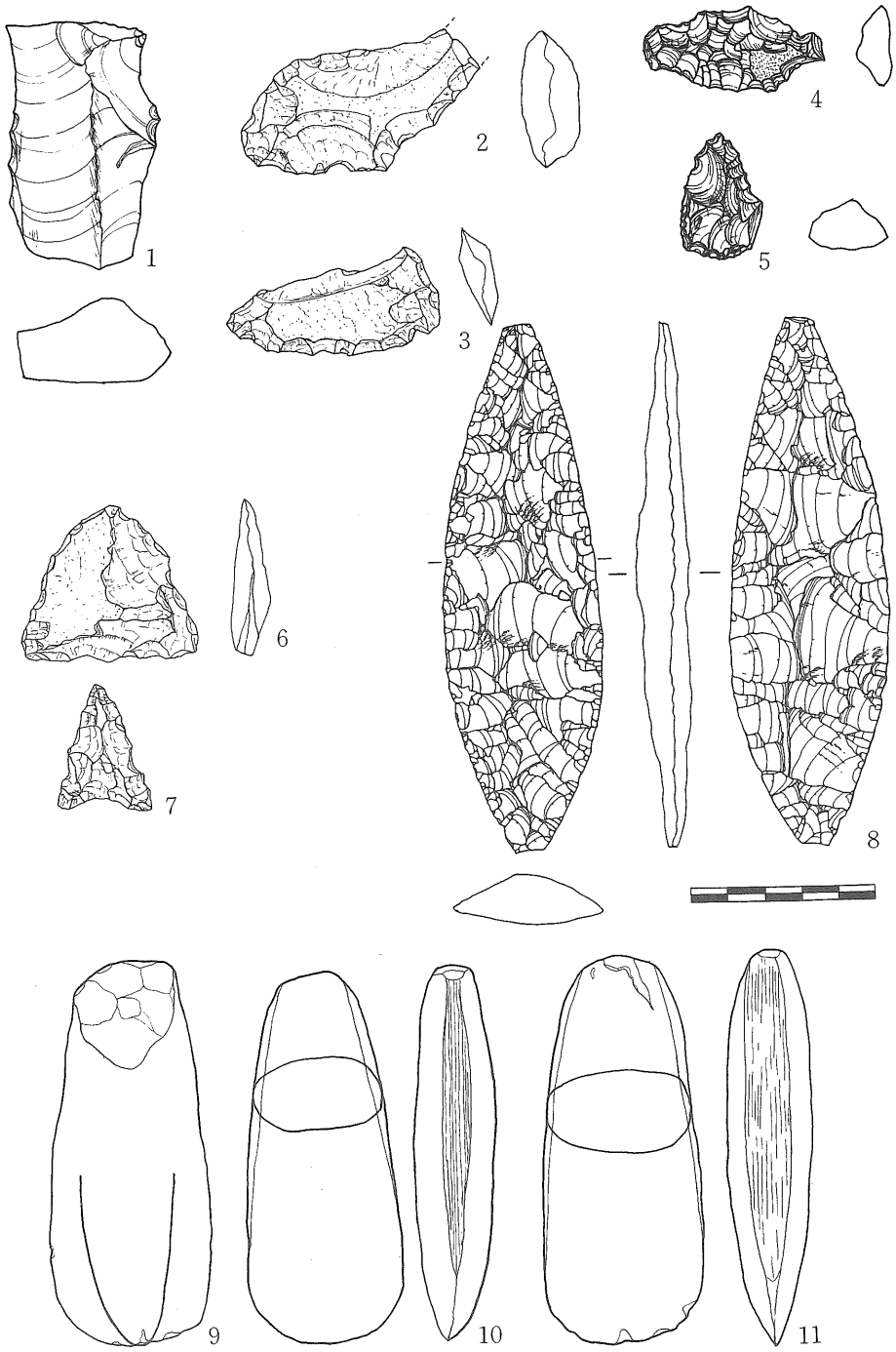
白倉盛男氏の地質的所見では、硅岩は付近に産地がなく、遠く、南佐久郡の千曲川上流地域とされ、硅岩は、柏垂遺跡と類似するといわれる。

層位

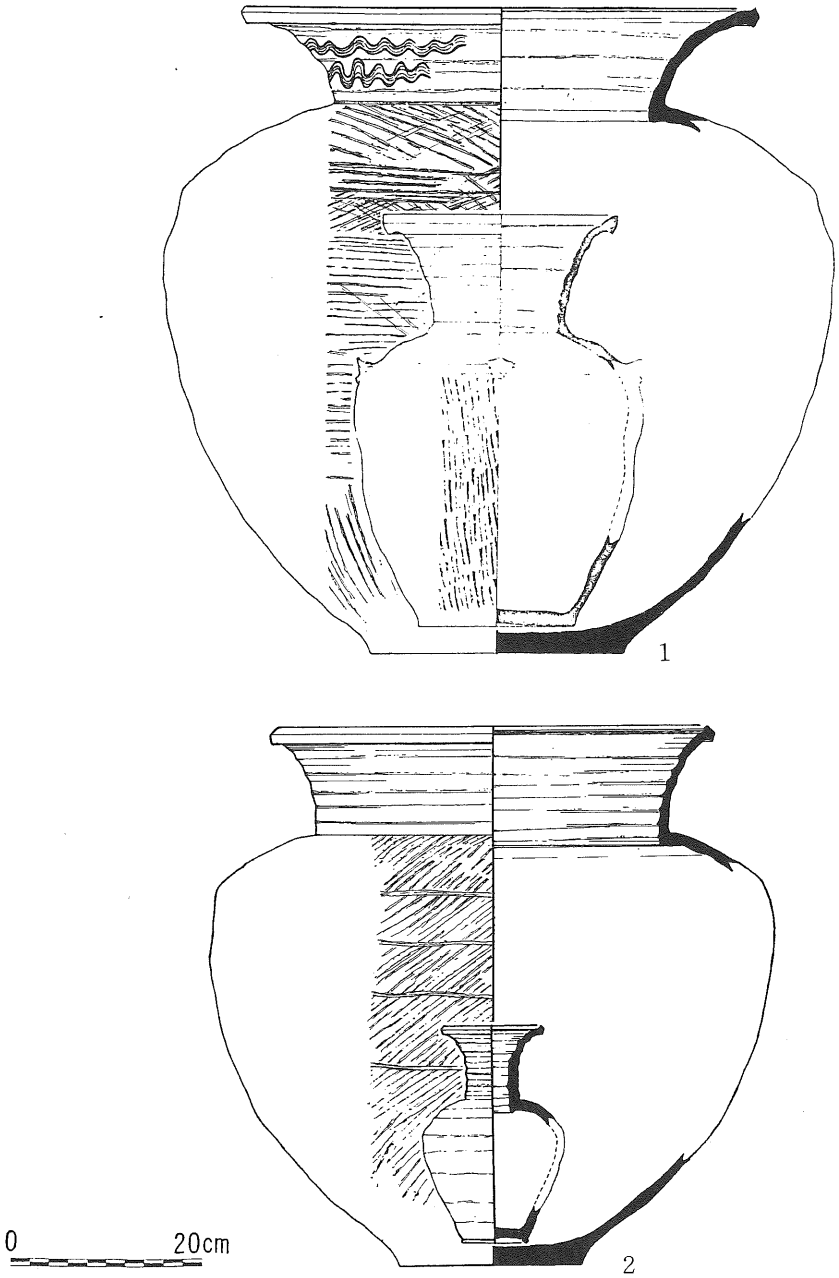
榛名平遺跡上、すでに岩盤（地山）が地表に露出し、明治～大正期の桑畑造成中耕作に伴い、削平され、きわめて浅く５～10cmを計り、文化層の把握は次回計画している。



第１図･榛名平遺跡地形図（１：50000）○縄文△弥生□土師×須恵・石器
⊙チャート・フレイク◓古墳跡



第２図 榛名平遺跡(２．３．６．７．９～11) 西の窪遺跡(１．４．５)(１：２)



第３図 休石遺跡(昭和43年５月出土品)(１：８)

2．岸野休石遺跡の調査

土屋長久・武藤金

遺跡の位置

休石遺跡は、佐久市大字根岸字休石　　番地に所在する。遺跡は千曲川の南岸段岸段丘上、標高　６５０　～ 660 ｍに位置している。昭和初年から完形の須恵大甕が出土した遺跡と知られていたものの、その性格は判明しなかった。その出土地点は、字宮川　（miyagaw）、　字大長田（Oosada　）にかけての　1,000 ㎡がその範囲である。

調査の経違

休石遺跡の調査は、昭和４３年５月、県道 岸野 線の改修工事にかかわる。　　火の雨塚古墳付近より、埴輪、この地からは大鷹３ケの中にそれぞれ、長頸坩・甕・蔵壺器が入って発見さされた。　（第 3 図　1・2　）

その後、昭和46年５月　県分布調査　桐原健・竹内恒・土屋長久・木内捷

昭和50年５月　県新幹線工事内分布調査　丸山徹一郎・臼田武正・高村博文・青木幸男の調査員によりその範囲がつきとめられた。そこで、岸野村誌刊行会が主体となり、確認調査が昭和53年３月18日～21日にかけ行われた。

調査の概要

昭和43年５月に検出されたという地点に、Ａ～ＧＧ１～10Ｇ、　２８０㎡を対象に確認調査を行い、大甕が正位で埋没していたという、外部施設、及び、副葬品等の追求にかかった。

Ｂ３　Ｇにおいて、明瞭に砂層、検出地点の土層位が認められ、付近一帯を精査 したところ､地表より、１．４ｍで、長頸坩・土師甕・壺、提瓶が一直線に並び、さらに、土師器高台付高杯が、ふせた状況で３ケ検出された。この面は、厚さ５ｍの炭化層（焼土交り）上にあって、加熱をを受け、きわめて固い状況であった。

配石は、大鷹周囲に列状で、配石趾内は、10～18㎝とその炭化層は、厚くなっている。石の岩質であるが、片貝川流域のものでなく、千曲川に求めたといわれ、佐久町付近の岩石であるという。　配石止、焼石上に、鉄鋤(1)、釘(1)、直刀片(1)がみられた。

まとめ

須恵器の年代から、10～12世紀に比定され、また既出物の蔵壺器は、東国独特のものからして、本遺跡群は、径10ｍ位の範囲を砂を埋った、　火葬墓群と解される。砂層の確認されるのは、

台地全体には及んでいなく、今回の確認調査にもとづき、付近住宅造成等の諸開発が進んでおり、緊急記録保存が急務であろう。

この調査にあたり、次の諸氏の教示・指導を受けた。記して感謝の意を表したい。

永峰光一・桐原健・関孝一・丸山敏一郎、畠山忠雄・大井隆男、白倉盛男・由井茂也・臼田都雄、木内捷・工藤源蔵・藤沢平治・遵那藤麻呂、小林重義・能登健・岡村和重・木内義一・上野源司・市川貞雄

第4図　榛名平(上)・休石遺跡(下)の立地

3．塩野下藤塚の調査

山本太郎・大沢俊雄・堀篭源

遺跡の位置

下藤塚遺跡は、御代田大字御代野字下藤塚1,061 番地に所在し、遺跡は浅間山(標高2,542ｍ)南麓の丘陵尾根中、標高８８０ｍに位置している。

縄文後期敷石住居址が確認されている。この地を広域農道が通過する工事内となっている。

1,000　㎡が遺跡の範囲である。浅間山第３外輪山の火口までは、図上 8 ㎞を計る。

調査概要

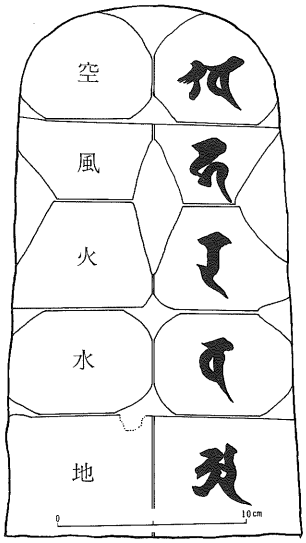
下藤塚は、その名の示す、塚があり、古墳らしい様相はみられない。昭和48年度町内分布調査に基くのであるが、時又６８１番地より「石がん」１ケが表採されていたことによる.（第５図）

確認された　五輪塔婆は、火－１ケ　で地点に、50㎜の農業用水道管工事が行われたので、あるいは、この折出土したかもしれない。　現在、旧小沼小に２基、又　真楽寺境内、多くの伝承を有する、甲賀三郎の大沼の清掃が約10年前に行われ、石造五輪塔婆５基が発見された。

まとめ

この地域は、上代、塩野牧址となっている。佐久平でも早くから開拓が進み、浅間山に、真楽寺が開基され、中央文化との交流があってのことと推定される。字名に古牧・駒留・塩野・馬瀬口等、うかがわれ、後世、山麓に住した牧人の塩野氏族が、後世下り、交通路のかなめの、字上小田井に構築したのが、「小田井城址」とみる学説もある。いづれも該期、古文書がなく、中世有形文化財、美術工芸品等を以って調査したが、第２次・字上寺場の真楽寺廃寺跡、法印房の沢等年次計画をたてている。

「石がん」は県下で２例目でありが、今回地下構造は把握されなかった。



第５図 下藤塚遺跡出土石がん
（1：4）

4．児玉池尻遺跡の調査

桜井為吉・尾台卓一・小林五郎・土屋長久

遺跡の位置

池尻遺跡は、御代田町大字御代田字池尻３６３７番地に所在し、地目は芝地。台地上、及、田地周辺台地約1,000㎡に縄文中、後期の大集落址がある。標高771㎡を計り、付近に源泉もあり、言い伝えによる７玉の池の内″児玉の池″が付近に存したと考えられ、この台地の西方２㎞の田切り越えに、中世小田井城址が位置する。

調査の経違

池尻遺跡は、分布調査では、旧御代田小学校郷土資料室遺物から、縄文中、後期の散布地として、昭和40年度登録したが、その後地主大井忠太郎氏より、農耕中にトラクターに、石がかかり炉石が発見された

昭和52年11月10日　御代田　　大井忠太郎氏より発見届　11 月11日山本太郎・土屋今朝男土屋長久氏確認　53年２月28日　国へ発見届

53年２月28日　　″緊急発掘調査の為、試堀調査の通知を行う。

53年３月25日～31日　確認調査

53年４月28日～30日　第１住居址内　人骨調査　　指導聖アリマンナ医科大学校　森本岩太郎氏　遺構の検出に伴い、耕土が浅く、農耕破壊が早いので、今年度町は、台地５００㎡を借地とし台地全体の集落趾追求のために、緊急発掘調査の計画が立てられた。

層位

１番大きな関心は、人骨出土の層位

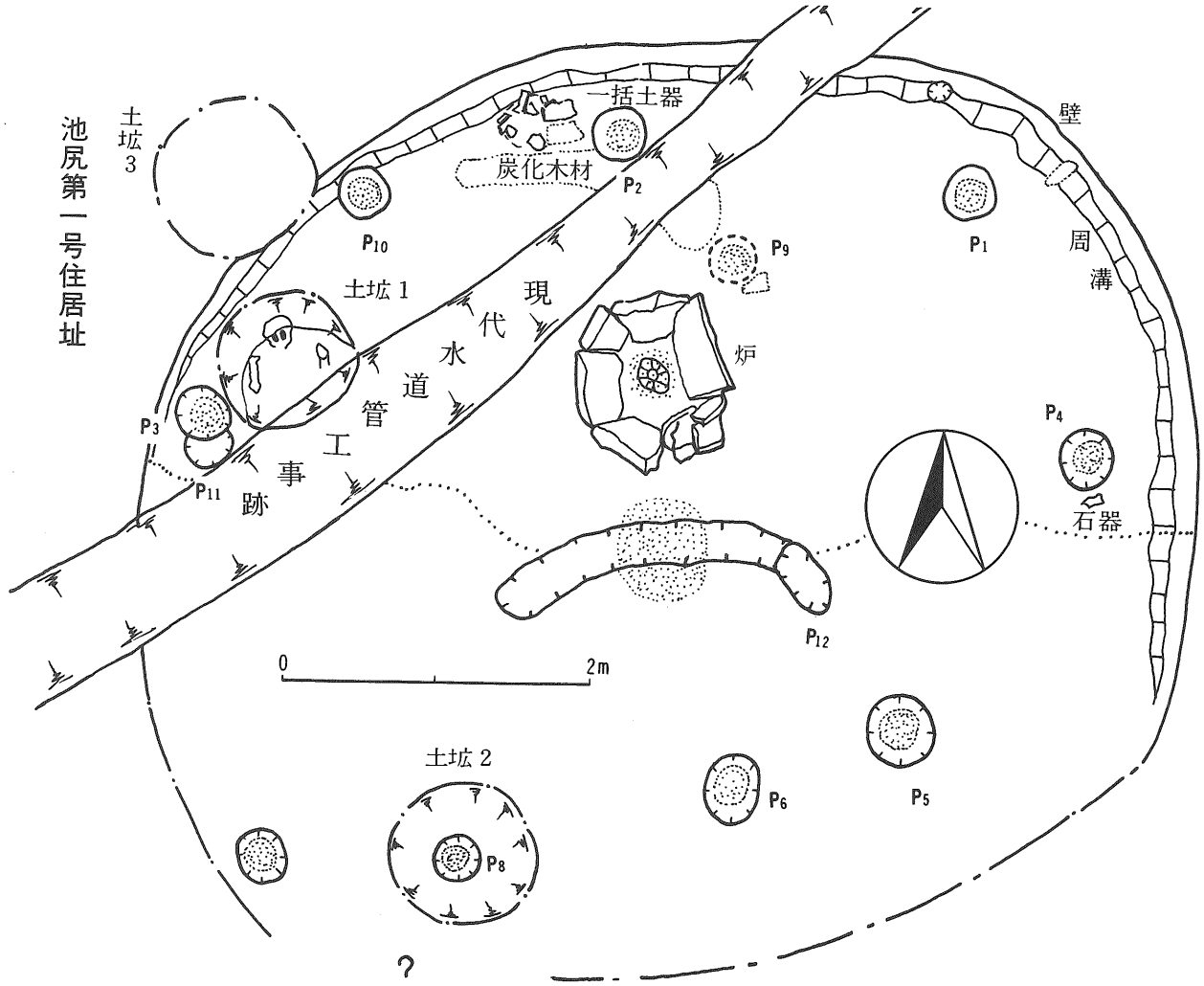
①住居趾の生活面前に営なまれていたこと。

②焼失を受けていて、床上・柱穴址・土拡上炭化層が３～５㎝堆積していたこと。

③土拡２には、焼失にかかわる柱趾が観察されたこと。

④土拡１～２号趾のプランが、床面下にあって、新しい年代の堆積土層が、土拡内から、検出されなかった。　以上のことから、人骨は″縄文人″の貴重な資料である。

⑤土拡内　黒褐色土層のレンズ状堆積が観察された。


池尻第一号住居址
土坑3
一括土器
炭化木材
P2
P10
P9
P1
壁
周溝
土坑1
現代水道管工事跡
炉
P3
P11
P4
石器
P12
0
2m
土坑2
P8
P6
P5
?

5．草越南畑遺跡

大井豊・柳沢文人・林幸彦

遺跡の位置

南畑遺跡は、御代田町大字草越字南畑４９５番地に所在し、昭和43年度、同地西畑、追分道恭一帯 20,000 ㎡が、構造改善事業（条理制の現代版）が行われ、当時、追分道添遺跡は、地元文化財審議委員柳沢博氏の力添もあり、史跡指定候補物件となっていた。当時から、古代人の遺物に深い感心と理解を寄せていた、草越の荻原範仁氏により、この台地一帯 40,000 ㎡上の出土遺物を表採されており、打製石斧が著しい分布をみているのが興味がもたれる。標高 ８００ ｍを計る田区り台地上である。（第４図）

遺跡の調査経違

昭和51年８月20日県教委の紹介により、教委土屋長久・文化財審議委員内山俊雄、荻原範仁氏の案内で出土地点をつかみ、密集地点を把握するが、客土事業の為、遺跡の破壊はなしということで、パトロールカードで３ケ所の発見届を堤出する。

昭和52年11月１日　国庫補助の２年次にわたる客土改良から、天地返しによる、県補助「モデル地区」事業となるに及び、当然、遺跡の破壊は考えられるに至った。

昭和52年11月３日　遺跡の開発と現状にて、至急県教委埋蔵文化財係へ報じ行政指導を受け11月６日に、指導主事派遣申請の手続をなした。

昭和52年11月６日　役場大会議室にて、今までの既出遺物を600分の１土地公図でチェックし、今年度、土地改良の行われる範囲を、県教委、地教委・伍賀農協担当、町産経担当者　文化財審議委員小林五郎・内山俊雄・荻原範仁氏で午後１時～６時まで協議する。内堀教育長・桜井課長欠席。

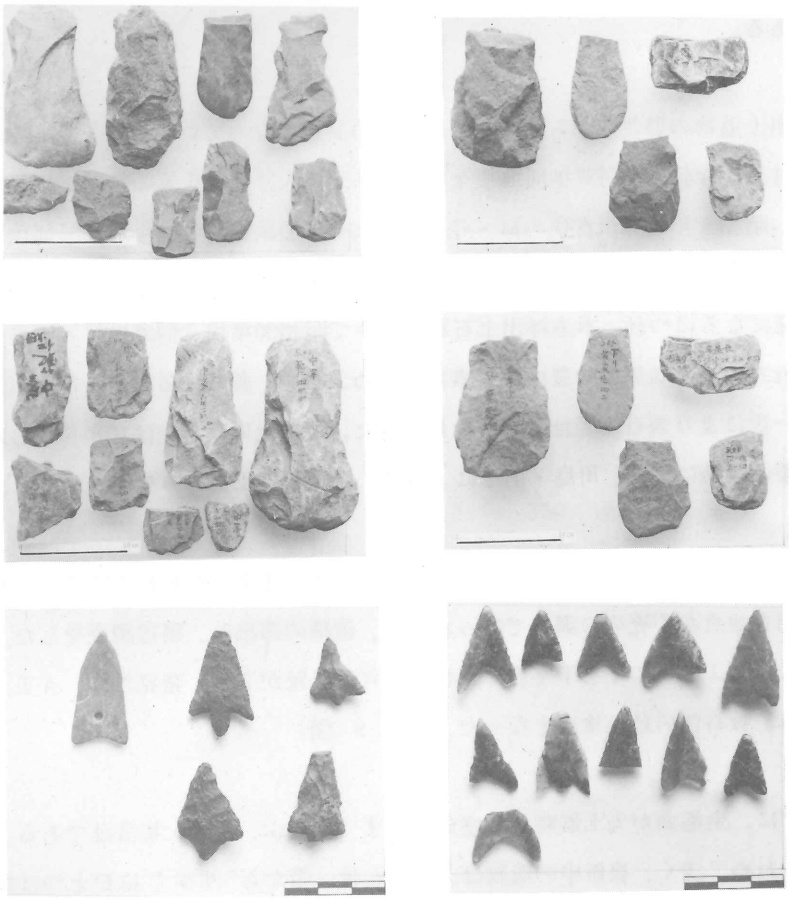
昭和52年12月10日　県教委へ桜井課長出張し、草越付近には、遺物は散布していないので、土木事業にかかわる、遺跡保存は行わないむね打合せてくる。

昭和53年２月２日　土屋・県史刊行会・県教委文化課へ出張し、天地返し土地改良が２年次にわたり行われ、53年度では、広戸付近が該当し、事業前の記録保存について指導を受ける。

遺構・遺物

追分道添・西畑・南畑３地籍の内、南畑へＡ～ＣＴ．（幅 2.0ｍ）を入れ、遺構・遺物の検出にかかる。耕土下、軽石交り黒色土層につきあたり、この黒色土層が遺物包含層となっているものの、遺物は、広範囲に分布しており、集落趾の密集地は判然としない。宮平地籍の標高よりりや、高いので、広戸寄り地籍に遺構の可能性はある。

又、字芝地で、近世まで、芝しか生えず、一名〝芝観音塚〟と呼称された地点の確認を行ったが、厚い客土中にあり、把握できなかった。これが、古墳であれば、大きい意義となる。



第８図　草越、追分道添・南畑・西畑遺跡
既出遺物（線長さ10cm）

6．豊昇宮平遺跡の調査

前原豊・内山俊雄・小林ゆり

遺跡の位置

宮平遺跡は、御代田駅（信越線）より図上東南方向4㎞に豊昇部落ある。この東側丘陵５０ｍに位置する。標高８００ｍを計る田切り台地上、東西２００ｍ、南北２００ｍ、40,000㎡がその遺跡の範囲である。

遺跡の経違

宮平遺跡は出土遺物の豊豊さから古くから地方人の話題となっていた。以下略記する。

明治14年村誌にも記述。同37年同地佐々木朝次郎氏・大井宅蔵氏等の発掘と以後時々の調査・収集活動。昭和５年軽井沢在住のＭ・Ｇ・マンロー氏の調査、翌６年八幡一郎氏の調査。昭和初年に入り県史跡に指定（戦後解除され、現在町指定史跡になっている。）戦後先土器時代の研究が活発になるにつれ、本遺跡出土石器について昭和20年代「信濃史料」編集のため調査が数回行われた。その後周辺の農地改善事業のため工事中、敷石住居趾の一部が露呈し、昭和42年上原邦一氏により敷石住居址１ケが発見された。この上原氏調査は10年後でも正式報告がなく、町教委の依頼により、川島・前原によって、縄文後期土器のみ整理を行った。

調査概要

土地改良に伴う、台地中央を南北に走る農道を補装工事の事業が行われるので、昭和42年、上原邦一氏調査地点が不充分の調査であったので、遺構の露出と、周辺調査をした。

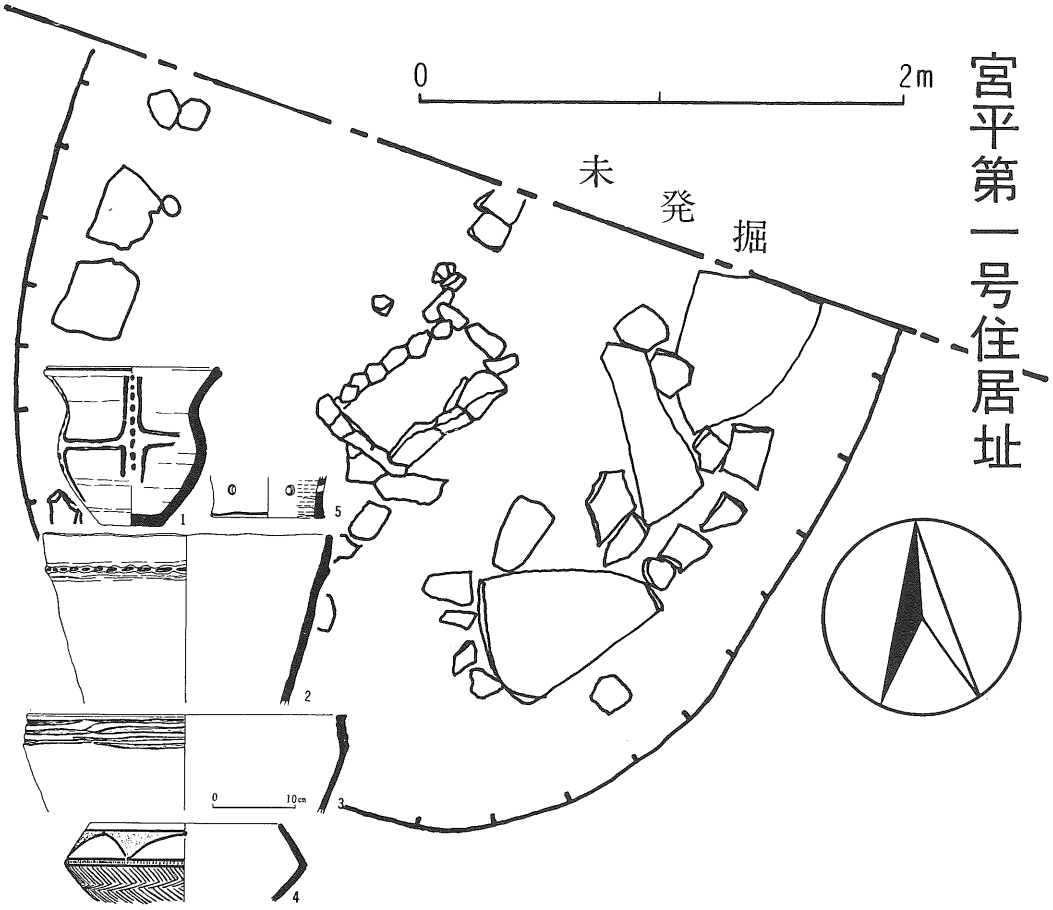
東西・南北に、幅1.5ｍのＴをＴ字形に入れ、竪穴住居趾が２軒、発見され、ＡＴ．北側を、試錐のところ、敷石住居趾の検出となった。（第 9 図）

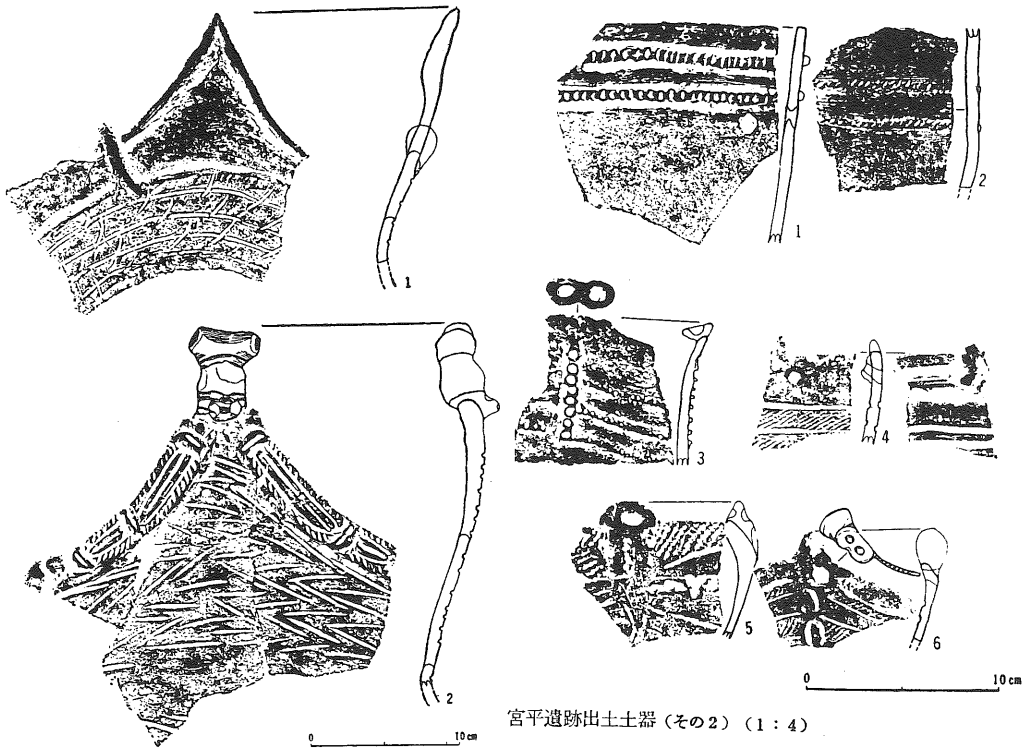
まとめ

1．台地２万㎡に、生活面が先土器時代～歴史時代までに及ぶ、複合大集落趾である。

2．耕土が、きわめて浅く、農耕中の遺物は、今も台地一帯から〝ザル〟にひとつは簡単にひろえる。

3．補装工事は、遺跡を破壊する可能がある。

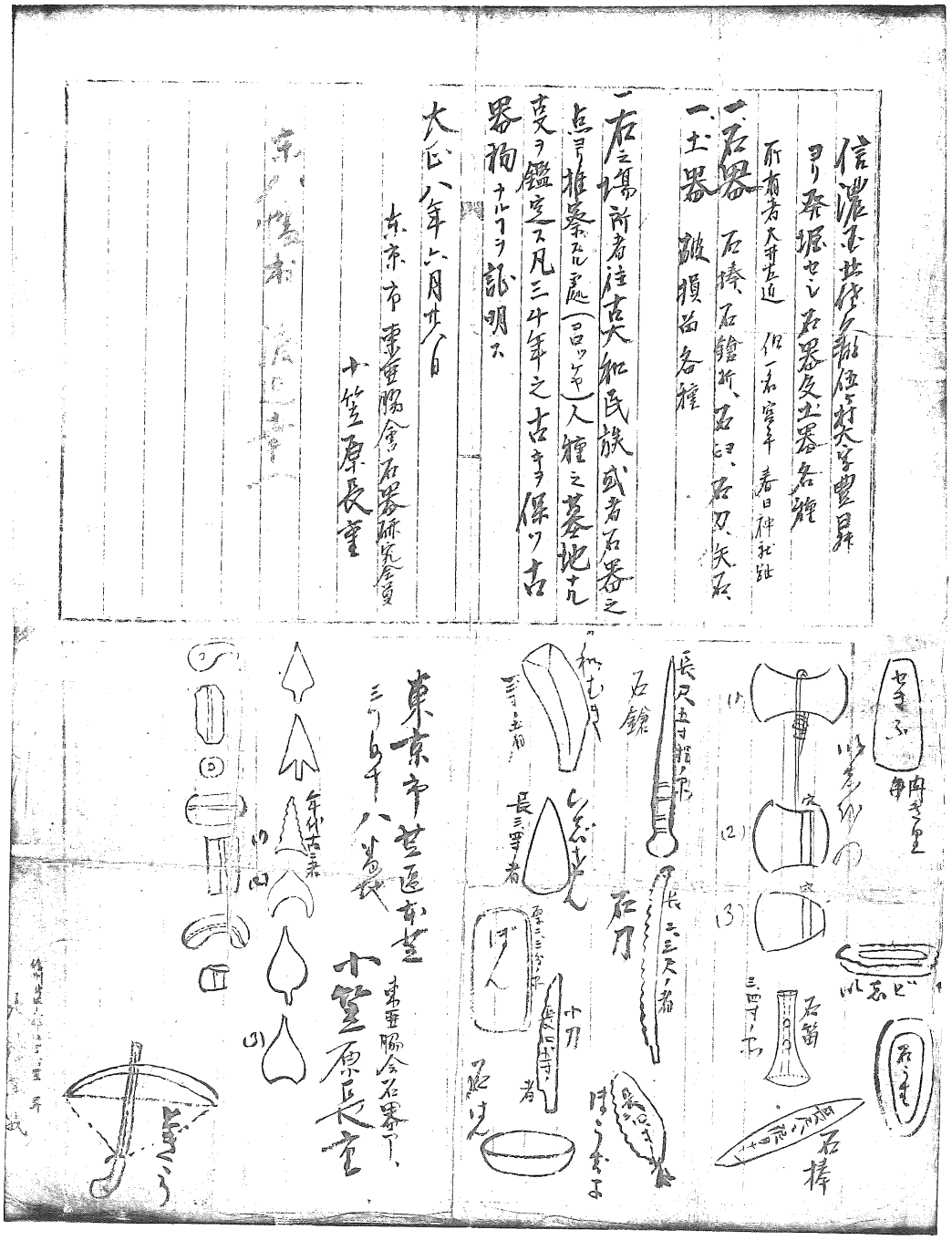




宮平遺跡出土土器（その2）（1：4）

宮平遺跡出土土器（その4）（1：5）

第9図　宮平遺跡出土土器



第10図 宮平遺跡大正時代出土品古書（大井篤義所蔵）

7．家地頭第１号古墳の研究

土屋長久・前原豊・川島雅人・林　彦

古墳の位置

浅間山火山第２外輪山噴火泥流地域が、その古墳群の所在で、湯川をへだてた対岸に、三河田大塚が所在する。標高 696ｍ、　火山性自然丘が多く、往古″塚原″と呼称されてきた。小海線、中佐都駅より南西　　kmに位置するのが、本古墳である。図面上では、前方後円墳ばかりの、古墳地帯である。

調査概要

すでに墳丘は、畑で削平され、宅地造成に伴い、赤色の地山が露出し、石室主体部も一部が、残存していた状況であった。地山上、径約50ｍ、高さ８ ｍを計り、推定墳、上円下方墳形式の横穴式石室である。

調査の概要

この塚を削平し、住宅地造成で破壊されるので、事業前の記録保存である。

出土遺物

副葬品は埴輪と胴地金張りの雲珠等がひときわめだった。

①前庭部に墓前祭が認められ、大甕・横瓶がうちくだかれて検出された。一時、ドット集成が必要

②埴輪が伴ったが、樹立あとがみえなかった。

③墳丘敷設が確認され、上円下方墳が推定される。

④玄室断面に、持送り技法がなく、断面長方形であること。

古氏族の佐久平開拓地

佐久平４００基近い古墳中、　調査のみ16基は、その分布をみると、　湯川流域及び以北に位置している。

佐久平の終末期古墳を言究するに、少数古墳でその推論に危険性はあるが、従来との玄室中心の調査法から、墳丘・墳丘外・周溝・前庭部・古墳の中間跡等、精査されてゆく中で、開口した古墳での、やゝもすれば、石室資料の資料集めのそしりもまぬがれないが、副葬品は、原位置から検出されず、″この勾玉どうして、ここからでるの？″よくきかれる素朴な質問を追求することこそ、やがて、解明されるであろう。基礎的事項ではあるまいか。

″この地に移動し、佐久平の浅間山高原地帯に開発にあたった古氏族は、どんな性格で、政治的意図があったのであろうか″

（仮定Ａ）

①上州碓氷郡八幡付近の豪族、帰化系の物部氏族と推定される。

②馬匹を伴い、物部的な軍団編成が可能であること。

③東山道沿いであること。

④上州の国府付近から、白雪の浅間山がよく遠望されること。

埋葬者の性格

①馬具の銅地金張杏葉が出土していて、佐久東一本柳古墳副葬品が、美術工芸品としてもすぐれている。

②前庭部、祭壇施設の古墳が皎月古墳、下前田原後原１・２号墳、耳取大塚にみえること。

③玄室に胴張りが多い。

④佐久地方では、焼かれていない　埴輪が伴うこと。

⑤後世、古氏族の伝承的な″高良社″多胡社″が祭祀されていること。

⑥農業生産に適さない。火山泥流域に移住してきたこと。

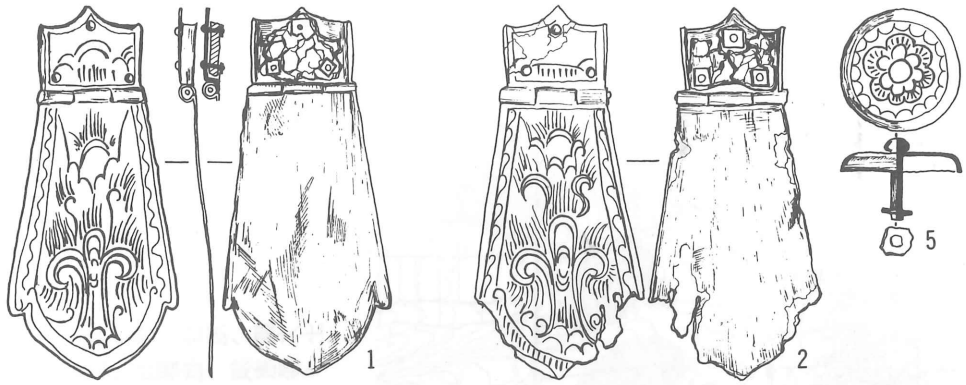
⑦望月・岸野に．彦狭島王古墳の伝承を有すること。

調査の成果と古代史上の問題点

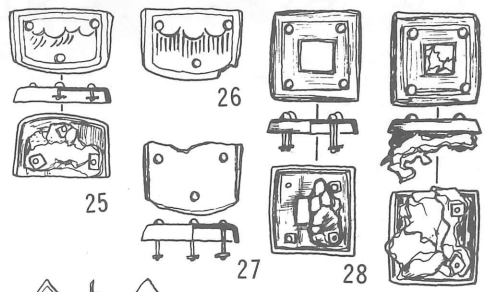
以上の考古資料の一致は必ずしも偶然の一致ではない。今一度集成し、言究したい。

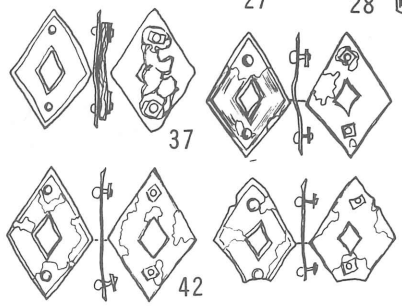
町内緊急分布調査で検出された遺構・遺物

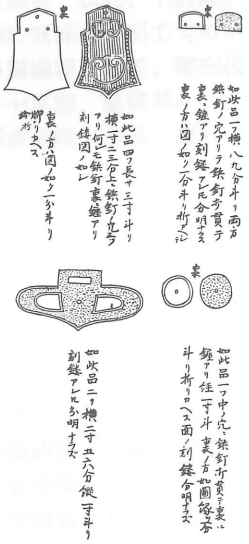
遺跡名	地　番	構　　構	遺　　物	備　　考	調査対象(m²)
下藤塚	塩野字 下藤塚 1061番地		石がん　1ケ 五輪塔石　1ケ	上藤塚には、敷住居居址が確認されている。 （未発堀） （広域農道予定）	広域農道1,000m²に集落址がある。
池　尻	御代田 字池尻 3637番地	竪穴式住居址　4軒 土坑　4ケ	縄文中期末葉深鉢 石包丁1ケ　1ケ 鏃 摩製石斧各1ケ 打製石斧　2ケ 炭化木材　1箱 人骨　1体分	第1号住址が焼失している。 第1住址、第1号土坑をのぞいて未発掘	台地1,500m²に集落址がある。
南　畑	草　越 字南畑 495番地	包含層	縄文時代 中期末葉 打製石斧　34ケ 石　鏃　16ケ 摩製石斧　2ケ 土器片　20ケ	試堀トレンチＡ～Ｃいづれも包含層中より、広範囲に遺物が出土。	台地、その範囲は4万m²に達する。
宮　平	豊　昇 字宮平 1152番地	敷石住居址2軒 竪穴式住居址　2軒	縄文時代中～後期 深　鉢　2ケ 土　偶　3ケ 石　鏃　6ケ 石　瓧　1ケ 打製石斧　6ケ	第1号敷石住址他は未発堀	台地2,000m²に集落址がある。



長野県佐久市東一本柳古墳出土品







駿河国上石　田村古墳出土品

0　5cm

青森県八戸市鹿島沢古墳出土品
（江坂輝弥氏提供）

第12図　東国における古墳出土の杏葉集成（Ⅰ）（1：2）

点部分遺跡（No.1～11）縄文土器は1が細尾根（小林羊寿氏蔵）、2が広畑（内堀典浩氏蔵）、土師器12～18は細尾根（小林羊寿氏蔵）

広域農道付近遺跡の分布（実線広域農道ルート）

関越自動車道（上越線）遺跡分布調査が、県教委・町教委合同で調査がなされ、その集計がされた。予定路線幅四km が調査範囲であったが、浅間山麓一帯も、町遺跡台帳（四五ケ所）に基き調査確認がなされた。この付近は佐久平でも有数の縄文時代（今から五千年前）の集落址であることが判明した。文化財審議会では一帯の埋蔵文化財を重視し、保護の対策が検討されている。

遺跡の状況はつぎの通りである。

1、**湯玉遺跡**：山麓、縄文土器（中）。

2、**二ツ石遺跡**：台地、縄文土器（中）、集落址。

3、**上藤塚遺跡**：台地（別荘予定地化）、縄文土器（中・後）、打石斧、石皿。

4、**西駒込遺跡**：台地、縄文土器（中）。

5、**広畑遺跡**：台地、縄文土器（中）、打石斧、土師器、須恵器。

6、**狸窪遺跡**：台地、縄文土器（中）。

7、**猫尾根遺跡**：台地、縄文土器（中）、土師器、集落址。

8、**城の腰遺跡**：台地、弥生式土器、土師器、集落址。

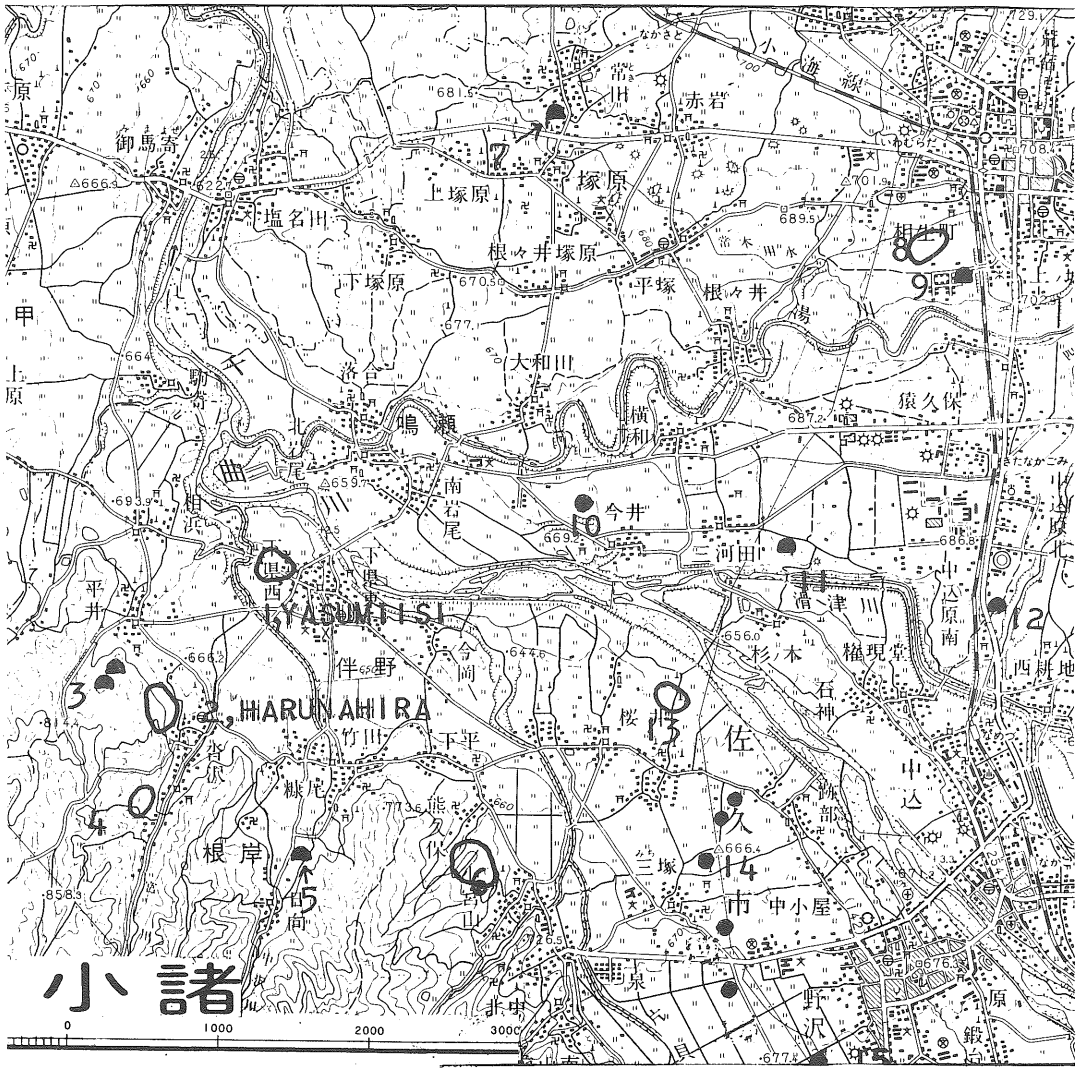
9、**大沼遺跡**：台地、土師器。

10、**滝沢遺跡**：台地、縄文土器（前・中・後）、石器也、須恵器。

11、**西城東遺跡**：台地、縄文土器（中・後）。

浅間山麓一帯が開発に至ると、県条例により、開発前の発掘調査にもとづき、保存処置がなされ、調査期間、約三ケ月、調査費は約一五〇〇万円以上に及ぶものであった。町内民族遺産である、古代人の遺跡は永遠に破壊されることになる。

文化遺産は大切にしましょう。



調査遺跡の位置

第13図　休石遺跡の位置と周辺遺跡の分布（1：50000）

1　休石遺跡　2．榛名平　3．滝ノ峰　4．西ノ窪　5．御陵古墳　6．後沢遺跡　7．家地頭1号墳　8．岩村田一本柳　9．東1本柳古墳　10.今井西原　11.三河田大塚　12.原大塚　13.上桜井北　14.市道　15.儘田

第14図 遺跡の位置と周辺遺跡の分布

1.追分道添 2.南畑 3.下藤塚 4.池尻 5.宮平 6.西畑 7.小田井城址
9.湧壬 10.上藤塚 11.細尾根 12.城の要 14.西城

「佐久考古」第4号　正誤表

表紙		緑釉坏 →	緑釉坏
			実測者　川島雅人氏による。
1頁	下より4行目	100m →	100m²
3頁	上より2行目	番地	2065
	〃 4行目	miyagaw →	miyagawa
	〃 8行目	蔵骨器 →	蔵骨器
		大甕 →	大甕
	〃 11行目	九山敬一郎 →	敬一郎
	下より6行目	厚さ5m →	5cm
	4行目	大甕 →	大甕
	2行目	鉄鋤 →	鉄鍬
6頁	上より7行目	昭和40年度 →	50年度
	9行目	御代田 →	御代田町児玉
	13行目	53年4月 →	53年5月
	下より2行目	1行ケズ（調査中）	
8頁	上より2行目	追分道祖 →	追分道祖
	3行目	条理制 →	条里制
10頁	下より4行目	2万m² →	4万m²
	〃 1行目	補装 →	舗装
12頁	題名　氏名	林　彪 →	林幸彪
	上より6行目	調査概要 →	調査の経過

（サ植タイプ印刷所が始めのことと、考古活字のないことから、ひらがなとあり、ここに訂正します。

『佐久考古』第4号について

この会報について学会では1冊500円で頒布します。150冊ですが、これの読代の1部を以って、第5号から、会員の待望であった学会誌への刊行へ、係が努力していますので何卒ご協力ご理解賜わればさいわいです。

尚第5号に与良、興水、竹内三先生の追悼文を含む計画をしていますので、原稿等につきましても何卒ご協力を賜わります様よろしくお願い申し上げます。

昭和53年5月15日

佐久考古学会『佐久考古』編集係

（近刊紹介）

『下前田原古墳群・後原居館址』

論文集　B5　約100頁　　—研究会刊—

顧問　一志茂樹・河西清光／白倉盛男（地質）／与良清（歴史）／金井重忠（祭祀）／原田道史（民俗）

『岩村田一本柳』　研究報告　B5　約100頁

藤森栄一／白倉盛男／土屋長久

〈弥生時代古代農村の復元〉　—研究会刊—

『榛名平・休石遺石』　A5　約100頁

土屋長久／川島雅人／佐藤信之／林幸彦／武藤金

〈先土器・火葬墓〉　編集：岸野村誌刊行会

会長　工藤源蔵

岡村和重

書籍
パンフレット

活版印刷（上製・並製）

オフセット印刷…写真製版より一貫作業

古文書、実測図などの複製にクィックシステム

（少部数の印刷に最適・僅かな時間でできます）

佐久市野沢町原　(株)佐久印刷所

電話（02676）2-0074(代)

——タイプライター——写真植字——活版——オフセット——

佐久考古　No. 4　昭和53年5月5日

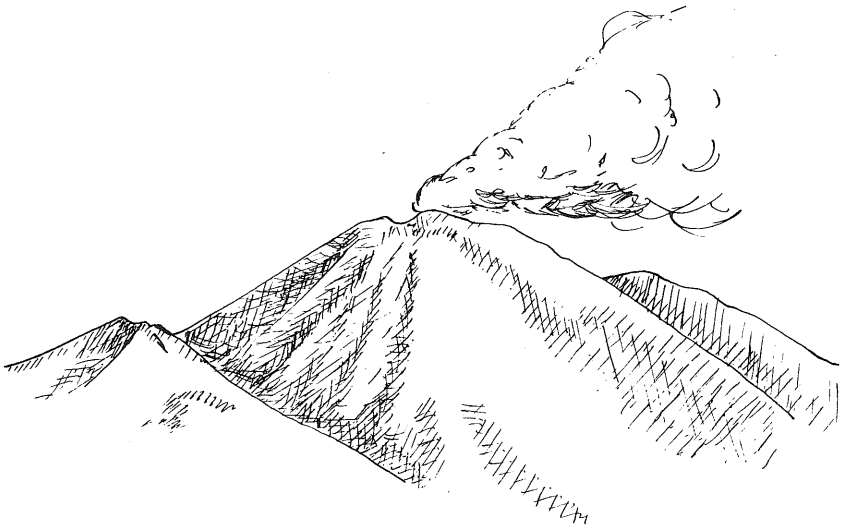
編集者　木内 捷・土屋長久

発行者　由井茂也（〒384－14 南佐久郡川上村御所平）
(電)02679－7－2401

発　行　〒385
長野県佐久考古学会
(佐久市岩村田住吉町1.040の7
(電)02676－2－8－0617 木内 捷方)

印　刷　㈱佐久印刷所

佐久に生きる



偲ぶ

竹内　恒　氏
輿水利雄氏
与良　清　氏
武藤　金　氏
畠山忠雄氏

1981. 5

佐久考古学会

ありし日の　竹内　恒氏　輿水利雄氏

竹　内　　恒 氏（中央）
（立っている方）

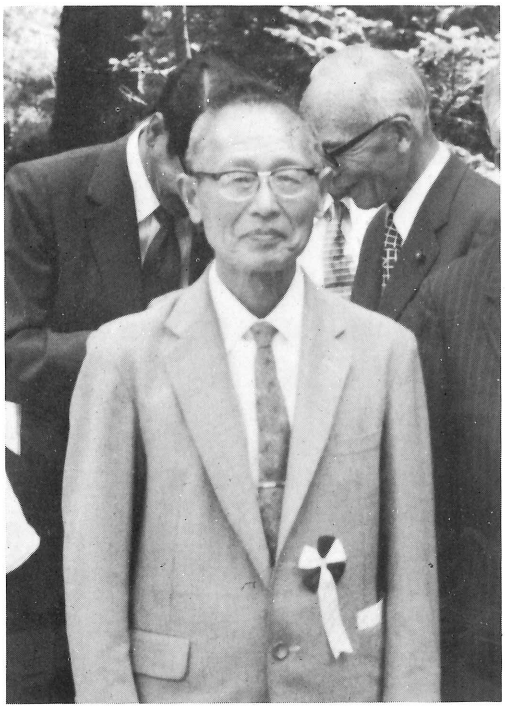
輿 水 利 雄 氏（栃原岩陰遺跡にて）

ありし日の

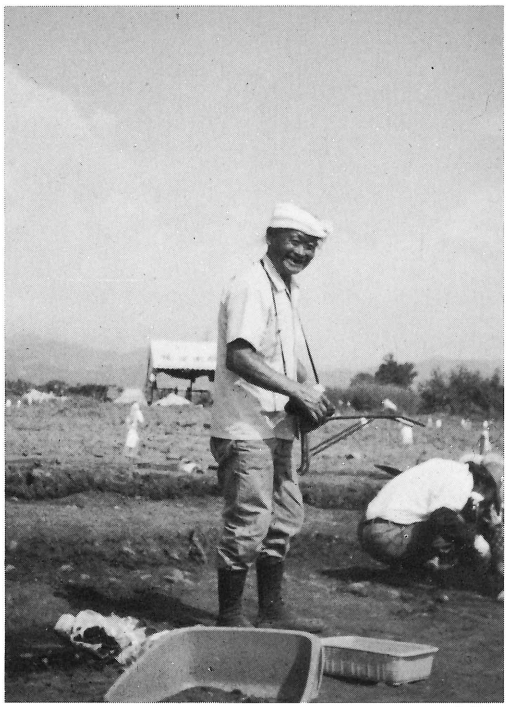
畠山忠雄氏

武藤金氏

与良清氏



与良　清氏



武藤　金氏（上桜井北遺跡にて）

畠山忠雄氏（八幡神社にて）

序

会長　由井　茂也

佐久考古学会は、創立以来記憶から忘れることのできない先輩の幾人かを亡くしてきている。今、その物故者の順に挙げれば、輿水利雄．竹内恒．与良清．武藤金．畠山忠雄の各氏である。ともに社会的には、郷関知名の方々であり、本会に於ては、リーダーとして貢献され、学習をはじめ、発掘調査の現場を通じ、多くの教訓と話題を残した親しい存在である。

私共は、その都度これら先輩の優れた業績を偲び、恩顧の念から追悼号の企画を立ててはいたが、荏苒時か過ごし、物故者を増してきてしまった。

今回は、会員の総意により、多年の企画を実現するため、特に物故者と親交深かった、井出、白倉、花岡、佐藤、黒岩の各氏に依頼し、年譜等の細かな執筆を得て、又、会員の皆さんから寄せられた原稿については、以前の企画に寄せられたものも加えて茲に、佐久考古No.5追悼号として発刊する運びに至った。

ここに、物故者諸先輩に本号を捧げ、追悼を新たにし、御冥福を祈ると同時に、会員各位のご協力と、特に編集員の御尽力に感謝し序に代える次第である。

1981年5月

目　　次

序　　文

竹内　恒氏をしのぶ　1
竹内　恒氏略年譜　1
竹内先生と私　2
竹内　恒先生を偲ぶ　3
竹内・輿水両先輩に捧ぐ　3

輿水　利雄氏をしのぶ　5
輿水　利雄氏略年譜　5
輿水　利雄氏を想う　7
輿水　利雄さんを偲ぶ　7
竹内　恒と輿水　利雄　8

与良　清氏をしのぶ　11
与良　清氏略年譜　11
与良　清先生を憶う　13
与良　清先生を偲ぶ　14
一つの想い出　14

武藤　金氏をしのぶ　15
武藤　金氏略年譜　15
武藤　金さんとの出会い　17
武藤　金さんを偲ぶ　18
武藤　金さんを憶う　18

畠山　忠雄氏をしのぶ　19
畠山　忠雄氏略年譜　19
畠山先生の思い出　21
畠山　忠雄先生を偲ぶ　22
押型文土器と畠山さん　22

あとがき　23

竹内 恒氏をしのぶ

竹内恒氏略年譜

明治36年11月26日	南佐久郡野沢町取出 329 番地に誕生
大正12年 3月 6日	長野県立野沢中学校（現野沢北高校）卒業
大正13年 9月30日	日本大学専門部法科中退
大正12年 4月 1日	南佐久郡臼田尋常高等小学校勤務、郷土史研究に専念
昭和 8年 3月31日	南佐久郡平賀尋常高等小学校訓導
	校長市川雄一郎・小栗擦治氏等と郷土史、古城址調査
昭和15年 3月31日	北佐久郡中佐都尋常高等小学校訓導
昭和19年 3月31日	南佐久郡穂積国民学校教諭　　仏教禅の研究に専念
昭和19年 3月31日	南佐久郡青沼国民学校教諭
昭和21年 3月31日	南佐久郡臼田青年学校教諭
昭和23年 3月31日	南佐久郡大沢小学校校長
昭和27年 3月31日	南佐久郡大沢小学校長退職
昭和27年 4月 2日	南佐久郡中込中学校講師
昭和30年 8月 1日	南佐久郡臼田町中部中学校講師　　南佐久郡誌編集委員専任
昭和31年 3月31日	南佐久郡野沢小学校講師
昭和34年 3月31日	南佐久郡野沢小学校退職
昭和41年 4月 1日	佐久市文化財調査委員．佐久考古学会長
昭和50年 1月25日	逝　去　正七位勲六等瑞宝章昇叙　　戒名　古学院恒誉一山居士

◉ 主なる役職名

- 日本考古学協会員
- 長野県考古学会創立委員・佐久地区役員
- 佐久考古学会長　創立当時から逝去まで
- 信濃史料刊行会参与
- 旧中込学校保存会副会長
- 佐久市文化財保護調査委員

○佐久市青少年育成協議会委員長

◉主な発表論文・著書

昭和41年　蕨手刀を出した南佐久郡臼田町英田地畑古墳　（信濃18ノ4号）

昭和46年　長野県佐久市野沢平儘田遺跡緊急発掘調査報告書　（佐久市教育委員会刊）

昭和47年　北近津・戸坂遺跡緊急発掘調査報告書（佐久市教育委員会刊）

昭和47年　佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告（長野県考古学会誌第13号）

○　青年時代から禅の研究、参禅等の体験修養に専念し、生前に「一山居士」位允許

（白倉　盛男）

竹内先生と私

三石　延雄

私が、考古学に興味を持ったのは、小学校高等科を卒業して間もない昭和初年の頃であった。その頃の私には、考古学の勉強などする余裕などなく、考古学は私の永い間の夢であった。

昭和46年1月24日、佐久市野沢会館での佐久史談会の席で隅然竹内先生と席を隣り合せたのが、私の考古学への道が開けるきっかけとなったのである。

5月のある日のことであった。私の手元に1通の封書が届いた。文面は簡単に5月24日より佐久市の東一本柳で古墳の発掘調査をするから出てくるようにと書かれていた。

24日の朝、一本柳に着いた私は現場がわからなく団地をぐるぐる回った事を記憶している。この一本柳の古墳調査が私の考古学への第一歩であり、今の学会の皆さんとの出合いでもあった。武藤さん、井上さん、佐藤さん、渡辺さん、土屋さん、白倉先生であり、発掘の指導をされたのは桐原先生であった事を記憶している。

発掘は初めてであった私は、出て来た遺物を掘り出してしまった。隣に居た武藤さんが「うごかしちめーばだめだ」と言った。私は中で掘っているのがむずかしく、こわいような気がして外に出て、一番無難である土ふるいにまわった。ふるった土を水で洗うと小さなガラスの小玉や鉄、時には水晶の切小玉まで入っていた。それ以来私は古墳の調査の際は土ふるいに回った。

この年には、確か6月初めに八千穂村の池の平の第1次調査があり、9月に第2次調査を行なった。また、10月21日より佐久市西近津の調査があった。

47年に入り、1月末に北近津遺跡の調査があり、3月に西一本柳遺跡の調査があった。この間ほとんどの調査を先生は団長として指導をされた。先生は調査に当っては非常に厳しい人であった。土は、紙を1枚、1枚はがすようにかけと言われた。確に土は、何千年あるいは何万年かの遺構をそのままの姿で保護している。私

たちはこれを発掘するに当っては真剣に取り組まなければならないはずである。又、先生は非常に厳格な面があり遺構の中に勝手に入るような事は許さなかった。たしか中道遺跡であった、テントの中に黙って入って来た新聞記者を一喝されたことがあった。

私が、先生と一緒に発掘をした最後は、昭和48年5月臼田町の井上遺跡の第1次調査であった。それ以来私は先生と一緒に調査をする機会を失った。然し、私が今日まで発掘にたずさわってきた中に、先生の精神は私の心の中に今でも生きているし、又、これからも私の発掘に対する心がまえの中に、先生の精神は生きつづけることであろう。

竹内恒先生を偲ぶ

黒岩　忠男

長野県考古学会設立のため、準備委員の1人として活躍していられた当時、準備のための会議の熱心さ、集まって来られる準備委員の先生方の研究心の逞しさ等を時々話してくれ、県考古学会に参加するよう熱心に勧めてくれました。おかげで私も創立以来会員として諸兄のお仲間に入れさせていただきました。そして現職中の私にも発掘調査の声をかけてくれました。

現在、会員の皆様と楽しく研究活動ができることを本当に嬉しく思って居りますが、これは、竹内先生が熱心に考古学会へ入会することを勧めてくれた御陰と常に感謝しています。

竹内・輿水両先輩に捧ぐ

渡辺　重義

神津武八さんの紹介で佐久史談会に入会したら、そこに竹内さんが居た。月1度の会合で顔を合わしてる間に、「おい県の考古学会に入れや。」と言うから、「考古学なんて何のことか判らないし、そんな難しいことは駄目だ。」と言ったら、「判っても、判らなくても入って居れば判って来るから入れよ。」こんなことで県の考古学会に入会した。

その後、佐久平ではあちこちで発掘調査があったので、佐久でも支店があった方がよかろうというわけで、佐久考古学会が誕生した。佐久市の教育委員会でも面倒を見てくれて、調査がある度に佐久考古学会さんよろしく、という訳で調査主任が誰であっても調査のことは佐久考古学会だった。

この中には、竹内会長の力が何時も存在して居た。何所の現場でも和気合々として楽しい勉強の場であった。竹内さんも人間だから多少のまずい面はあった。よく私は現場で言い争いをした。次の日は、又2人で話合っては仕事を進めた。

南佐久の分布調査、高畑遺跡、入山峠事前調査等、古いものはどこを見ても竹内、渡辺の名が出ていて懐しい。信越線復線化の鍬入れ式の記念写真を見ると、残っている者は私1人である。

何時頃だったか、どこかの史談会で臼田町の輿水さんという人が、北相木の洞窟で古い土器

が出て来たことを話題に講演があるというので出掛けた。今までの史談会では全く聞けない話だったので非常に興味が湧いて、私はすぐ輿水さんの信者となった。爾来、私と輿水さんとの親交は続いた。又、この続いた裏には、輿水さんの親類が軽井沢に何軒もあること、そして恩師の高見沢進作先生と軽井沢で輿水さんに再会したことに起因している。

或時、輿水さんがこういう話をした。「南軽井沢の湿地草原地蔵原がゴルフ場になるそうだが、あそこには動物の足跡が残っている可能性があるので時々行って見た方がいいよ。」と言った。私は何千年前の動物の足跡が地下に残っている筈がないのに、この人の頭はどうかしているのかと思った。輿水さんの死後、数年を経ずして静岡や高崎の水田跡から弥生時代人間の足跡が検出され、性別、年令まで解明されたという報告を見て、輿水さんの先見の明に驚嘆した。

輿水さんは、よく車を走らせて各地の遺跡を見学している。「辺さんこの頃亀ヶ岡へ行って来たよ。まさか亀ヶ岡式土器は大したもんだねえ」と話してくれた。先祖のことを調べに時々山梨方面に行き、たくさんの系図を持って来てコピーして居たがあれはどうなったろう。

輿水さんの最後を飾ったものは、何といっても塩くれ場遺跡の調査だろう。多大な私財を投じての発掘だっただけにその報告書を見ずに、しかも発掘現場地点にてその生涯を閉じたことは、死んでも死にきれないでしょう。その責任の一端を担った私達も只申し訳けなさで一杯である。

佐久考古学会の存在を県内に高く昂揚してくれた両先輩よ、生前の非礼を許されよ。

合　掌

輿水利雄氏をしのぶ

輿水利雄氏略年譜

大正3年2月20日　南佐久郡穂積村樋口（現八千穂村天神町）父忠一郎・母きさの長男に生まれた。

大正8年4月　穂積尋常高等小学校に入学。6年生のとき図書館で古代人の生活を書いた本を読み、関谷の自家の畑から土器の破片がでるのに興味をもった。

昭和2年3月　穂積尋常高等小学校高等科第2学年卒業。百姓に学問はいらないという父の一言で、中学校入学を断念して農業に従事した。

昭和3年　当時東京帝国大学の新進考古学者の八幡一郎先生が、「南佐久郡の考古学的調査」のため来村。農業のかたわら付近の畑から土器や石器を集めていた輿水少年との師弟の出会いとなった。

昭和8年　現役兵として浜松高射砲第一連隊千葉県四街道分遣隊に入隊。その後、満洲事変、支那事変に引き続き召集され、その間に戦地で父忠一郎氏の訃報に接した。ノモンハン事件後一時帰国。

昭和15年　除隊。3月15日、青沼村入沢の岩松りんさんと結婚。同月23日、満洲に向い新京（長春）で新居をもった。満洲飛行隊司令部に勤務の傍ら、休日にはハルピン博物館に通った。当時は青銅器研究にとりつかれていたという。

昭和19年8月23日　妻りんさん肋膜のため子供2人を連れて帰国。同年秋、満洲人と協同で軍事工場を設立。

昭和20年8月15日　ハルピンで終戦を迎えた。家には2年間音信不通であったが、その間引揚者援護に協力し、輿水さんの助力で無事帰国し得たと感謝している人も多い。

昭和22年10月　リュック一つで引揚者3千人のうちの班長として帰国。

昭和23年　村役場の事業として、引揚者婦人の授産所を自宅の2階に開設する。その後授産所が高岩に移ったので転職。南北佐久両郡の製材所に丸鋸を売って朝早くから夜遅くまで働いた。知人と水田の共同耕作をして飯米の確保もはかった。

昭和27年　畑八村（八千穂村）中松井遺跡の発掘に参加。

昭和28年11月　芹沢長介氏が第一回馬場平遺跡の発掘をすることを知って、由井茂也氏を訪ね、ここで芹沢氏をはじめ戸沢充則、麻生優、吉崎昌一氏等を知った。以後たびたび

川上村を訪ねて旧石器に対して深い興味をもつようになった。

昭和29年10月末　由井、芹沢、戸沢、麻生氏を池の平牧場（現八千穂村）に案内して、番小屋裏の斜面で片面ポイントと有柄石鏃を同時に採取した。これが池の平の旧石器発見の最初である。

昭和30年　小学校時代の同級生、井出三之助氏と共同して材木の売買を計画したが失敗して、家、屋敷を売って借金の返済に当てる結果となった。

昭和31年　臼田町下越の現在地に移り、友人の工場を借りて木管製造業を始めたが、5年後に付近の山に原木が不足して閉業。この頃池の平牧場塩くれ場付近で黒曜石片を発見。これが後年の池の平遺跡発掘調査の端緒となった。

昭和36年　従業員20人程の弱電機の新工場咲電機合資会社をつくった。その後、鉄工場2棟を増設、従業員50人ほどの合名会社とした。

この頃も日曜、祭日を利用して遺跡をさがし、土器や石器を追いながら、特にその時代の人の骨を求めていた。その執念がやがてみのる時がくる。

昭和40年　数年前より北相木村東栃原で縄文早期押型文土器を発見して、これを追求していたが、この年仕事の関係で知り合った新村薫氏をさそって、栃原岩陰で表面採集をしてついに人骨を確認した。11月23日信州大学医学部第2解剖学教室の鈴木誠教授に連絡した。これが栃原洞窟遺跡、縄文早期北相木人の発見となったのである。

昭和41年　佐久市東部地区埋蔵文化財緊急分布調査に参加。

昭和45年9月　佐久市野沢儘田遺跡緊急発掘調査に参加。

昭和46年6月　八千穂村池の平牧場塩くれ場方面の林道開発にあたり、永年の表面調査により期する所のあった氏は、八千穂村教育委員会を説いて、ついに発掘調査にふみきらせ、自ら調査団長となって、発掘資材の調達、調査品の宿泊等一切の設営に当り、私財を投じて秋には第2次の発掘調査を行い、塩くれ場、トリデロック、湧水地点の3ヶ所を調査し、佐久地方旧石器文化の解明に重要な資料を提供し、年来の宿願を果した。この年佐久市中道遺跡の発掘にも参加した。

昭和47年10月　佐久市教育委員会が根々井餅田遺跡の発掘調査に当り、調査団長に推された。この年、佐久市長土呂に北近津遺跡（2月）、同岩村田一本柳遺跡（3月）の発掘調査に参加。

昭和48年1月　肝臓病治療のため東京都豊島病院に入院、四月退院。

12月、臼田町三分井上遺跡の発掘調査に病をおして副団長としてその推進に当たった。

昭和49年1月　再び東京都豊島病院に入院。6月小康を得て退院。

8月9日、奥さんと次女と2人のお孫さんを伴ない、自身運転して、かつて団長

として精魂をつくして発掘調査にあたった、池の平塩くれ場遺跡の見分に向かい、思いで残る落葉松林の中で心臓発作におそわれ眠るが如く逝かれた。60才6ヶ月のなお惜しみて余りある死であったが、それは輿水さんならではの立派な最後であった。

（井出　正義）

輿水利雄氏を想う

土屋　忠芳

輿水利雄さん逝いて幾年。春風の如き温容な方であり、考古学、郷土史にかけた情熱と学識の深さは頭の下がるおもいである。それにもかかわらず、平々凡々として私達とつき合って下さって、殆んど無智であった私をあたたかく教導して下さった。過ぎ去った日々を想いますと感無量であります。

栃原遺跡発掘の時は、日本中の学者が次々と訪れましたが、その方々を私が忙がしかったり、ズボラで中々発掘に参加しなかったので、幾度となく小宅までわざわざ連れて来て下さって、時を同じうして、矢出川も表採ではありましたが、次々と新しい場所が発見されましたので、一緒に御案内しながら教えて戴きました。

又、新潟県の津南町で芹沢先生が発掘を行っていた時には、現地まで車で私を連れて行って下さり、紹介して戴き、教えて戴きました。今思いますと、当時もう少し私が考古学なり、郷土史に知識があるか、せめてもう五年も早く学んでいたなら、多くのことを吸収できたものと今更ながら残念でなりません。

亡くなる前日、小宅を訪れいろいろ話して行かれた直後、あの様な急変になられ、本当に「神は最愛なる者を手許に連れて行く」と、言いますが、私のみならず、凡ての人に敬愛され、また私達家族の者とも常に心を許して話合われていたのに、忽然として幽明境を異にしてしまわれました。

時はかえすすべもなく、生涯の師友たりし輿水大兄の冥福を祈るのみです。

輿水利雄さんを偲ぶ

黒岩　忠男

昭和45年11月頃のことであると思う。輿水さんから森嶋先生と東大の丑野さんが来るので、池の平へ行ってみようと電話があった。私も池の平には特に興味と関心があったので二つ返事で出掛けた。

塩くれば周辺からトリデロックへと表面調査をしているうちに、急に雨もようとなったが、更に前進して風穴があると思われる所が見える辺まで行ったが、雨が氷雨に変ったので帰ることにした。

自動車まで逃げ帰ってほっと一安心。だが大変、舗装した急坂の下りは曲りが多く、その上氷雨のため凍っている。タイヤは夏以来の普通タイヤ。チェーンも持参していない。右にツル、

ツル、左にツル、運転している輿水さんは額に冷や汗たらたら。同乗者も真青！　やっとの思いで大石部落に辿り着きほっとした。

こんな事が、今でも輿水さんとのお付き合いのうち一番強く印象に残っている。

竹内恒と輿水利雄

五十嵐　幹雄

まず最初に両氏の敬称を略したことを御許願いたい。それは、両氏とはその生前親しく交際し、その学恩を常に感謝している私にとって、いまは亡き2人は呼びすてることによってその親しさが一入となるからである。

竹内恒との出合いは“信濃史料”の編纂がはじまり、考古篇の参与を依頼された人たちの集まりの席であった。

竹内恒は、若い時から考古学研究に従事し、南佐久郡教育会が八幡一郎氏に考古学的調査を依頼したとき、地元の担当者として先生とおつきあいをし、その後ずっと続いていた。私は、昭和24年に八幡先生の許へ内地留学をし種々ご指導をいたゞいた。だから兄弟弟子のような関係で、初対面ではあったが何年も前からのおつきあいのような親しい間柄となり、竹内恒が亡くなるまでご交際をいただいた。

竹内恒は当時、南佐久郡誌編纂のための仕事をしていた。戦後各郡の教育会が中心になって新らしい郡誌編纂をはじめたのであり、その中で北佐久教育会はいち早く新郡誌を編纂し発行された。竹内恒はこのうち考古篇に対して強く批判し、南佐久では新らしい資料を使って充実したものを作りたいとの意欲をもち活発な調査研究を進めていた。

畑八村（現八千穂村）では、佐々木広雄氏が庶務を引受けた水上一氏を団長とする青年団のみなさんによる文化活動がさかんであった。たまたま“中松井”の笹崎正雄氏の所有地で開墾をしたところ、縄文時代の古い土器が出土し、貴重な遺跡であることがわかったので、発掘調査を計画し竹内恒に依頼された。竹内恒は私にも参加するように声をかけてくれた。

昭和27年10月26日から5日間八幡一郎氏指導のもとに発掘調査を実施した。私が佐久の調査に関係したはじめであった。中松井は清水町からだらだら坂を約10K余登ったところにある。いまなら自動車ということになるが、当時のこと往復全くの徒歩であった。朝2時間ほど歩いて現場に着き、夕刻宿へ帰るという、いまでは全く考えられない強行軍であった。ところがこの朝夕2時間を歩きながらの語り合いがたのしく、竹内恒の人柄を知り、彼もまた私を知ってくれた。これが機縁となって佐久の発掘、上小の発掘はお互に協力しあい、東京での学会への出席には行を共にした。この間仲良くもあり、またけんかもしたが私の研究生活にとってまことにありがたい人であった。

昭和40年の夏の或る日突然輿水利雄が来訪した。名はきいていたが全くの初対面である。にこやかな笑顔におだやかな言葉で筋の通った話をされ、そのよき人柄を知ることができ一生のおつき合いとなった。学校の先生かと思っていたところ、電機関係の工場を経営されているこ

ともその時はじめて知ったのであり、他人の気持を大事に考えられることも企業人だからこそと感じ入った次第であった。

さて来訪の趣旨は、北相木村で栃原洞窟をみつけたので、竹内恒に話したがはっきりしないので、信大医学部の鈴木誠先生を中心とする信州ローム研究会に連絡し、調査計画を立てた。ところが竹内恒がそれは困るというが、どうしたものかという相談であった。他郡のことであり、いかなるいきさつかを知る由もなく、返答をすることができないので、考古学に興味のある人は少なく、みんな貴重な同好者である。また発掘調査は一番よい学習の場であるから1人でも多くの人が参加できるようお互に努力しましょうなどと話合ってお別れした。話しあう間洞窟調査に対して非常な熱意を持っており、その気迫に圧倒されたことを覚えている。

いよいよ栃原洞窟の発掘が始まった。それは寒さも加わった12月初旬であった。いつごろ見学に行ったらよいかを竹内恒に問合わせたところ、全く知らないし参加もしないという。そこで私は1人で見学に行った。鈴木誠先生が洞窟の下の道路端で焚火をしておられたので種々御教示をいただき学習の成果を得て帰宅したが、鈴木先生の話の中に輿水利雄の配意に感謝の意を表されていることを知り、輿水利雄の心労を知ることができた。この調査報告は信州ローム第9号に詳しいが、佐久からの参加者は輿水のほか、新村薫氏、由井茂也氏の3人であり、地元教育会からの参加者はない。

その後、竹内恒と会談した時、この一件についてつぎのように語ってくれた。

輿水利雄がみつけて俺にも知らせてくれた。話をきくとどうも貴重な遺跡であるとともに調査がむずかしいように考えた。だから各方面と連絡をとりスタッフも揃えしっかりした調査体制をつくらねば調査は失敗に終る。それには先立つものは金である。実は教育会にはその資力がないので地元北相木村に協力を願うことになるが、それには手間どると思いそう急ぐ必要もないので、充分準備をしょうと話しておいた。ところが輿水利雄はそれが待てなく信大へ持込んでしまった。そこで信大の調査となったが、信大は地元の連絡者を輿水とし、教育会には何の連絡もない。たしかに信大にはスタッフが揃っており、参加者への旅費、日当などの心配もなく、郡内の調査をしてくれるのはありがたい地元の受入れ態勢ができていないと参加の機会が少なくなる。郡内にも多勢の同好者が居り、それらの人々のよい勉強の機会である。発掘調査は学問的成果をあげると共に、地元の研究者をも育てなくてはならない。それができなくなってしまう。さらにもっと大切なことは、切角の出土品が持ち去られてしまう。地元の人が見たくてもそれができなく、ただ出たという話をきくだけに終ってしまう。こうなれば全く中央の研究者のために地元の物好きがその先棒をかついだことになり、労あって益のないことだ。そうならないように俺は考え協力しなかったのだということであった。このことは輿水利雄が私を訪れてきた時の話からも知ることができていた。

昭和40年の栃原洞窟の調査はよい成果があがり、貴重な遺跡であることがわかり調査は続けられることになった。輿水利雄から竹内恒が動かないので地元からの参加者が少なく、困った

ものだとの通知を受けた。

さきにも書いたが、私はこの両者の間をどうこうする力も立場もないことをよく知っていたが、竹内恒につぎのような電話をかけたことを覚えている。

郡内の調査とはいえ、だれがやろうといいではないか。テーマを持ち、経費をもって調査をしてくれるのは有難いと考える。通知があろうと無かろうと、見学し協力を申しでて勉強の機会にうまく利用したらどうか。そして報告書が出たら分けてもらい、使わせていただくお願をしてはどうか、などと先輩に対し随分生意気なことを言った。

しかし、竹内恒は「俺はいかない、そして出土品が地元から流出するのを監視する。」などといわれた。一本気である特色をみせつけてくれた。

一方輿水利雄からは地元の研究者がぼつぼつ参加してくれるようになった。しかし金があるわけではないから個人参加の形をとっている。また、資料は調査のすみ次第かえして貰うことになったとの連絡をうけ、大変よいことだと思っていた。その後栃原調査は回を重ねたが輿水利雄はその都度、下準備にとび歩き、全くの裏方をつとめていたことを鈴木誠氏や小松虔氏からきいたが、いまこの２人も亡き人であり、栃原洞窟調査にかかわるさびしい思い出である。

市町村合併などにより南北２つの佐久は１つの佐久となり、考古学研究者のみなさんにより佐久考古学研究会ができ、有力な会員が多数となり立派な活動をされている。竹内恒も輿水利雄も私もそうだが、大学等で正式に考古学を勉強したのでなく、ただ物好きで考古学を勉強したものである。まことに幼稚であったかも知れない。だからといって竹内恒や輿水利雄の功績を忘れてはならない。佐久考古学会の今日の活動の基底はこれらの人々の力であったと私は信じている。

竹内恒は調査の時に若い研究者を招く努力をし、その人を育ててくれた。例えばいま筑波大学で日本の土師器研究の第一人者として活躍する岩崎卓也氏は、東京高等師範学校生の頃よく佐久の調査に招かれ大事にされた人である。

輿水利雄が各地から栃原や川上を訪れる若い研究者の面倒をよくみたことなど、佐久考古学会史に特筆大書されなければならないと思う。

両人の冥福を祈りつゝ筆をおく。

与良　清氏をしのぶ

与良清氏略年譜

明治40年4月1日	小諸市甲2,601　番地、与良長十郎の長男に生る
大正2年4月	小諸幼稚園入園
大正3年4月1日	小諸尋常高等小学校入学
大正9年4月1日	長野県野沢中学校入学
大正13年4月10日	父長十郎没
大正14年3月6日	長野県野沢中学校卒業
大正14年3月31日	北佐久郡大里尋常高等小学校代用教員
大正15年3月31日	同校訓導
昭和9年3月31日	北佐久郡小諸尋常高等小学校訓導
昭和11年12月12日	堀内　順と結婚
昭和13年3月31日	北佐久郡三井尋常高等小学校訓導
昭和13年6月17日	長女敦子出生
昭和14年5月19日	母かう没
昭和16年3月27日	二女朋子出生
昭和16年3月31日	北佐久郡大井尋常高等小学校訓導
昭和20年8月5日	三女宏子出生
昭和23年8月9日	二男義昭出生
昭和24年3月31日	北佐久郡岩村田小学校教諭
昭和26年3月21日	四女規子出生
昭和29年4月1日	北佐久郡軽井沢中学校教諭
昭和30年4月1日	北佐久郡浅間町岩村田中学校教諭
昭和31年4月1日	小諸市西中学校教諭
昭和35年4月1日	小諸市大里小学校教諭
昭和36年4月1日	小諸市芦原中学校教諭
昭和38年3月31日	小諸市芦原中学校退職
昭和38年4月2日	北佐久郡浅科村中津小学校講師

昭和39年7月1日	小諸市東中学校講師
昭和39年9月11日	小諸市坂の上小学校講師
昭和39年12月5日	北佐久郡浅科村御牧小学校講師
昭和41年3月1日	小諸市東中学校講師
昭和43年11月15日	小諸高等学校非常勤講師
昭和45年8月26日	小諸高等学校・小諸商業高等学校兼任講師
昭和46年4月1日	小諸高等学校非常勤講師
昭和49年3月31日	小諸高等学校退職

社会教育歴

昭和24年4月1日～42年3月31日	『北佐久郡志』編集専門委員
昭和40年～47年	『信濃史料』索引作成
昭和43年12月1日～53年1月15日	小諸市文化財審議委員長
昭和45年1月1日～53年1月15日	『小諸市誌』編纂専任委員
昭和47年8月17日～53年1月15日	小諸市立火山博物館協議会委員長
昭和50年4月1日～53年1月15日	『長野県史』刊行会参与
昭和51年9月13日～53年1月15日	長野県文化財保護指導委員
昭和53年1月15日	小諸市小諸病院において死去、正七位勲五等瑞宝章を受る。

与良　清先生のお人柄、学問については、すでに、「信濃」(第30巻第6号)、「千曲」(第19号)において先学の方々により述べられている。

ここでは、与良先生に教えを受けた1人として述べさせて頂きたい。

先生には、坂ノ上小学校4年の時、1年間担任として教えて頂いた。特に社会科では、郷土の歴史をまじえての授業であり、小学校4年生の目にも非常に新鮮な授業であったと記憶している。また、昼休みとか放課後には資料室で土器の接合をよくされていた。それらの土器は今から考えれば加曽利E式土器だったと思う。陽のあたる窓際で黙々と接合されている先生の姿が今でも印象的に残っている。私自身もちょうどこの頃から、土器とか石器に興味をもつようになり、日曜日には先生の御迷惑を省みず、お宅に伺ったこともあった。そうした際にも、先生は一つの土器片についても丁寧に説明をして下さった。郷土遺跡の敷石住居址の調査が行なわれた頃でもある。

その後、大学に入学し、考古学を志すことになったのも先生の教えが大きく影響しているように思う。また、卒業後の進路についても、いろいろと御心配をおかけしてしまった。

郷里にもどり、これから先生にいろいろ教えを乞おうという時に、先生の訃報に接することになってしまった。

先生の教えを道標とし、先生の学恩に対して少しでも報いるために努力していかなければならないと思う。

最後に、与良先生の年譜は、小諸市編纂専任委員の小渕武一先生が編集され、「信濃」,「千曲」に掲載されたものである。本誌掲載に際しては、小渕先生の御快諾を頂いた。末文ながら記して深謝したい。

（花岡　弘）

与良先生を憶う

由井　茂也

佐久考古学会顧問の与良清先生が亡くなられました。あまりに突然の出来事でおどろいてしまいました。1月の例会で埋蔵文化財白書の作成を決めた時は、与良先生にも是非参加していただきたいという希望がありました。先生の御指導が会員全体に影響をもち心組みがちがってくるからです。

ところが先生は近頃、おからだのぐあいが悪いというお噂があるときかされ、すくなからず気がかりになりました。それから幾日も経たず私達は先生急逝の悲報に接しなければならなかったのです。日夜不眠でご看護なされた御家族様の御愁傷に対し、お慰めする言葉もありませんが、私達考古学会も大きな柱を失ってしまいました。

与良先生のことは、早くからお聞きしていましたが、川上村と小諸市という地理的隔りから、接する機会はほんとうに少なかったと思います。それでも佐久史談会や考古学会でお会いするようになると、旧知の友のように親しくおつきあい願いました。

先生は、会の中では歴史考古学とでもいうべき分野にも広い学識をもち、先生のお力や口添えがなければならないものがたくさんありました。先生は、すでに好評の小諸市史考古編を執筆されていますが、この膨大な資料は先生が自分の足で探し、手で掘り、目で確めた、実に貴重な研究の結果であります。それは、小諸市史であるが同時にわが郷土の後学の為に残してくれた不滅の遺産であると思っています。

先生は、郷土史家としても高名を馳せておられますが、先生の歴史観の底には、考古学的実証があったからで、内容の豊富さに魅力があったのだと思います。先生は、どなたのお話にも出ますが、すばらしい実践力があって、自然保護や文化財保護の運動には地域を越えて御活動されました。先生がおどろくべき勉強家であり、努力家であったということは、先生はまた摂生を重んじ健康なお体をもっていたからだと思います。あの小柄な体でドタ靴をはいて山坂を登ってこられる、遺跡でのあのお姿を今も眼の前に思い浮べます。先生はきっとそうした健康を過信して御無理をされたのではないでしょうか？取り返しがつかない残念なことをしてしま

いました。

それから私には、個人的な小さな思い出が一つあります。去年の秋だったと思います。先生から小諸城大手門構築のお話をおききしました。(実は私の不勉強で大手門を錯角していましたが、今回白倉先生から御案内していただき、始めて御説明をきき豪荘な築構とその美観に圧倒されました)

大手門は仙石権兵衛の構築であるが、莫大な経費についてその資源は金山経営らしいが、はっきりしていないと云うことでありました。私が川上村御所平の古文書の中に「仙石右馬之輔」という人が「川上金山奉行として又ノ沢にあらせられる」「このご仁は権兵衛様ご次男か又は甥なりと言う」、という記録があるお話を致しますと、先生は大変喜ばれて早速お調べになりたいと言われました。その後、お話をする機会をまたず先生はお亡くなりになってしまいました。最近私は、同じ記録が塩尻村の古文書にも出ていることを教えてもらいました。これはほんの一、二行の記録ですが、金山の記録というものが殆んど残っていないので、川上村にとっても貴重な歴史資料だと思います。

それにつけても、先生を惜み、思い出すこと切であります。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第であります。

与良清先生を偲ぶ

黒岩　忠男

与良先生も県考古創立以来の会員でした。たしか昭和43年か4年頃だと思いますが、松本の総会の帰りに、竹内・与良・藤沢の先生方と松本駅から汽車に乗り、総会のこと、小諸市の加増遺跡・郷土遺跡等の発掘調査の件につき話しに花が咲き、何時しか篠ノ井駅に着き、早速汽車を乗り替えて、さっきの話の続きに夢中になっていると、なんだか車内が急に暗さを増し騒音が大きくなり、「おかしいなあ。信越線にトンネルがあったかい。」と本当に不思議に思っているうちに汽車は姨捨駅に着いてしまい、大笑いしたり、困惑したりしたことがありました。

与良先生は、ぽつりぽつり話す話し方をされましたが、本当に話し上手な先生でした。

一つの想い出

島田　恵子

私が今まで生きてきたなかで、最初の出会いが最後の出会いとなってしまったのが、与良清先生でした。

昭和49年の細田遺跡の発掘現場で、先生と同じグリッドに入りならんで半日スコップを握りました。もの静かで、あたたかいお人柄が伝わってくるようでした。なぜかあの日の発掘現場の雰囲気は今でもこころに残っています。

武藤　金氏をしのぶ

武藤金氏略年譜

明治38年８月22日　長野県南佐久郡岸野村字相浜、碓氷与惣吉氏の３男に生る。

明治45年４月　同村尋常高等小学校入学

大正７年３月　尋常高等小学校を卒業する。以来家事の農業と石工を業として専念する。

昭和９年　同郡平賀村字後家、武藤金作氏の４女よし江と婚約整い、碓井家より養子入籍武藤に改姓、以後３男、３女を得て家業に励んだ。

昭和28年　平賀小学校ＰＴＡ副会長に任命される。

昭和37年　ＰＴＡ評議員を退き、ＰＴＡ活動により長野県ＰＴＡ連合会長（中村直人）より感謝状を受く。

昭和40年　佐久史談会に入り会員となる。

昭和41年　野沢郷土史研究会員となり郷土史研究に研讃され豊富な識見と体験を発揮し活躍する。その中で戦後20年代末に台風によって決壊された現青沼小学校南を流れる谷川の石垣堤防は、故人武藤金氏の生涯の事蹟ではなかろうか。知る人ぞ知る後世に伝えん。

武藤氏は考古学にも深い認識をもたれ埋蔵文化財保護に常に積極的に参加されその豊富な体験を遺憾なく発揮して其の真価を究め永く保存に止めた功績は大きい。

昭和46年４月　佐久市新子田　戸坂遺跡発掘調査（以下発掘調査略）

５月　佐久市岩村田　東一本柳古墳

５月　南佐久郡八千穂村　池ノ平遺跡

10月　佐久市長土呂　西近津遺跡

10月　佐久市前山　中道遺跡

昭和47年１月　佐久市長土呂　北近津遺跡

３月　佐久市岩村田　北一本柳遺跡

８月　佐久市西屋敷　下前田原古墳

昭和48年７月　佐久市岩村田　上ノ城遺跡

10月　佐久市砂田　西一里塚遺跡（餅田と併行）

昭和48年12月　南佐久郡臼田町三分　井上遺跡

昭和49年1月　佐久市野沢　三塚遺跡

4月　北佐久郡御代田町　馬瀬口下原1号墳

6月　佐久市今井　今井西原遺跡

8月　佐久市野沢　市道遺跡

10月　佐久市平賀　後家山古墳

10月　佐久市鳴瀬　細田遺跡

11月　佐久市跡部　町田遺跡

昭和50年5月　佐久市野沢　鶴田遺跡

昭和51年5月　北佐久郡軽井沢町　県遺跡

7月　佐久市前山　後沢遺跡

10月　発掘調査の功績により佐久市教育委員会より感謝状を贈られる。

昭和52年8月　佐久市桜井　上桜井北遺跡

10月　佐久市伴野　休石遺跡

12月　佐久市根岸　榛名遺跡

3月　北佐久郡御代田町　下藤塚遺跡

平賀氏城跡保存会長として、「平賀氏城跡」を編集、発刊する。

11月　南佐久郡佐久町　宮ノ本遺跡

昭和54年2月　佐久市岩村田西本町　清水田遺跡

4月　佐久市岩村田　北西ノ久保遺跡

9月　佐久市瀬戸　和田上南遺跡

10月　佐久市長土呂　芝宮A遺跡

10月　佐久市新子田　蛇塚B遺跡

11月　佐久市長土呂　周防畑遺跡

12月　佐久市香坂　兵士山遺跡

昭和55年3月　佐久市長土呂　芝宮B遺跡　調査団長となる。

昭和55年4月6日　永　眠　　故藤昌院金窓浄念居士　俗名

数多くの発掘調査に従事され多くの功績を残したが、遂に病に倒れ幽命を異にし知食となる。茲に追悼の意を表して略譜とす。

武藤　金氏の冥福を祈り安らかに眠れ　合掌

（佐藤　敏）

武藤 金さんとの出会い

島田　恵子

武藤　金さんとの最初の出会いは、私が初めて佐久平の発掘調査を見学に行った、昭和48年11月の上ノ城遺跡の現場であった。

あの独特のヒゲとボクは……。に親しみを感じ1日武藤さんの側で初めての発掘作業のお手伝いをしたのである。

「臼田で近い内に発掘があるから、また出掛けて来なさい。」と言われて別れたのであったが、それから2週間位してジーゼルの中でバッタリお会いしたのであった。この2度目の出会いがなければ、果して考古学を学ぶ現在の私が存在したのだろうかと時々考えるのである。と同時にあのヒゲがなかったならジーゼルの中で会っても忘れてしまって声をかけなかったであろう。それは、当の武藤さんが声をかけた私を想い出すのにしばらくの時間を要したからである。小諸から中込まで向い合いの席に座って話したのであったが、なにを話したかはもう想い出せない。

その後、細田遺跡、後沢遺跡、上桜井北遺跡等の発掘調査でご指導をいただいた。現場での武藤さんは、常に調査団の和を念頭においてその推進役を努めていられた。作業協力の地元の方々とも、いつもなごやかに勉強しながら調査が出来たのも、武藤さんのお人柄と努力の成果であろう。

昭和53年4月、武藤さんは病魔におかされ入院した。6月には私が交通事故の後遺症の2度目の手術を受けるために入院し、1週間程入院生活を共にした。お互の病室を行き来し、私の病室でも武藤さんは人気の的であった。回診の終った午後は、病院の付近のお寺まで散歩に行き、木陰で休みながら健康になったらまた発掘に行く日のことを楽しそうに話していた。

退院後は、「平賀氏城跡」の発行を保存会長としての責務のもとに立派に成し遂げたのである。その後は周囲の者が体を心配し、休むように配慮しても聞き入れることなく、亡くなる寸前まで発掘調査に情熱を傾むけていた。

また、この間には展示会のための準備をおこない土器複原作業は、武藤さんの手によってそのほとんどが完成した。一般市民への啓蒙に終始気を配っていたからである。

退院してから亡くなるまでの2年間、武藤さんの考古学に対する執拗なまでの執念は心がいたむ思いであった。病む体をいたわることなく活動をつづけるのだった。「もっともっと長生きしてほしいから体を大切にして下さい」となんども言った私に対しては、亡くなる寸前まで以前のあの父娘のような親しさで心を開いてはくれなかった。「武藤さん明日も現場に来て下さい」と言われることを喜んでいたからである。しかし、ようやく快復した体も発掘調査に参加するようになってから日毎に疲れが目立ち、おとろえてゆくのが目に見えていたので、私にはとても武藤さんの喜ぶ言葉は口から出なかった。

「どうしてあんなに急いで逝かなければならなかったの！」　天国にいる武藤さんに向ってこう叫ばずにはいられない。

佐久考古学会にとっても、私にとっても武藤

さんの死は大きな痛手であった。しかし、武藤さんの遺してくれた数々のご教示や考古学に対する真摯な情熱は、私のこころの中に生きつづけてゆくであろう。

“武藤さんどうかおやすらかに”

武藤 金さんを偲ぶ

黒岩　忠男

「調査が始まるから出てこねかい。」こんな声が道の向こうから、電話の受話器から聞こえる様な気が何時もしている。

陽に焼けた顔！　何時もニコニコしている顔、髪が後にほんの申訳程度にしか無い頭に真夏の発掘調査でも帽子はかぶらず、手拭で鉢巻きをしている姿。気取り気のない素朴な人柄の武藤さん、こんな武藤さんを本当に好きでした。

入院先の佐久病院から外出許可もまだないのに相変らず頭に鉢巻をして、私の家までのこのこやって来て、「へえ、こんねに良くなったに、又、発掘に一緒に行きやしょう。」と本当に嬉しそうな顔をして言った時の姿が今でも目に見えます。

第2回目の入院前日迄、1日も休まず発掘現場で作業をし、75才の年齢を感じさせない肉体力と精神力に頭が下りました。

武藤 金さんを憶う

林　幸彦

「僕は秋が好きだ。」といつも口ぐせのように武藤さんは言っていた。「どうしてですか？」と問いかけても、そのわけを話していただけなかった。四季の中で春は草木の芽がふき、人間にしてみれば幼年から青年の時であり、夏は草木を含めて生物がいっせいに成長する時期であろう。してみれば、秋はそれらがいっせいに実を結ぶ季節である。しかし、目の前には、厳しくつらい冬がせまっており、その時に備えて草木は、種を守るべく強い穀をおおい、人は食物や燃料を貯える時でもある。換言すれば、有事に備えて己を鍛え磨く時ともいえよう。武藤さんにしてみれば、もっともっと深い思慮、体験のはてに言われた言葉であったと私は思う。いつか同じ様な心持ちで、この言葉の重みが私にも理解できる日が訪れんことを願う。亡くなってもう一年が経ってしまった。私は右も左もわからなかった、上の城遺跡で武藤さんと初めてお会いした。それから8年、私が役所の仕事や現場で難関にぶつかった時、多くの方々に迷惑をかけてしまった時々にいつも叱咤激励していただいた。なにかにつけて武藤さんが身をもって示してくれた人の生きざまはいまも心に鮮明にきざみつけられている。現場で草かきの手を休めれば夏草の向うから、ネズミ色のコートに黒いナップザックをしょって、胸をはって頭にやっとこさ手拭をひっかけた、武藤さんが「やあ、元気でいたか！」って来てくださるようなそんな思いにかられる。

畠山忠雄氏をしのぶ

畠山忠雄氏略年譜

明治44年6月29日　長野県佐久市大字伴野1540ノ2に於て、畠山三寅・ゑつ御夫妻の長男として誕生。

大正15年3月25日　南佐久郡岸野村立岸野尋常高等小学校高等科2年卒業

昭和4年3月20日　長野県立北佐久農学校本科2年卒業

昭和9年3月20日　東京皇典講究所神職養成部2年卒業

昭和9年3月20日　皇典講究所より雅楽ひちりきの修了証を受く

昭和9年3月20日　国学院大学より剣道初段を允許さる

昭和9年3月31日　長野県北佐久郡御牧小学校代用教員を拝命す

昭和9年12月20日　南佐久郡岸野村大字根岸字宮ノ脇村社根際神社社掌に補さる

同岸野村大字根岸字滝ノ山村社平井神社社掌兼補・同岸野村大字根岸字正源村社社掌兼補

昭和10年　北佐久郡南御牧村大字矢島字宮ノ脇村社八幡神社社掌兼補

昭和10年8月～12月　三岡村真顕学園に於て神職講習を受く

昭和15年10月6日～30日　長野県派遣神職として満州小古洞に神社創設のため諏訪大神御分社を奉持して出張奉仕す

昭和13年3月31日　初等科訓導北佐久郡御牧小学校勤務

昭和14年3月31日　北佐久郡中津小学校訓導に任ぜらる

昭和15年3月31日　中津小学校青年学校指導員に補せられる

昭和17年3月31日　北佐久郡岩村田国民学校訓導、本科正教員に任ぜらる

昭和18年6月27日　神祗院、長野県、大日本神祇会長野県支部主催神職講習会に於て修了証を受く

昭和21年3月31日　北佐久郡御牧国民学校訓導を命ぜらる

昭和24年9月　小学校教諭2級普通免許状を受く、同中学校教諭2級普通免許状を受く

昭和27年　南御牧村大字矢島字宮脇鎮座諏訪八幡神社宮司に任ぜらる

昭和27年1月5日　浅科村西中学校教諭に補せらる

昭和30年10月　佐久地方方言の研究を出す

昭和30年12月11日　剣道五段を允許さる

昭和32年５月２日　北佐久郡立科村立立科西小学校教諭に補せらる。教頭職務

昭和32年５月２日　北佐久郡浅科村蓬田八幡神社宮司に任ぜらる、本務。蓬田に転任す

昭和32年５月30日　小諸市山浦西浦神社宮司兼任、同北佐久郡立科村字山諏訪神社宮司兼任

昭和32年５月30日　北佐久郡春日村上沖諏訪神社宮司兼任、同春日村春日社諏訪社合殿宮司兼任

昭和32年６月10日　北佐久郡立科村字山諏訪神社兼任、立科村山辺諏訪神社宮司兼任、同北佐久郡立科村牛鹿諏訪神社宮司兼任

昭和32年６月25日　北佐久郡浅間町今井新海神社宮司兼任

昭和32年７月１日　北佐久郡浅科村甲宮山諏訪神社宮司兼任

昭和32年　月15日　北佐久郡春日村根神社宮司兼任

昭和32年９月30日　北佐久郡誌第４巻の執筆者の１人として執筆

昭和34年４月１日　北佐久郡東村立三井小学校教頭を命ぜられる

昭和37年４月１日　北佐久郡望月町立協和小学校教頭を命ぜられる

昭和37年　長野県考古学会発足、会員となる

昭和42年７月20日　北佐久郡誌資料集の編纂委員の１人として執筆

昭和43年３月31日　願に依り本職を免じられ退職、通算34年間に渡る教師生活の幕を閉じる

昭和43年４月10日　北佐久郡浅科村文化財保護委員会顧問となる

昭和43年９月30日　近代書道開拓者、比田井天来・小琴の書編集委員として活躍

昭和43年11月　東信神社総代・神職研修会に出席

昭和43年11月６日　神宮大麻頒布成績優良につき表彰さる

昭和44年５月　北佐久郡浅科村土合１号墳の発掘調査をし、45年長野県考古学会誌第９号に報告

昭和45年　長野県考古学会幹事任期２年、其の間東信地区会との連絡、後輩の指導等にあたる

昭和45年７月　佐久考古学会発足同時に佐久考古学会員となる。

昭和45年11月30日　上田会場の神社総代・神職研修会に出席

昭和45年９月　佐久市野沢儘田遺跡緊急発掘調査に参加し、報告書の地理的環境分野の執筆を担当する。

昭和46年４月１日　北佐久郡浅科村公民館長に任ぜられる

浅科村体協副会長・五郎兵ヱ記念館建設副委員長・防犯協会理事等兼任

昭和46年８月22日　神社庁主催神職教養講習会に出席その課程を修了

昭和46年９月11日　県神社庁創立二十五周年にあたり35年勤続の表彰を受ける

昭和46年11月９日　佐久市大字猿久保幸神社宮司を兼任。同三河田字土堂諏訪神社宮司を兼任。同新子田八幡神社宮司を兼任。同横和神社宮司を兼任

昭和46年２月20日　神社総代・神職研修会に出席

昭和47年２月　神社庁主催神職教養神社建築講習に出席

昭和47年３月　北佐久郡浅科村久保畑古墳の出土遺物の調査、長野県考古学会誌第18号に報告する。

昭和47年10月２日　神職祭式講習に出席全課程を修了

昭和47年10月20日　多年神明に奉仕の故をもって県神社庁・県神社総代連合会の席上表彰を受く

昭和48年４月１日　任期満了に伴い浅科村公民館長退任

昭和48年８月　神社庁主催神職教養講演会に出席

昭和50年　旧「望月牧」跡に残る須恵器窯址調査を集約、一覧表にして発表

昭和51年　昭和初年浅科村御牧ヶ原須釜出土の鉄鐘につき、無銘小型梵鐘であるが和鐘の初期形態を示す顕著な様式的特徴をそなえた点を究明し、国重要文化財の指定のため努力す

昭和52年　浅科村人権擁護委員に就任

昭和55年７月30日　永　眠

（黒岩　忠男）

畠山先生の思い出

桐原　健

畠山先生には、「信濃史料第一巻」の調査時にお会いしている筈なのだが、申し訳ない次第ながら記憶がない。お世話になったのは開発地域の埋文分布調査の折で、45年には北御牧村、46年は小諸市を一緒に歩いてくださった。46年にはこの他に土合一号墳の保護協議と雨境峠から春日湯沢までの調査にご協力をいただいている。

分布調査の折は与良清先生も居られて、北御牧の時など両羽神社の鞭鞦人調馬師の像をのぞきこんでは渡来人と牧場の関係に思いを馳せ、関連して浅科村蓬田の高良神社は高麗ではないかなど談ぜられた。足をのばして比田井の大宮神社に詣り、「ここにある王塚古墳を掘りたいなどの話があるが、もし、ご遺骨があったら彦狭島王のお墓だとする伝承がパアーになりますから、止めさせるようにいたしましょう。」などと笑われた。あれやこれやで、これは楽しい踏査だった。

雨境峠からの古東山道調査は先生の発意で行なわれたもので、６月12日、折悪しく雨天だったが望月町の大草教育長、同町財産区議長の小林さん、それに土屋長久さんとの５人で出発した。雨境部落の下から開拓道路に入り、浅田切―寺久保―本沢と唐沢の合流点―本沢遡上―大栗と通って春日湯沢に出た。この時の踏査で確認したことは中与惣塚から鳴石を通る様になっている。大栗から鳴石までは１時間半、湯沢・寺久保間２時間、寺久保から鳴石までは３時間ということだった。

土合1号墳の保存では、当時公民館長だった先生が一番熱心だった。佐久で最も副葬品の豊富な古墳だというだけではなく、牧場との関係、東山道との関係を物語る貴重な郷土の文化財なんだと力説される先生だった。

畠山忠雄先生を偲ぶ

黒岩　忠男

畠山先生も、県考古学会創立以来の会員でしたが、発掘調査の現場でご一緒したのは、佐久市儘田遺跡の調査の時だけでした。

先生は、昭和45年、46年と県考古学会の幹事を1期務めましたが、その間役員会・幹事会等の様子、県内各地区の研究活動の様子をコピーして私達に配布してくれたことを覚えています。

当時は、佐久地区にも例会等はなく時々思いついた時に会をもったにすぎない時代だったので、畠山先生からの県下の状勢を楽しみにして嬉しく拝見したことを思い出します。

先生は、寡黙の人でしたが、仲間づくりとか、又、後輩の指導、面倒を大変よくみてくれた先生でした。

押型文土器と畠山さん

渡辺　重義

畠山さんが遺跡パトロールをしている頃である。堂々たる巨体にロイド眼鏡、お得意のスクーターに乗って八幡から軽井沢までとばして来た。「どこかで古い土器が出ている所があるっつう話だが案内しろや。」私もオートバイに乗って弁財(ベゼエ)遺跡に案内した。ここからは茅山式土器が出土している。「うん、好い場所だなあ、これからも何か出土するかも知れねえから時々見廻ってくれや。」と言って立ち去ろうとした時、私は道から5m位の切通しの所で土堤をくずして居た。ポロリと6cm角位の土器が1片出て来た。今まで見たことのない文様なので、私は一気に斜面を飛び降りて畠山さんの所へ持って行った。土器を見た瞬間あの象のような目がカット見開き「辺さん、こりゃあ押型文土器だよ。たまげたなあ、辺さん大手柄だよ軽井沢で縄文早期の土器を見付けたのは。こりゃあよかった。」畠山さんは我が事のように喜んでくれた。そして将来の証拠とするため記念写真を撮った。私はそれまで、押型文土器など全く知らなかった。畠山さんはこの時から10年程前に、望月町の土林から出土した山型文土器のことで既に知識を得て居たのである。

あ　と　が　き

編集委員長　井出　正義

故人となられた佐久考古学会の先輩、竹内、輿水、与良、三氏の追悼号を企画してからもう三年になる。その間さらに武藤、畠山両氏が相ついで逝去され、一層のさびしさを感じることになった。

昨年、五氏の追悼号として企画を改めて以来は、会員多数の協力が積極的に結集され、4月5日の原稿締切日には予定原稿のすべてが提出され、17日の編集会議で最終的な打ち合わせがなされた。

故人各氏について、年譜と追悼文を各一編、他に会員の自由投稿による思い出の記を一、二編とする。これが乏しい会計をやりくりする佐久考古学会の精いっぱいの企画であった。しかし、県史の桐原健先生からは、特に心あたたまる思い出の文をいただくことができました。郡外会員の五十嵐幹雄氏からは、大先輩でなければ語ることのできない貴重な研究者の人間的交渉の一断面を語ってもらうことができました。会員一同にかわって厚く御礼申し上げます。

会員多数の協力が見事に結集したこの追悼号の作成が、今後の佐久考古学会の歩みの上に大きな節目となり、発展の力となることを信じます。

さいごに、この追悼号のために島田恵子会員に編集作業いっさいに格別の御努力をいただき、また、表紙は福島邦男会員に作成していただいたことを付記して感謝いたします。

1981年5月27日

佐久考古 No.5
(追悼号)

発行者　由井茂也

発行　長野県佐久考古学会
(〒385佐久市岩村田住吉町1040/7
電02676－8－0617 木内 捷方)

編集者　井出正義　黒岩忠男　佐藤　敏
木内　捷　福島邦男　島田恵子

印刷　株式会社　佐久印刷所